ROOTS

切香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＲＯＯＴＳ

【Ｎコード】
Ｎ９６９２Ｄ

【作者名】
切香

【あらすじ】
死神と破面の全面戦争から５年。恋人の乱菊と暮らす日番谷は中２・１７５センチ（！）人として平和に生活していた恋次・ルキア・一角・弓親の運命は、クロサキ医院で再会してから狂ってゆく。そして、一護の口から語られた５年前の事実を前に、死神達の決断は？前半第一部（１話～４６話）更新済。※日番谷と乱菊、恋次とルキアで恋愛色があります。捏造設定も多いため、苦手な方は閲覧をご遠慮ください。

ＶＯＬ．０１　擦れ違う者達―１　［陽の当たる１Ｒ］

そこは何年も光も差さず、人も訪れない、ぬくもりを忘れた場所。
地面の砂塵が風に吹き上げられ、宙に舞い上がる。

地の色も、空の色も、砂埃と同じ灰色だった。
その灰色の中に埋もれるように、崩れた建物の残骸が、鈍色（にびいろ）の景色の中に沈んでいる。

折れた刀があちこちに散乱する中、刀や板切れが、まるで不ぞろいな剣山のように突き立った地が見えた。

その地に、ふと、一陣の風が吹きぬけた。
そして、その風を見届けた人影が、ひとつ。

ざっ、ざっ、と草履の足を踏み出すごとに、足元の砂埃がかき乱されて舞った。
「知らなくて、良かったのに」
不ぞろいな剣山の中を、固く口元を引き結び、うつむきながら、通り抜ける。
「求めてはいけない、こともあるのに」
黒髪、が。風に溶けるように、宙に踊る。
「夢はいつか終わると、分かっていたのに」
その頼りなげな足取りが、不意に、止まった。

「ルーツに辿り着いた、その瞬間に」
膝の力が抜け、その人影は、音もなく地面に崩れ落ちた。

その場に落ちた、小さな珠を、手のひらに包み込む。
慟哭が、灰色の空に吸い込まれた。

ＲＯＯＴＳ　――　ルーツ　――

第一部

だって、ヒールが磨り減るもの。
駅から徒歩５分、ワンルームの物件を選んだ、アイツの言い分はそれだった。
２人で暮らすには、狭い、暑苦しい、プライバシーが無い。
そんな俺の反撃は、さらりとかわされた。

カッ、カッ、と高い音を鳴らし、街を闊歩するあの女には、都会が似合う。
ねぇ、飲みに行こうよ。あんた中学生？それが問題？
ねぇ、遊びに行こうよ。
ねぇ、一緒に暮らそうよ。
ぐいぐいと強引に、俺を知らない場所へ連れて行く、強引な足音。
ペースを崩されるのは嫌いな俺だが、相手が松本乱菊の場合に限っては、そうでもないらしい。

レースカーテンを通り抜けた午後の陽光が、ちらり、ちらり、と白いシーツの上に光の綾を作った。
近くの高校のチャイムが、明るい水の底のような、この部屋にまで

届いてくる。
賑やかに笑いさざめきながら、家の下の道路を、高校生達が歩いてゆく足音が聞こえる。

ぱらり。
冬獅郎は、中学校の下校途中に買った本を、腹の上でパラパラとめくっていた。
セミダブル・ベッドに、中学生2年生にしては長身の、１７５センチの体を仰向けに投げ出している。
銀色の髪が柔らかな光を放ち、切れ長の二重の瞳は、今は少し眠そうに、細められている。
深い蒼碧の瞳が、本の上をさまよう。

つまらない本だ、と思う。
つまらない本を読むのは、黙って座ってるよりも退屈だ。
中途半端に解いた制服のネクタイを、白い指がもてあそぶ。

なんで、こんな本、買ってしまったんだか。
ベッド脇に置いてあったマジックペンに、戯れに手を伸ばすとキャップを取り、表紙に向き合った。
ワンルームの向こうからは、シャワーの音がずっと聞こえている。
キュッ、と音を立てて蛇口を閉める音が、やけに大きく響いた。

日当たりのいい、部屋がいいんだ。
交渉の果て、２ＤＫの部屋を諦めたあの子は、あたしに向かってそう言った。
お肌が焼けるじゃない。
あんたの肌は真っ白だからさ、日にも焼けないからいいけど、あた

しは焼けるのよ。
代わってよ。
そんなあたしのワガママを、あの子はあの、蒼碧の瞳で受け流した。

空の蒼。海の碧。
そんなフィルターを通して世界を見てるあの子の視界は、どんな風なんだろう。
こんな灰色の都会も、輝いて見えるのかな。
少なくともあたしは、日番谷冬獅郎の隣に立って初めて、世界が色に満ちていることに気づいた。

健康的な、少し日に焼けた体を、温かな湯が滑り落ちてゆく。
バイオリンのようにリズム感のある体型。金色の髪。すらりと伸びた身長。
男も女も振り返るのを、当たり前みたいに思ってた。
ただ1人、あたしを風景の一部みたいに受け流した、あたしの半分くらいしか生きてない子供に会うまでは。

金色の髪が、バスルームの蛍光灯の光を受けて、鈍く輝いている。
バスオイルの人工的な花の香りが、バスルームを満たしている。
バスルームの扉を開け、隙間から手を伸ばして、かけてあったバスタオルを手に取った。
ポタポタと水滴を落としながら、洗面所に足を踏み入れた。

VOL．02　擦れ違う者達―2　［1／2の恋人］

「進路面談」
その途端、ドアに隔てられたワンルームから、冬獅郎の声が聞こえた。
「ん？高校の？」
うん、とはっきりしない声が聞こえる。
「今週末、中学校で面談があるんだ。保護者も連れて来いって」

そりゃ、ムリね。
化粧水を手に取りながら、乱菊は思う。
冬獅郎の親は、遠く離れたノルウェーにいるのだと、一緒に住み始めた頃冬獅郎に聞いたことがある。
親は日本人だが、祖父だか曽祖父だかがノルウェーの人間で、冬獅郎も9歳まではノルウェーで育ったらしい。

「そこで、『自称親戚』のあたしの登場って訳ね」
鏡の中の自分の顔をチェックしながら、乱菊が返した。
よし、残業疲れでついてた、かすかなシワは消えてる。
大家にも周りの人間にも、日本に身寄りがいない子の面倒を見てる、親切な従姉（いとこ）のお姉さん、で通している。
まぁ、バレてるかもしれないけど。

「いいけど、さ」
隣においてあった洗濯機の上に置いた、下着を手に取った。
まだ濡れた体にかまわず、手早く身につける。
「高校に行くんだから、親にも連絡取っときなさいよ」
「分かってるよ、金だってかかるし。いつか返すっていっても、や

っぱり・・・」
「金のことでぐだぐだ言うんじゃない」
乱菊は、わざと蓮っ葉な口調で言い捨てる。
「都心のＯＬ、なめんじゃないわよ」
冬獅郎１人高校に行かせるくらいじゃ、消化しきれないくらいの金が、預金口座にはうなっている・・・
とまでは言わないけど、扶養家族が一人増えたところで、生活には困らない。

「あたしが言ってんのは、親と仲良くしてなさい、てことよ」
「・・・お前だって、親と連絡とってるの、見たことねえぞ」
どこか拗ねたような冬獅郎の声に、乱菊はふと、思いをめぐらせる。
そういえば・・・あたし自身、家族と連絡取らなくなって、どれくらいになるか覚えてもいない。
薄暗い洗面所の中で、金色の髪がけぶるように輝いているのを見つめた。
あたしの体にも、どこか異国の血が流れてる、らしかったけど。
アメリカだったか？それともイギリスか。前に親に聞いたかもしれないし、単なる想像かもしれない。

もともと縁が薄いのか、あたしの情が薄いのか。
きっと、都会だから、だ。
都会には、自分のルーツ、なんて面倒くさいものを、持ちこまなくていい気楽さがあるように思う。

「あたしはいーのよ、もう大人だから」
どういう論理だ、と冬獅郎がぼやく声が聞こえた。
タオルで髪から落ちる水滴を拭い、乱菊は下着姿のまま、ワンルームに続くドアを開けた。

ベッドに寝転がった冬獅郎の横顔に、チラリと視線を走らせると、目の前の冷蔵庫を開ける。
中のミネラル・ウォーターを手に取ると、直接ボトルに口をつけて、一気に半分ほど飲み干した。
カタリ、という軽い音に振り返ると、冬獅郎はベッド脇のテーブルに、ペンを置いたところだった。
その視線は、乱菊が出てきてからずっと、本に注がれたままだ。

「冬獅郎・・・女の裸より本かよ」
「見飽きた」
乱菊を一瞥すると、すぐに本に視線を戻してしまう。
乱菊はムッと口をへの字に曲げると、大またでベッドに歩み寄った。
「こんな美人を捕まえて、見飽きたって何よ。それでもついてんの？アンタ」
ガッ、と膝をベッドにつくなり、冬獅郎の制服のベルトに手をかけようとする。
その指先を、冬獅郎の膝がブロックした。

「邪魔すんな、人が読書しようとしてんの・・・」
冬獅郎が言い終わるよりも早く、乱菊はその本の背表紙をわしづかみにする。
「オイ、何を・・・馬鹿！」
冬獅郎の声が、初めて大きくなる。
乱菊が、いきなりその本を、開いた窓から外に放り投げたからだ。

「オイ！」
「あ、高校生がこっち見てる」
身を起こそうとした冬獅郎の肩に、赤いマニキュアが光る指を置き、

乱菊が窓から下を見下ろした。
「起きてもいいけどさ、昼間っからイチャついてるカップルって、噂になっちゃったりして」
「・・・いっぺん死ね！」
冬獅郎は、起きるのを諦めると、顔の上に手のひらを置いた。
やってられない、という風情である。

指の隙間からの視界で、乱菊が窓の外を見下ろして、笑顔で手を振るのが見えた。
恥を知れ・・・
何しろ、乱菊は下着以外は何も身につけていないのだ。
「男のほう、髪型は馬鹿みたいだけどイイ体してんじゃない。女の子もかわいいわね、胸は無いけど。あ！逃げた」
確かに、昼間っから乱菊の下着姿をみたら、逃げ出したくなるかもしれない。

「下りろ、離れろ、近づくな！」
冬獅郎の憤懣(ふんまん)やるかたなし、という声に、足の下の冬獅郎を見下ろす。
「あたしを見て」
「見ない。そんなにサカってんなら、駅で誰か見つけて抱いてもらえよ。徒歩5分だ」
冬獅郎は顔を背け、目を閉じた。

今度は、ムッとした視線を、乱菊が冬獅郎に向けた。
あたしの色香に揺るぎもしない、ナマイキなガキ。
あたしの前では、何でも言うなりの男なんて、1ダースは優にいるのに。
そう思った乱菊は、憎々しい年下の恋人の顔を見下ろした。

中学2年生、１４歳。年齢はあたしの１／２、身長はあたしより2センチ下。
銀色の柔らかな髪。女もうらやむほど、透明感のある白い肌。蒼碧の目。
この繊細な色彩は、１／４だか１／８だか、体を流れるノルウェーの血から来るらしい。
制服のネクタイは半端に解かれ、鎖骨がのぞいている。
一緒に暮らしたこの半年で、華奢だった体も、一気に男らしく変貌していった。
きっと半分以上、あたしのおかげだ、と乱菊は思う。

中学の成績は、文系・理系・体育・芸術、何がこようがオール首席。
ナマイキで、強引で、自分勝手で、無愛想。恋人にも甘い言葉ひとつ吐かない。
腹が立つのに、それがハマってしまう厄介な少年。

「分かったわよ、負けたわよ、あたしが」
乱菊は立ち上がった。
「本、取ってくるわ」
下着のまま、勇ましく立ち上がった乱菊の手を、冬獅郎の手が捕まえた。
ふわり、と体が宙を舞い、乱菊の体はいとも簡単に、ベッドに沈む。
乱菊が何か言う前に、そのこめかみを撫で、指がスッと金色の髪の中に差し込まれた。
髪を撫でる、優しい手。
それだけで猫のように、ごろごろ喉を鳴らしたくなってしまう。

「いい」
見上げれば、至近距離に、冬獅郎の蒼碧の瞳があった。

乱菊はそっと目を閉じ、自分より少しだけ広い、日番谷の背中に手を回した。

――　生意気で、強引で、自分勝手で・・・

乱菊は、そっと言葉を付け足す。

――　そして、本当は、誰よりも優しい。

VOL．03　擦れ違う者達―3　［幼馴染］

「なぁ恋次、あっち」
コンビニの中で、ルキアの小さな手が、恋次の袖を引っ張った。
細い指の感触を腕に感じ、恋次は心中ドキッとする。
「なんだよ？」
それに気づかないフリをして、わざと荒っぽい声を出した。

「ちょっと袖を引っ張っただけだろう、そんな乱暴な声を出すな」
ルキアは眉間にシワを寄せてそういうと、恋次から少し離れ、歩き出す。
「ホラ、新発売らしいぞ、うまそうだ」

――　また、変な菓子を・・・
イチゴジャムが中に入ったチョコの上に、更にホワイトチョコだと？
甘いものは嫌いじゃないが、これはアンマリにアンマリな気がする。

「拷問かよ？」
「分かった分かった、飲み物はアッサリ系でいいから」
「ウーロン茶でいいな？」
「メロンソーダがいい」
「アホか」

たわいも無い会話を交わしながら、慎重に吟味しながら商品を選び、
レジに向かう。
「私が半分持つ！」
「いいって」
ふたつの袋を両方手に持った恋次に、ルキアが声をかけた。

だが、恋次は無言で両方を持ち上がると、有無を言わさず、大またで出口に向かった。
「待てって！」
恋次は、ルキアよりも４０センチほども背が高い。
早足になられると、ルキアは走らなければ追いつけない。
その、制服の広い背中を見て・・・ルキアはふふっ、と微笑んだ。

児童養護施設で、赤ん坊の頃に出会った、らしい。昔過ぎて覚えていないが。
中学に入学すると同時に、一緒に施設を出て、共に1人暮らし。
テスト前の勉強会をしよう、と恋次に切り出されたときは、心底意外だった（恋次は勉強嫌いだったはず・・・）が、久しぶりに恋次の部屋に行くのも悪くない。

――　素直じゃ、ないな。
本当は、気持ちが弾んでいる。
ルキアを肩越しに振り返り、歩幅を緩めた恋次に、ルキアはすぐに追いついた。

「養護施設の先生に連絡、とってるか・・・？」
ルキアは、横に立つ恋次に声をかける。
恋次は、いきなり投げかけられた質問に、目を丸くした。
「いや、とってねえけど。なんでだ？」
「イヤ・・・」
ルキアは、何か言おうとして、言いよどむ。
「何だよ、言えよ」

「遠くにある訳でも無いのに、出てから一度も連絡を取っていないな、と思ってな。
先生にとっても、担当の子供のひとりだったということなのかな」
児童養護施設、と言うが、実質は孤児院だ。
ルキアも、恋次も、ともに孤児院の入り口に捨てられていたという。
親は死んだわけじゃない。恐らく、この空の下に生きている。
そして恐らく、私たちのことなど忘れている。
文字通りの、「捨て子」。

「会いたいんなら、お前から会いに行けばいいだろうが！カンタンな話だろ」
恋次ならそう言うだろう、と予想した通りの言葉が返される。
生まれた時、場所。生んだ人。ルーツを知らぬ真っ白な状態を、プラスと捉えられる男だ。
でも、私は違う。

「そうなのだが・・・確かめたくは、ないのだ」
「なんで？」
「もしも、私のことを忘れていたとしたら。誰が、私を望んでくれるのだ？」

夜、1人で料理をするときとか。登校するとき、玄関で靴に足を入れる瞬間とか。
1人になった心の隙に、その恐怖はルキアに忍び寄ろうとする。
もし、誰も、自分を望んでくれなかったとしたら。
足場を持たない人間は立てない。羽ばたくことなんて、余計できやしない。

「俺」

「は？」
最小限の短い返事に、ルキアはきょとんとして、恋次の背中を見た。
続きの言葉は与えられず、広い背中は、怒り肩のまま遠ざかる。
文脈を頭の中でつなげて、ようやくルキアは理解する。
その頬に、ゆっくりと、微笑が広がった。

小走りにその後姿に追いつくと、これまでより少しだけ、恋次に身を寄せて歩いた。
体温を感じるほどの距離では無いけれど、それでも恋次の近くは、湯に包まれたかのように温かかった。

ＶＯＬ．０４　擦れ違う者達―４　［血縁考察］

その時。ルキアは、道路の先に落ちていた何かに気づいて、目をそちらに向けた。
「なんだ、あれ」
「本だな」
恋次は歩み寄ると、本をつまみ上げた。
ペーパーバックなどではない、しっかりとした作りの本だ。

「ゲッ、英語だ」
表紙を見るなり、恋次は顔をしかめた。
「誰かが落したんだな」
ルキアは本を見ると、周りを見回した。すると、目の前のマンションが目に入った。
「ここ、あの従姉弟が住んでるっていうマンションじゃないか？」
「ん？あぁ」

ここ数ヶ月、高校で噂になっている、美女と美少年が住むマンション。
ルキアも、そのうちの女のほうを見たことがある。
金色の髪を腰までなびかせ、肩で風を切るように歩く。そのヒールの音の高さを、思い出した。

外国の血が入っているのだろうか。彫りが深く、目は蜂蜜色だった。
少年のほうを見たことは無いが、負けず劣らずの美形らしい。
人のいいマンションの大家から誰かが聞きだした、「従姉弟」説は、もはや高校の誰もが知っていた。
それが本当なのか嘘なのか。
そんな話題が昼休みに出るたび、誰もがついてゆけるような。

あの2人は、高校ではかっこうのネタである。

――　従姉弟、か。

ルキアが知りようも無い、血のつながり。知らないぬくもり。

仮に違うとしても、従姉弟と名乗りあうような深い関係が、どのように作られるのかルキアにはわからないのだ。

きっと、ルキアのような悩みとは、無縁なのだろう。

どちらにせよ、私が知りえぬ世界の話だ、とルキアが視線を落そうとしたとき。

ふと・・・誰かの視線を感じた。

「うわっ！」

「なんだ、ルキア・・・おわっ！」

2人の視線は・・・マンションの一室に注がれていた。

その窓の向こうで、金色の髪を持つ女が、こちらを見下ろしていた。

ただし・・・小さな黒い下着以外は、何も身につけない姿で。

女は、2人と視線が合うと、ニッコリ笑って手を振った。

「す、すんません！！」

とっさに、恋次が謝ると、そのまま道路をダッシュして・・・逃げた。

「お、おい恋次！」

ルキアも、慌ててそのあとを追う。

――　なんだ、あの胸は・・・

ルキアは、ようやく足を止めた恋次の隣で、大きく何度か、喘いだ。

ボーリングの玉のようなあのボリューム・・・あんなもの、初めて見た。

思わず自分の胸に目をやって、同じようにルキアの胸を見た恋次に気づいた。

「死ね、貴様ァ！今何を考えた！」
「え？イヤッ、俺は！」
赤面したままのけぞった恋次を、ローファーの足で蹴りつけた。
「んなことより！俺、本持って来ちまった」
恋次はすかさずルキアから距離をとると、本をルキアの前に突きつけた。

ルキアが受け取り、パラパラとページをめくって・・・しばらくして、唸った。
「さっっぱり、分からぬ・・・」
細かい英語がびっしり書かれ、ところどころに、訳の分からない数式のようなものが見える。
理系の本なのだろう、ということくらいしか分からない。

「お前それで、外国の大学行きたいとか、よく言えるよな」
「うるさい！理系でなければ、私にも分かる！」
「どーだか」
やや打撃から立ち直ったやり取りをしながら、近くの駅へと足を踏み入れる。

「これ、どうする？警察に預けるか」
階段を上り、ホームに辿り着いたとき、ルキアは本を持ったまま、恋次を見上げた。
「かまわねーよ、ここに置いとけ」
ホームのベンチの上に、恋次は本をポンと放り出した。
「オイ、でも・・・」
「このテスト前に、そんな面倒くせえことできるかよ。行くぞ」
ちょうどホームに滑り込んできた電車を見て、恋次が言った。
せっかくの一日を、こんなことで邪魔されては敵わない。そんな気

持ちだった。
それでも本を気にする、ルキアの華奢な肩に手のひらを置いて、開いた電車のドアのほうに歩き出す。
下りてきた客の後に乗り込もうとして、すれ違った二人連れに・・・
恋次は思わずぎょっとした。

どちらも、就職活動中なのだろう、リクルートスーツに身を包んでいる。」しかし、その風体が問題だった。
1人は、ヤクザのように強面で、鞄よりも竹刀でも持っていたほうが似合いそうだ。
しかも、生来なのかそり上げているのか、頭には髪一本無い。
そしてもう1人は、眉目秀麗なのだろうが、その前髪を、七色に染め分けていた。
そして、肩のあたりでオカッパのように切りそろえている。
こんな髪型、どうやって美容院でオーダーしたのだろう。

何者なのかサッパリ分からないが、恋次にも、この男達を採用する企業がないことくらいは分かる。
オカッパのほうの男が、チラリ、とすれ違いざまに恋次を見た。
「赤いウニ頭か。・・・美しくない」
「なんだと・・・」
恋次は気が短い。ルキアが隣にいなければ、すぐに殴りあいに突入だっただろう。
少なくとも、こんな変な髪形の男にだけは言われたくない。

フン、とその男が興味なさそうに鼻を鳴らす。
「コンの、オカッパが！」
恋次がそういった瞬間、プシュー、と音を立ててドアが閉まった。
ドアの中と外で、形相を変えた2人の男がにらみ合う、中途半端な状況のまま。

電車は、無表情に発車した。

VOL．05　擦れ違う者達―5　［AT　A　BAR］

「もぉ、やってられねえな。とっとと雇えってんだ」
カウンター席に陣取り、一角はまた、グラスに湛えられた琥珀色の液体を、一気に飲み干した。
「風情が無いねえ。こういうのはもう少し、美しく飲むものだよ」
カウンターの向こうに佇む、バーテンダー姿の弓親が、シャンパングラスの足を指に挟み、空中で揺らす。

赤い液体が、グラスの中で優雅に踊った。
そのまま、スッと一角の前に、滑らせるように置く。
田舎から出てきたときは、カクテル一つ作れなかったくせに。
この5年で、随分板についてきてる、と一角はチラリと思う。
「お前はいいよな、イザとなったらこの店で働けばいいだろ。昼間働いてる美容院でもいいだろうし」
「一角だって、たまに顔だしてる、剣道教室の先生やればいいじゃない」
他の客のオーダーに答えていた弓親が、横目で一角を見て、笑った。

強面で、無口で、傍目から見ればヤクザの跡取りくらいにしか見えない一角が、人並みはずれて面倒見がいいのを、弓親はよく知っている。
ある日通りすがった剣道教室の、あまりのお粗末さに呆れた一角が、その教室で剣道を教えだして、2年になる。
少なくとも、袴姿は、今のリクルートスーツ姿よりもよっぽどハマっていた。
似合わない服を着なければいけない仕事など、つくものではない。
弓親はそれを見て思った。

「そんな、カンタンじゃねーんだよ」
一角はため息交じりに言う。
「もう連絡とってねーけどよ。父親、今年定年なんだよ。これ以上ほっとけねーだろ」
「・・・まぁ、ね」
その言動が、田舎では浮きまくっていた一角と弓親が、はじき出されるようにして故郷を出て、5年。

まっとうに働いて、家族を作って、老いて、死んでゆく。
田舎町で、人生の選択肢なんてそんなにある訳もなく。
レールが見えたとき、俺達は離脱を望んだ。

具体的な将来像が見えなくても、自分達には、自分達にしかできない何かがあるはずと、信じていた。
バイトをして、何とか食いつないできた。あの時の気持ちは、今も変わらない。
でも・・・
つまらない自分のプライドとか、意地とか、夢とか。
老いてくる親のことを思えば、そんなもの、何の価値があるのかと、思うことがある。
誰かに同じことを言われたら、間違いなくそいつをぶん殴るだろうけど。

だからといって、リクルートスーツに身を包んで就職活動をしてみたところで、全然そぐわない。
4年間を大学というモラトリアムで過ごした学生とは、明らかにまとう空気も違うのだった。
一旦レールから外れた人間に、この社会は冷たいのだと思い知った。
後悔は、しないけれど。

「・・・一角、見ない本だね」
他の客のオーダーを一通りこなした弓親が、ふと静かになった一角を見た。
「・・・あぁ。拾ったんだ、さっき通った駅のホームで」
薄暗いバーの光の中で、弓親は一角の手元を覗き込んだ。
それは立派な表紙の洋本で、中には、細かい英語と、いくつかの図形や、数式が見て取れる。

「・・・この英語、分かるんだ？」
「読めねえよ。でも、数式とかの意味は何となく分かる」
Σ、α、β。さまざまな数字が並ぶ数式を、じっと見つめながら、一角が呟く。
「数式ってのはキレーだよな。中途半端なものがねえ。完璧だ」
こんな格好をしていても、数学の成績は、全国模試でもトップレベルだった。
それでも、決まりきったレールを嫌い、自ら選んで未来を棒に振った一角は、馬鹿だし不器用だけど、少なくとも醜くは無い。

弓親が見つめる中、一角は、その本をパタリと閉じると、椅子の上に置いた。
「どうせだから、持っていったら？」
「イヤ。どうせ、どこかの金持ち大学生の持ち物だろ。俺が持ってても、そぐわねえ」
「持ち主の名前とか、どこかに書いてないの？」
「今ひっくり返してみたが、何も書いてねえよ」
一角はそれだけ言うと、本をそのままに立ち上がり、スーツの上着を肩に引っ掛けた。
「帰るぜ」
「あ、僕も行くよ。今日は手伝いで入ってただけだから、抜けられる」

2人がバーを出て、しばらく経ったころ。
1組の男女が、同じバー「神無月」のカウンターに並んで腰掛けた。
しっとりとした琥珀色の光が満ちた店内に、そのふたりはしっくりと馴染んでいる。
「すごいよね、医大って、難しいんでしょ？勉強大変？」
穏やかなピンクベージュに飾られた女の華奢な爪が、女の手にしたグラスを彩った。

「イヤ、楽しーよ。まぁ、忙しいけどな。オヤジの跡を継ぐのも悪くねえ」
「変わったね。高校のころは、お父さんとケンカばっかりしてたのに」
男の口がへの字に曲がるのを見て、ふふっ、と女は微笑んだ。
骨太な指が、ガラスの小さなトレイに盛られたナッツをつまんだ。
オレンジ色の派手な色の髪も、このうす暗がりの中では、落ち着いた茶色に見える。

「お前こそ、どうなんだよ？卒業したらどうするかとか、決めてんのか？」
「うーん、あたしはね」
桜色の、唇の口角が持ち上げられる。
「決められないの。食べることも、かわいい服も好きだし。動物も本も、旅行も好きだし」
「お前らしいよ」
男は微笑むと、空になった女のグラスを見ると、スッと手の平をバーテンダーに向けた。

「同じものを」
そう言う女を横目で見た、男の瞳が、ふと少し離れた椅子に注がれる。
「どうしたの？」
「イヤ」
男はスツールから滑り降りると、その椅子に歩み寄った。
そして、いつから置かれていたのか、その本をつまみ上げる。
その本の表紙に視線を落としながら、女のところに戻ってきた男の動きが、ふと・・・止まった。

無言で、その表紙を凝視する。
その唇から、言葉が漏れた。

「・・・冬獅郎」

女がピクン、と反応する。
そして、同じようにスツールから降り、駆け寄りながら男を呼んだ。
「黒崎くん。今なんて」
「・・・井上」
男・・・黒崎一護は、自分を見上げる井上織姫を見返した。
その首が、ゆっくりと振られる。
「まさかな。そんな訳ねえ・・・勘違いだ」

VOL．06　幸せの色＿1　［小ぜりあい］

次の日の朝。
「うっ！」
誰かの腕が冬獅郎の胴を直撃し、冬獅郎はうめき声と共に目を覚ました。
「てめっ、松本、何を・・・」
「キレイなお姉さん、お目覚めいかがですか？」
目の前にあったのは、寝ぼけ眼で迫る、オカッパの男だった。

異物だ。
初めにそう思った。
「誰だお前！」
冬獅郎が叫ぶと、オカッパ男は、目をしばたいて冬獅郎を見下ろすと・・・動じることもなく、再び迫ってきた。
「美しければ男だろうと女だろうと、僕の許容範囲だよ」
「俺は許容しねえ！」
ドカッ、とその腹を蹴りつけた・・・その途端、足首に激痛が走った。

何だ何だ？
何があったんだ？
足首を両手で押さえ、覚えのある痛みを頼りに、昨夜の記憶をたどろうとした。
伸びているオカッパ男の向こうで、大の字でイビキをかいてるハゲ男を見て・・・冬獅郎はうんざりした。

昨夜、深夜1時ごろ。
冬獅郎と乱菊は、ともに黒と白のトレンチコートを羽織り、夜の街を並んで歩いていた。
「ねー、飲みにいこうよ」
部屋にいた乱菊が、前後の会話の脈絡も無視して、いきなり言い出したのが夜の10時ごろ。
「ひでえ保護者だ。未成年を酒に誘うな」
そういいながらも、夜出歩くのは嫌いじゃない。

ただ、乱菊のザルのような飲みっぷりは、失念していた。
冬獅郎も、特に酒に弱いほうではないが、乱菊と渡り合うには無理があった。
ゆらり、と足元が揺れる。
先をいく乱菊が、少し小さくなる。

空を見上げると、こんな都会でも、北斗七星ははっきりと瞬いていた。
5年前まで暮らしたノルウェーでも、星はきれいだったような気がするが、正直あまり覚えていない。
少し火照った頬に、まだ少し冬の冷たさを残した、春の風が心地よかった。

その時、するり、と。
冬獅郎の両肩の後ろから、手が伸びた。
「こんな深夜、女の子が出歩いてたら、危ないよ?」
耳元でささやいたのは、高めだが男の声。
反射的にその手を振り払うと、その場から跳び下がり、男と向き合う形になる。
その切れ長の目で睨みつけると、冬獅郎に手を回そうとした男は、目を見開いて見返してきた。

「・・・男の子」
「俺のどこが女に見えるんだ、言ってみろ！」
ふざけた髪型しやがって。と冬獅郎は思う。
肩の辺りで切りそろえた黒髪。
なぜか、前髪を七色に染めているのが異様だった。
女っぽい優男で、きっと美形なのだが、髪型のせいで、とてもそう思えない。

ふざけんじゃねえ。
冬獅郎がそう言おうとした時だった。
「ふざけんじゃないわよ！」
乱菊の声に、冬獅郎はハッとそちらに目をやった。
２０メートルほど向こうの自販機の前で、乱菊と、長身の男がなにやら言い争っている。

「・・・一角」
オカッパ男が、そう呟くのが聞こえてた。
「てめえの連れかよ」
冬獅郎はそう吐き捨てると、言い争う2人に向かって駆け出した。

自販機の光が、髪一本ない男の頭を照らし出していた。
「アァ？この女。俺に絡んでくるとはいい度胸だな」
別に絡んだわけじゃない。乱菊はそう思うが、そう言われては引き下がれない。
「アンタこそ、あたしに絡んでくるとは、いい度胸してるわね」
そのまま、言い返してやった。
ハゲ男が、一歩乱菊に向かって歩み寄った時。

「近づくな」
ガッ、と一角の右手首が掴まれ、後ろに引き戻された。
一角が振り返ると、そこには、見慣れない銀髪の男が立ち、一角をまっすぐ睨みつけていた。
自らは剣道の黒帯を取っているせいで、相手の体格を見るのは、一角の癖だ。
身長は大人並みだが、まだ筋肉とか脂肪が追いついてない、そんな未熟な細い体格。まだ、子供だ。
それでも・・・
一角は、少年の顔を見返した。
こいつ、出来る。

VOL．07　幸せの色―2　［冬獅郎VS一角］

「冬獅郎かっこいい！惚れた！」
「まぜっかえすな、松本。下がってろ」
目の色一つ変えずに言い返し、一角の手首を握る腕に、更に力をこめてきた。
細腕とは思えない力だ。

「ちょっと待った、待った。何があったんだい」
その場に割り込んできたのは、弓親だった。
「状況を説明しなよ。いきなり暴力沙汰なんて野蛮なことは、やめなよ」
いきなり後ろから抱き着こうとしといて、立派なことを言う。
冬獅郎はチラリと弓親を睨みつけた。

「いいわ、説明しましょ。
私が、自販機で冬獅郎に水でも買ってあげよう、と思って立ち止まったの。
そしてたら、目の前にこの男がいて。頭がまぶしかったから、言ったの。『ハゲ』て」
「誰がツルッパゲだ、このアマ！」
「あたしはただ、身体的特徴を言ったまでよ！ハゲてんじゃない！」
「俺はハゲじゃねえ！剃ってるだけだ」
「そんなん、見た目で分かるわけないでしょ！言われるのがイヤなら、生やせばいいでしょ？髪」
「・・・」
「生やせないんだ、ハゲ」
「黙れ！」

冬獅郎は、思わず一角を掴んでいた手を離していた。
アホらしい・・・
見れば、一角とかいう男も、酒が入ってるように見える。
ただの酔っ払いのケンカか。

「ハゲハゲ連発したのは悪かった。でもそれだけだろ？」
ここは、俺が大人にならなければ。
冬獅郎は仕方なく謝ると、一角の前を通り抜け、乱菊に歩み寄った。
そのままとっとと、家に帰って寝よう。そう思ったときだった。

ヒュン、と男の腕が宙を切り、冬獅郎は反射的に振り返った。
「思ったとおりだ」
見下ろした一角の瞳と、冬獅郎の瞳が交錯した。
「避けもせず、真っ向から受け止めるとはな。お前、かなり好戦的だろ」
まっすぐに飛んできた男の拳を、冬獅郎の手のひらが受け止めていた。
本当は、自分がよければ乱菊に当たる恐れがあったからだが・・・
まぁ、そこまで言う気はない。
好戦的なのを、否定する気もなかった。

「俺は斑目一角。てめえは」
「・・・日番谷冬獅郎だ」
冬獅郎は、肩越しにチラリと乱菊を見た。
「松本。下がってろ」
「でも、冬獅郎・・・」
「いいから」
有無を言わさぬ声に、乱菊がその場から少し離れる。
ふぅ、と弓親がため息をついた。

「溜まってんだ。てめえに恨みはねえが、ちょっと付き合え」
その直後、一角が大きく一歩踏み込み、冬獅郎に向かって空いた拳を振りかぶった。
冬獅郎は体を大きく捻ると、バネを効かせて跳躍する。
ドッ！
耳を覆いたくなるような鈍い音を立て、一角の腕と冬獅郎の振り上げた足がぶつかり合った。

力は、互角。
冬獅郎はトン、と一角の肩に指をつき、中空へと舞う。
そして、振り上げた拳を、一角の肩口に見舞った。
「チッ！」
一角が肩を押さえて飛び下がった。
冬獅郎は素早い動きで、一角から飛び離れる。

その時・・・景色が、ぐらりと揺らいだ。
体勢が崩れる。
「冬獅郎！？」
ぐきっ、と嫌な音が周囲に響き渡った。
そのまま冬獅郎は、地面にしゃがみこみ、右の足首を両手で掴んだまま動かない。

「あらま、捻っちゃったのね」
駆け寄った乱菊が、その場にしゃがみこんんだ。
「あーあー。酔っ払ってるときに動いたから。急に酒がまわったんだよ」
歩み寄った弓親がそう言って、2人を見下ろした。

「一角が悪いんだよ。無理やりケンカしかけたりして」
弓親が白い眼を向けると、一角も決まり悪そうに頭を掻いた。

「タクシーも通んないわね、この辺・・・」
乱菊はしゃがみこんだまま、周りを見回す。
都心とはいえ、住宅街の真ん中のこの辺りに、夜中にタクシーが通りかかるはずもない。
「しょうがねえな。オラよ」
一角はため息をつくと、冬獅郎に背中を向け、しゃがみこんだ。
「・・・なんだ？」
若干涙目の冬獅郎が、その広い背中を見た。
「家か、タクシー拾えるとこまで負ぶってやるって言ってんだよ！」

「いらねー！」
即座に拒絶すると、冬獅郎はその場から立ち上がろうとする。
しかしその途端、ガクンと体が前かがみに倒れかけ、乱菊の肩に手をついて、押さえた。
足に全く力が入らない。
「ホラ。ダメじゃない」
「歩いて帰る！」
「ワガママ言わないの。この3人の中から、選びなさい」

冬獅郎は、値踏みするように、3人の顔を見比べた。
女。オカマのような・・・男（多分男）。男。
「・・・」
冬獅郎は無言で、一角の背中に手をかけた。

「よっしゃ！
途中で２４時間やってる薬屋があるから、湿布と・・・、ついでに酒も買ってきましょ！
まだ飲み足りないし」
「飲み足りないのかよ・・・」

３人が同時に乱菊に突っ込みを入れた。

そして・・・

今朝の、この惨状があるんだった。

冬獅郎は、自分の隣で眠る乱菊を見下ろし・・・ハァ、とため息を漏らした。

VOL．08　幸せの色―3　［黒崎夏梨の当惑］

それから、1時間後。
冬獅郎は、車上の人となっていた。
開け放った窓からは、さわやかな春の風が吹き込んでくる。
片手でハンドルを操っているのは乱菊。
後部座席には、一角と弓親が乗り込んでいた。

「本当にあんた達、病院まで来るの？まぁ、いいけど・・・」
「よく世話になってる病院なんだよ。ついでに菓子でも持って行く。安いし、腕も確かだぜ」
「あ！次の信号右！」
「分かったわよ」
乱菊が、赤信号で車を停車させる。

背後の3人の会話を聞きながら、冬獅郎はぼうっと窓の外を眺めていた。
座ってる限り足は痛まないが、大きく足を引きずらないと歩けない。
明日から学校だってのに・・・冬獅郎はため息をついた。

視界の先には、グラウンドが見える。
そこで走り回ってる子供達が目に付くのは、ケガ人の僻みか。
「よっしゃぁ！」
威勢のいい声に、何となくその方向を見やると・・・
見事なシュートが、サッカーゴールに決められたところだった。

「くー、やるなぁ、夏梨！さすが女子サッカーのキャプテンだ」
「男子こそ、しっかりしろ！これじゃ相手になんない」
ピシッと言い放つ声が、車の中にまで聞こえてくる。

姿まではよく見えないが、１人長い黒髪がいるから、あれがカリンとか呼ばれた女だろう。

ん？

冬獅郎は、誰かの視線に、ふと視線を歩道にずらせた。

歩道の向こうから歩いてきたのは、鮮やかな赤髪をツンツンと立てた大柄な男と、対照的に小柄な黒髪の女の二人連れだった。

こちらを見て、なにやら言っているようだが、こちらは顔など知らない。

そう思った時に信号は青に変わり、風景の中にその姿は消えていった。

陽光に光る、銀色の髪。

深い蒼碧の瞳。

間違いない・・・

シルバーの車の窓から、腕と顔を出した少年を見つけ、ルキアは、思わず隣にいる恋次の腕を掴んだ。

「あれは、昨日・・・あの、会った女の人と一緒に住んでいるっていう子じゃないか？噂と一緒だ」

「ん？あぁ、そうなのか？」

隣に立つ恋次は、妙に口ごもって返事をした。

女の方との出会いを考えれば、無理も無い。

――　本当に、従姉弟同士なのかよ・・・

共通点は、外国人っぽい、というところにしかないように見えた。

なぜか、ふてくされたような目で、歩道の向こうのグラウンドに視線を走らせている。

ちらり、と少年の目が、こちらに向けられた。

こちらの視線に気づいたのだろう、怪訝そうに、かすかに顔をしか

めた。
信号が青に変わり、車が走り去ってゆく。

「行こう」
小柄なルキアが、赤い鞄を揺らして、先へゆく。
久しぶりに向き合った2人が、勉強に身を入れるどころか、話しこんでしまったのは良くある話で。
仕切りなおし、ということで、日曜の今日は、図書館で勉強することになっていた。

本当は、勉強なんて好きじゃねえ。
グラウンドでサッカーでもやってるほうがいいんだがな。
チラリ、と、さっきまで少年が見ていたグラウンドを見上げた。

その時。

タン、タン、と軽い音を立てて、グラウンドからボールが転がり出るのが見えた。
「あたしが行く！」
威勢がいい少女の声が聞こえる。
恋次は何気なくボールに歩み寄り、車道に出ようとしていたボールを脚で受け止めた。
そのままボールを跳ね上げ、手で掴んだとき、恋次とルキアの上に影が差した。

「スイマセン、拾ってもらっちゃって・・・」
息を弾ませ、かけてきた少女の顔に、恋次は視線を走らせる。
――　美人だな・・・
中学生か、高校生くらい・・・年下だが、似たような年齢だろう。
長い髪を後ろに縛り、ショートパンツから、すらりとした足が伸び

ている。
その少し切れ長の目が・・・2人の姿に目を止めた途端、大きく見開かれた。
「ルキアちゃんっ？」
階段の手すりから身を乗り出し、少女は棒立ちになった。
「あんた、ルキアちゃんだろ？5年前うちに住んでたこともある・・・あたし、夏梨だよ！黒崎夏梨！」
うちに・・・住んでた？
恋次は、後ろのルキアを振り返る。
ルキアも、驚いたように目を見開いていたが、じっと夏梨を見返し、首を振る。
「確かに私の名前はルキアだが・・・人違いでは無いか？初対面のはずだ」
「へっ？」
夏梨、と名乗った少女は、それこそ鳩に豆鉄砲を食らったような顔で、立ち止まった。
「五年前といえば、この町に来たこともないのだ」
「そんな訳ねえよ！」
ひらり、と手すりを飛び越え、こちらに向かって飛び降りようとしたとき。
「オイ！あぶねえぞ！」
恋次は思わず、大声を出していた。
ちょうど夏梨が飛び降りようとしていたところに、通りかかった自転車が一台。
「おわっ、急に・・・！」
自転車にのっていた高校生が、慌ててブレーキを踏むが、間に合わ

ない。
まさか、いきなり進路上に人が飛び降りてくるとは思わないだろう。
キキーッ！！
数秒後、自転車が急ブレーキをかけて、止まった。
地面に足を着き、その男子高校生は、慌てた素振りで振り返る。
「大丈夫ッスかー、まさか空中で受け止めるなんて・・・」
「お、おう」
ガードレールに背中を打ちつけた恋次の上に、夏梨が乗っていた。
とっさに足を引っ張ってこっちに引き寄せ、自転車に落下するのを食い止めたのは良かったが・・・
人一人受け止めるには、あまりにも無理な体勢だった。

「お、おい！大丈夫か！」
「おめーの膝が、俺の腹に食い込まなけりゃな・・・」
打ち付けた背中より、そっちのほうが重傷だ。
恋次は咳き込みながら、恨みがましい目で夏梨を見上げた。
「ご、ごめん・・・」
夏梨が赤くなり、慌てて恋次の上からどいた。

その時、間近に顔を見て・・・夏梨はふたたび、動きを止めた。
「まさか、俺のことも知ってるってのか？」
恋次の声に、夏梨は答えない。
泥を払って立ち上がると、恋次と、となりにしゃがみこんだルキアを見下ろした。
「怪我させて悪かったな。ウチ、病院やってるんだ。寄ってけよ」

VOL．09　幸せの色―4　［なみだ］

春の風にふわりとあおられる、ストレートの黒髪。
癖っ毛で、伸ばすと色々な方向にはねるルキアの髪とは、髪質が違っている。

着ているのは、白い無地のトレーナー。
古着のような色合いのジーンズから伸びる足は、目を止めてしまうほど、すんなりと長い。
女らしい服装をしているわけでもなく、化粧っ気も全く無い。
それなのに・・・15歳にして既に、天然の女の色気が備わっている。

黒い、切れ長の目が、ルキアと恋次を捕らえた。
「自己紹介、しなきゃな。あたしの名前は、黒崎夏梨。空座中の3年生。あんたらは？」
「阿散井、恋次だ」
「朽木ルキアだ」
「そう・・・か」
2人の前に立ち、先導しながら、夏梨は呟くように言った。

――　どういうこと、なんだ？
平静を装いながら、頭の中は混乱していた。
朽木ルキアは、もう随分前になるが、黒崎家で一緒に暮らしたことさえあるのだ。
外見だけなら他人の空似ということもあるだろうが、名前も一緒となると勘違いでは済まされない。
少し成長したようにも見えるが、どこから見ても「朽木ルキア」だ。

だが、自分と初対面だと言ったルキアは、嘘をついているようには見えなかった。
大体、嘘をつく理由がどこにあるだろう。
阿散井恋次、と名乗った方も、兄の一護と一緒にいるところを、遠目で見たことがあった。
ちゃんと見たわけではないからはっきりしないが、ほぼ間違いないと思う。

――　とにかく、一兄だ。一兄に会わせてみれば、はっきりするだろ。
医大に進んでいる兄は、最近勉強がきついのか、帰ってくる時間が遅くなる回数も増えた。
今日は早く帰ってきてくれよ・・・

時間を稼ぐため、なるべくゆっくりとクロサキ医院に向かい・・・
ドアを開けたとき、時間は午後2時を回ったところだった。
「ただいまー！」
黒崎家は、「クロサキ医院」と、家族の居住空間が合体している、こじんまりとした町医者である。
病院のほうの入り口をくぐり、夏梨は大声を出した。

「おぉ！夏梨か。おかえり」
診察室から声だけ聞こえたのは、夏梨の父親、一心だった。
「あの・・・お前のお得意さんの、斑目君が来てるぞ！お土産もってな。
リビングでお前を待ってる」
「客をリビングでほったらかしてんのかよ」
「しょうがないだろ、夏梨。誰もいなかったんだから・・・治療はもう、終わってる」

父親の声を聞き流し、夏梨は慣れた足取りで診察室に入ってゆくと、救急箱を持ってすぐに出てきた。
「先客がいて申し訳ねえけど、最近手狭なんだ。リビングのほうに来てくれ。茶でも出すよ」
「あ、あぁ・・・すまねえな」
恋次とルキアは顔を見合わせ、病院の中に足を踏み入れた。

病院のドアを開けると、そこは家族の住む家に直接つながっているらしい。
ふたりは、夏梨に示されたドアを開けて、リビングに足を踏み入れた。
そこには、確かに先客がいた。
ソファーに腰掛けたり、じゅうたんに直接座り込んだりしてくつろいでいた4人組は・・・
「あー！」
その場を、大声が満たした。

「あ！キミは、オカッパ頭とか言ってきたナマイキな子供！」
「てめえ、オカッパ頭！それにアンタは・・・」
「ハァイ♪相変わらずいい体してるわね、まぁ、昨日の話だけどね」
「そ、そちらさんも・・・」
墓穴を掘った恋次が真っ赤になった。
その向かいで、冬獅郎がハァ、とため息をついた。
その目が、ルキアに注がれる。

――　こいつ、さっき俺を見てた奴か？
それにしても、狭い町とはいえ、赤の他人の癖に、こんなに会ってるのも変な話だ。
世間は狭いって奴か？
そう思ったときだった。

「なんだよ？やけに賑やかだな」
片手に救急箱を持って、夏梨がリビングルームに入ってきた。
そして。
その手から、救急箱が滑り落ちた。

入り口にいた恋次が慌ててしゃがみこみ、救急箱を空中で受け止める。
「うぉっと！危なっかしい奴だな、お前は・・・」
見上げた恋次の頬に、ポタリ、と水滴が落ちた。
「・・・お前、どうしたんだ」
棒立ちになっている夏梨の頬に、涙が伝っていた。

「とうし、ろう」
「えっ？」
冬獅郎が、顔をあげて夏梨を見た。

身長は、最後に会ったときよりもとんでもなく伸びて、もうあたしよりも、ずっと高い。
顔立ちも、大人びている。
それでも・・・この気配、あたしを見る目、間違えたりしない。

「冬獅郎！」
ソファに腰を下ろした冬獅郎に駆け寄り、思い切り抱きついた。

VOL．10　幸せの色＿5　［根無し草］

「お前！何やってたんだよ！5年も、全く連絡よこさねえで！
何かあったんじゃないかって、あたしがどんなに心配したか・・・
何とか言えよ！」
冬獅郎は、夏梨の剣幕に押されるように、目を丸くしたまま、夏梨を見返している。
至近距離で、ふたりの目が合った。
「悪いけど、人違いじゃねえか？俺は、お前のことは知らない」
え？

冬獅郎の肩を掴んだ、夏梨の手が、細かく震えた。
「な、に言ってんだ？お前、死神だろ？」
「え？」
冬獅郎は、いよいよ困惑した表情を夏梨に向けた。
「死神・・・て何だ？」
「な・・・にを」

冬獅郎は、夏梨を押しのけるでもなく、そのままの体勢で、夏梨を見つめている。
ふぅ、と軽くため息をつくのが、夏梨の手を通して感じられた。
「名前は確かに冬獅郎だが、勘違いしてるんじゃねえか？
例えば、俺は5年前はノルウェーにいたんだ。お前に会うなんて、ありえないんだよ」
その瞳は、初めの驚きを通り越し、穏やかな色に変わっている。

「そうよ・・・ね。びっくりしちゃった」
その声に振り向き、夏梨はめまいがしそうになった。

そこにいたのは、「松本乱菊」。
夏梨の記憶の中の彼女は、冬獅郎の副官をしていた。
――　はじめまして。あたしの名前は、松本乱菊。
5年前、彼女は同じ顔で、同じ声で、そう言った。
でも、きっと彼女も、夏梨がそれを指摘したところで、何も知らない、というだろう。

「すわれよ」
冬獅郎はスッとどけると、入れ替わりに夏梨をソファーに座らせた。
立ち上がったとき、体が傾ぐ。その右足から、真新しい包帯がのぞいていた。
「おぅ、夏梨。今日は金ヅルと菓子、持ってきてやったぜ」
ひょい、と後ろから顔をのぞかせた一角が、いつもの調子で夏梨に話しかける。
「金ヅルって何よ」
乱菊が言い返し、どっとその場で笑いが起こる。

それを見ていた夏梨も、少しだけ調子を取り戻して・・・涙を拭った。
「次の客も控えてるみてえだし。俺達も帰るぜ」
夏梨を見下ろす一角と弓親の表情は、兄のように優しい。
ポン、と一角の大きな手が、夏梨の頭に置かれた。
「それじゃ、お邪魔したわね。一角、弓親、家まで送ってくわ」
「すまねえな」
冬獅郎が、夏梨から視線をそらし、足を引きずって乱菊の後に続いた。

行ってしまう・・・
ダメだ。
ここで別れたら、もう二度と冬獅郎に会えない気がする。

考えろ。何か話をしていて、ひっかかることはなかったか？
「な、なぁ！」
夏梨はふと思い当たり、身を乗り出した。
「冬獅郎・・・も、ルキアちゃんも、５年前にここに来たのか？」
うん？という顔をして顔を見合わせたのは、冬獅郎とルキアだけではなかった。

「あぁ。俺はそうだけど。ていうか、松本もそうだな」
「そうだったかしら？」
「てめぇ、俺にそういっただろ。覚えとけ」
「忘れちゃった♪」
「そういえば、俺たちもそうだよな、弓親？一緒に５年前、イナカから出てきたもんな」
「懐かしくも泥臭い思い出だね」
「私と恋次は、一緒に５年前、この町に来たのだ」

――　なんなんだ、この会話は・・・
６人が輪になり、言葉を交し合うのを見て、夏梨の違和感はどんどん高まってゆく。
「まぁ、東京は人の寄せ集めみてーなモンだからな。
６人が同時に５年前に来てるってのは珍しいけど、どーってことねえといえばどーってことねえよ」
一角がその場に突っ立ったまま腕を組み、夏梨を見下ろした。

確かに。
珍しいけど、ありえなくはない確率なんだ。
でも、あたしが知りたいのは、その「５年前」のことなんだ。
「じゃぁ、あんたたちは、５年前は何してたんだ？」
「何って、イナカの高校生だよ」
「特に、取り立てて何ってことも・・・」

弓親と乱菊が目を見交わした。

なんだろう、この違和感・・・

夏梨が唇を噛んだときだった。廊下から、バタバタと足音が聞こえた。

「ただいま！」

その声に夏梨は、思わずソファーから立ち上がり、ドアに急いだ。

兄の一護が、こんな昼間に家に戻ってくるなんて、滅多に無い。

でも、今日はそれを心からありがたいと思った。

「一兄！」

救いを求めるように、リビングに入ってきた一護の腕を掴んだ。

「一兄、この人ルキアちゃんだろ？ここにいるの、冬獅郎だろ？みんな、あたしのこと知らないっていうんだ。あたしがオカシイのか？」

片手に鞄を持ったまま、一護はざっと、その場にいた6人の顔を一瞥した。

VOL．11　幸せの色―6　［ねがい］

一護と、日番谷の視線が交錯する・・・が、視線は色を持たないまま、すれ違う。
誰も、何も言葉を発しない。
夏梨がじれったくなったとき、一護は乾いた声で言った。

「夏梨。この人たちは、別人だよ」

「何言って・・・」
「夏梨」
一護は、食って掛かる夏梨の腕を取ると、廊下に連れ出した。
「何だよ？」

「夏梨。ルキアや、冬獅郎や、他の奴等も。みんな、精霊廷で元気に死神やってる。
もともと現世の住人じゃねえんだ、こっちにマメに来るはずねえだろ？落ち着け」
「じゃ、なんで同じ名前で、同じ姿のやつが現世にいるんだよ！」
「俺にだって分からねえよ。やめろよ、リビングに聞こえる」
一護はそれ以上何もいわず、夏梨の肩をポンと叩くと、リビングに戻った。

「お構いもせず、すいません。俺は夏梨の兄で、黒崎一護といいます。はじめまして」
「あらー、いい男じゃない」
頭を下げた一護に向かって、乱菊がウインクする。
「いーえ、お構いなく。もう帰るトコですから」
弓親がニコリと笑い、鞄を手にとる。一角も弓親に並んだ。

そして、先に立ってリビングを出て行く。
冬獅郎と、冬獅郎に腕を貸した乱菊がその後に続いた。
廊下に背中をもたせ掛けたまま、突っ立っている夏梨と冬獅郎の視線がぶつかった。
――　よっぽど、会いたかったんだな。
自分は、全くこの夏梨という女を知らない。
5年前に日本にきたことは無いから、勘違いなのだろう。
「ごめんな。お前の探してる奴と違ってて」
冬獅郎がそういうと、夏梨は顔をくしゃくしゃにして・・・何も言わなかった。

夜10時。
冬獅郎は、窓際に置かれたノートパソコンの画面を、見るとはなしに眺めていた。
やがて、慣れた手さばきで、検索エンジンに文字を打ち込む。
――　「死神」
出てきたwikipediaの画面に、見入る。
――　死神(しにがみ)とは、生命の死を司る神で、冥府においては魂の管理者とされる。
無機質に書かれた文字に、視線を走らせ・・・ふぅ、とため息をつく。
「『死を迎える予定の人物が魂のみの姿で現世に彷徨い続け悪霊化するのを防ぐ為、
冥府へと導いていくという役目を持っている」といわれている。』・・・か」
残りの説明を読み上げ、日番谷はしばらく考え込む。

夏梨の言葉が、気になっていた。
事実とか、事実じゃないとか、そういう次元の話じゃない。
死神なんて存在そのものが、荒唐無稽もいいところだ。
でも・・・夏梨の必死な顔が、涙が、気になって離れない。

――「5年も、全く連絡よこさねえで！」
夏梨が投げかけた言葉が、胸を横切ってゆく。
あの言葉は、嘘じゃないような気がした。
――俺と同じ名前、同じ姿、同じ声のやつが、いたとしたら・・・
そして、それが死神だと呼ばれていたとしたら。
全てが事実だとすれば、それを巧く説明できる、どんな状況があるというんだろう。

カタン・・・

闇の中に、かすかに何かが当たる音がした。
「今、音がしなかったか」
ベッドに寝転がって、雑誌を読んでいた乱菊に声をかけたが、乱菊は返事をしない。
よく見ると、雑誌を広げたまま、布団に頬を乗せて、眠り込んでしまっていた。
ゆっくりとした足取りでベッドに歩み寄ると、ブランケットを乱菊の上にかけてやる。

一角の言った言葉は嘘ではなく、確かに腕がいい医者だった、と冬獅郎は思う。
少し痛みは残るが、足を引きずらなくても歩けるほどに、その足は回復していた。
眠っていてもブランケットがかけられたのが分かったのか、乱菊がふわり、と微笑んだ。

それを見つめる、冬獅郎の心もまた、凪いでゆく。

腹を立てたり、怒鳴ったり、呆れたり、ひとつひとつの色は、そんなのばっかりだが。
でも、まとめて一つの色にしてみると、その色は決して暗くは無い。
幸せだ、と言ってもいいくらいに。
大切にしたいと思う、今のこの平和な日々を。

音が聞こえた、ベランダのほうを、振り返る。
冬獅郎は立ち上がると窓を開け、ベランダへと出た。
そして、クーラーの室外機の上に置かれた、それに気がつく。
「これ・・・」
室内の蛍光灯の光に照らされていたのは、紛れも無い・・・乱菊が昨日窓から放り出した本だった。
あれから、誰が持っていってしまったのか、道路を探しても、見つからなかったものだ。

――　ここ、3階だぞ・・・
昨日落したときは、かなりの音がしていたから、ベランダに引っかかっていたとは思いがたい。
だとしたら、誰がこんなところに本を置いていったのだろう。
首を捻りながら、本を手に取った。
紛れも無い、自分の本だとすぐに気づく。

特に興味も無い、この高い本を買った理由は、自分でも分からない。
ただ・・・気になったのだ。
――　ＨＩＮＡ　ＭＯＲＩＴＡ。
この作者の名前が気になって、ＨＩＮＡ　ＭＯＲＩのところだけ、戯れに、本にマジックで線を引いたのだ。

「ヒ・ナ・モ・リ」

冬獅郎は、ひとり、その「音」を口ずさんでみる。
俺の人生に、引っかかってきたことがあるとは、思えない名前だ。

その冬獅郎の姿を、上空・・・電柱の上に立ち、見守っていた男が、1人。
首を捻っている冬獅郎を見下ろし・・・その口元が、ほろ苦い微笑みに彩られた。
バサッ・・・
暗闇の中で、闇よりも暗い色の着物が、夜風に嬲られ、翻った。
その背中には、自分の身長ほどの大きさの、巨大な刀を背負っている。
刀身に巻きつけられた布の隙間から刀身がのぞき、月光にギラリと輝いた。

「どうか、今のままで・・・幸せで、いてくれ。それが皆の願いだ」
黒崎一護の鳶色の瞳に、強い光が渡った。
そして次の瞬間には、その影は掻き消えていた。

――――――――――――――――――
冬獅郎がネット検索した「死神」は、Ｗｉｋｉｐｅｄｉａからそのまま引用したものです。
興味のある方は調べてみてくださいｗ

ＶＯＬ．１２　足音＿１　［浦原商店に集う］

明朝。
ジン太は、店の入り口にかけられたカーテンをざっと引き開けると、ため息をついた。
ガラス戸の向こうで、降り続いていたのは雨。
どこか生ぬるい春の空気の中で、しとしとと、糸みたいに延々と降り続いている。

――　今日は、客もこねーな、きっと。
後ろを振り返り、店内に雑然と納められた駄菓子を見やる。
相手は大体、懐に、いいとこ５００円くらいしか持ってないガキどもだ。
２０円と３０円の菓子を見比べ、真剣に悩んでいる姿を見ると、つい笑ってしまうが。
つい数年前までは、売り物の菓子に手を伸ばしては、テッサイに怒られていた自分を棚にあげて。

「ジン太くーん・・・」
店の奥から、たよりないウルルの声が聞こえた。続けて、けほけほっ、と小さな咳。
「ごめんね、あたし、今日店番なのに」
「いーんだよ。どうせ雨だし、どこにも行けやしねーよ。寝てろ！」
出来るだけ乱暴に言い捨てると、
「ありがとう」
調子の狂う答えが返ってきた。
何か言い返してやろうと思ったが、それっきり何も聞こえない。
本当に、調子外れな奴だと思う。

普段は「馬鹿」がつくほど健康体のくせに、こんな春先になってカゼひくなんて。
居住空間につながっている薄暗い廊下を見て、そう思ったときだった。
ガララ、と店のガラス戸がひき開けられた。

「悪いけどな、まだ開店前・・・」
「知ってるよ」
「なんだ、お前か」
ジン太は目をやる前にそう言って、肩越しに振り返った。
ガラス戸に置かれた腕に、長い黒髪がさらりとかかっていた。
「ちょっと・・・話があるんだ」
なんだよ、と言い捨てるには、ジン太を見つめる、夏梨のまなざしは真剣だった。
「・・・入れよ。まだ開店までには間がある」
ジン太は、店内を親指で指して言った。

「なんだ？そりゃ」
レジの向こうに座ったジン太が、調子外れの声を出した。
その表情には、困惑が色濃い。
「あのねーちゃんや冬獅郎そっくりな奴が出てきて、お前とか死神のことは知らねぇって言ったのか？」
「それだけじゃないんだ。冬獅郎の副官やってた女の人とか、赤髪のやつも死神だったハズ・・・」
「その場にいたやつの、名前は？」
「ルキアちゃんだろ、それに冬獅郎。乱菊さん。
それから・・・恋次って呼ばれてた人と、あたしの常連の、一角さん、弓親さん」
「お前」

ジン太は、それきり黙った。

「なんだよ」

「気づいてねえで言ってるのか？そいつらは、全員死神だ！」

「え？一角さんも、弓親さんもそうなのか？」

「ハゲた目つきの悪い兄ちゃんに、オカッパ頭のオカマみたいな兄ちゃんだろ？

5年前、日番谷先遣隊とかいって、この町に来てた面子だぞ」

「は？それって」

ダン、とレジ台に手を突いた夏梨を、ジン太は見返した。

「お前、動揺してんだよ。まともに考えてみたら、答えは一個しかねえだろ。

1人ならとにかく、6人分間違えるわけねえ。そいつら、死神なんだよ。

何か理由があって、お前に黙ってんだろ」

「でも、一兄も、あいつらは別人だって」

「お前の兄貴は死神代行だろ？口裏合わせてんだって」

「・・・」

夏梨は、視線を、レジ台についた自分の手に落した。

確かに、ジン太の言葉は正しい、と夏梨にも思えた。

危険を伴う仕事で現世に来ていて、巻き込まれないために隠した、とも取れなくも無いが・・・どうしても、違和感が残る。

「なんか、変な符牒が一個だけあったんだ」

夏梨は、考えながらゆっくりと言葉を進めた。

「あたしが冬獅郎たちに空座町で会ったのは、5年前。

でも、6人とも5年前までは違う町にいて、そこからここに来たって言うんだ」

腑に落ちない、という顔をしてジン太が黙った。

それは、死神たちが嘘をついていたとしたら、どうでもいい些細なことだ。

だが・・・些細なことだからこそ、なぜそんな嘘をつく必要があるのか、分からなかった。

「・・・」

互いにそれに答えられる言葉はなく、2人はしばらく黙り込んだ。

夏梨は、はぁ、とため息をついて、ジュースが入っている冷蔵庫に、背中をもたせ掛けた。

少なくとも、動揺してる、というジン太の指摘だけは正しかったようだ。

「ジン太。お前が最後に死神に会ったのも、五年前か」

「あぁ。破面(アランカル)が空座町を襲ってきたときのことだよ。

お前、霊圧にやたら鋭いから、分かってただろ」

「・・・あぁ」

夏梨は頷いた。

あの時、空座町全体が、どんよりとした雲のように、厚く暗い霊圧に閉ざされていた。

それが、「破面」と呼ばれる者たちの気配だということは、随分後に知った。

それと戦うために、冬獅郎たちが現世に派遣されていたということも。

それからしばらくして、その霊圧は嘘のように掻き消えたが・・・

同時に、町に点在していた、死神たちの気配も消えた。

それが、5年前だ。

それから、空座町で、破面や死神の霊圧を感じたことは、一度も無

い。
「戦いは・・・終わったんだと思ってた。死神が勝ったんだとばかり」
「知らねえよ。店長も、それに関してはダンマリだしな。
でも、戦いの場所を空座町から変えただけで、どっかで続いてるってのは、ありえるぜ」
そう言って顔をあげたジン太は、遠くから聞こえてくるバイクの音に、顔をあげた。

「あれ、この音・・・」
夏梨が振り返り、足早に入り口に歩み寄る。
雨の中、上着を羽織っただけの姿で飛ばしてきた男は、ザザッ、と浦原商店の前でバイクを止めた。
フルフェイスを脱いだ姿に、夏梨は声をあげてかけよった。
「一兄！どうしたんだよ」
「ちょっとな」
浦原商店の軒先にバイクを寄せると、一護はジン太に歩み寄った。
「悪いな、突然。浦原さんはいるか？」

VOL．13　足音_2　［沈黙の原野］

「悪いな、突然」
阿散井恋次の下宿する古アパート。
その玄関口に立っていたのは、傘を差したルキアだった。
平日の朝だというのに、制服を着ていない。
ピンクがかった、パステルカラーのワンピースに身を包み、ショートブーツを履いていた。

「どーしたんだよ、ルキア。朝っぱらから」
対する恋次は、まだジャージ姿である。
髪の毛もいつものように上げていない。
「学校。サボる気は無いか？つきあってほしい場所があるのだ」
へっ？
恋次は、思わずルキアの真面目くさった顔を凝視した。

ルキアは、恋次と違って優等生で、学校も皆勤に近い。
恋次が言い出すならとにかく、ルキアとは思えないセリフだった。
「何だか知らねーけどよ、行くから。そんな思いつめた顔、するんじゃねーよ」
恋次の言葉に、ルキアが目を見開き・・・そして、うつむいた。

通勤時間を過ぎた電車は、気が抜けたかのようにすいていた。
ルキアは、ドアに背中をもたせ掛けて立ち、何とはなしに、流れてゆく風景に瞳を向けている。
――　どこ向かってんだか・・・
今声をかけても、ルキアは気づくまい。そう恋次は思う。
昔から、物思いに浸りだせば最後、なかなか我に返らない奴だった。

――　なにか、おかしい・・・
ルキアは、カンカンカン、という音とともに景色を流れてゆく、踏切に目をやりながら、思った。
具体的に、何が違和感なのか。それを説明する術をルキアはもたない。
しかし、その違和感は、昨日決定的なものとなった。
黒崎夏梨、という少女に、問いかけられたその時に。

5年前、どこにいたかは迷うまでもなく答えられる。
ただ・・・「何をしていたのか」と聞かれたとき、とっさに言葉に詰まってしまったのだ。
そんな漠然な問い、ぱっと答えるのは難しい、と自分に言い聞かせても、違和感だけが残った。

「・・・」
ルキアは、我知らず、自分の右肩にそっと手を触れる。
昨日、恋次の傷の手当をする夏梨という少女の向こうで突っ立っていた、黒崎一護と名乗った男を思い出していた。
派手な外見の割に、思慮深そうな奴だな。
それが、黒崎一護を見たときの初めの感想だった。

恋次が立ち上がったのは、このリビングに入って、1時間くらいのことだった。
――「いくぜ、ルキア」
――「ああ」
ルキアもソファから身を起こし、カウンターキッチンにもたれかかっていた黒崎一護に、声をかけた。
――「邪魔をしたな」
そういって、黒崎一護の前を、通り過ぎようとした瞬間。

ルキアの肩に、広い手のひらが置かれた。
ルキアが顔をあげたとき、低い声が耳元でささやいた。

――　「元気でな。『ルキア』」

ルキアが見たときには、一護はもう、ルキアに背を向けていた。
振り向けなかった。
どうしてだか、分からないけれど、その言葉はとても重たくて。

そのとき。
「次の駅は、御影駅。御影駅です」
女性の声で、電車の中にアナウンスが流れ、ルキアは我に返った。
「次で、下りるぞ」
「御影駅っていったら、児童養護施設のあったとこじゃねえか？」
恋次の心底意外そうな声に、ルキアは一度、深く頷いた。
「そうだ。私は・・・確かめたいのだ。自分のルーツを」
「お前・・・そういうタイプの奴だったか」
恋次は、思いつめたルキアの表情を見下ろした。
何の計画性もなく、衝動的に、突拍子も無い行動をとる奴ではない、と思っていたのに。

ルキアはすぐには答えず、開いたドアから外に出た。
「そうだな」
改札に向かいながら、ルキアは言った。
「私も知らなかった」

ルキアの赤い傘の後に、恋次のビニール傘が続き、坂を上がっていく。
――　5年ぶり、か・・・

坂の両側に続く街並みに、恋次は視線をさまよわせた。
「犬」というシールが張ってある割に、犬がいる気配が無い家。
ガーデニングに凝っているのか、常に色とりどりの花が咲き乱れている家。
古びて、もう誰もすまなくなった、壁に罅が入ったアパート。

子供の頃、学校から養護施設への登下校に通った、この道。
あの時、心を震わせたさまざまな景色が、今もまったく変わらずにそこにある。
それが、新鮮な驚きだった。
この坂を上りきったところが、養護施設だ。

ルキアは、全く足を緩めることなく、周りに視線をやることもなく、歩いてゆく。
「・・・恋次。すまんな、いきなりつきあわせて」
その赤い傘を見下ろしたとき、声が発せられた。
「こんなトコまで連れて来といて、今更何言ってんだ。イヤなら断ってるっての」
「・・・そうだな」
少しだけ振り向いたルキアは、微笑んでいた。
「1人だけだと、怖かったのだ」
普段、素直に「怖い」なんていう女じゃない。

本当にどうしたんだ。
そう言おうとして前を見たとき、ルキアは急に立ち止まった。
その肩が、小刻みに震えているのに気づいた。
「オイ」
恋次が、ルキアの隣に並ぶ。
「どうした」
ルキアは目を手のひらで押さえたまま、もう片方の手で、前を指差

した。
何気なくそちらを見た恋次は、初め、目をしばたかせた。
目の前の風景の意味を理解するには、しばらく時間がかかった。
・・・恋次はやがて、絶句したまま、震えるルキアの肩を見下ろした。
「どういう、ことだ」
押し出した声は、えらく乾いていた。
恋次とルキアの目の前、坂を上がりきった場所。
そこには、ルキアと恋次が育った児童養護施設があったはずだった。
しかし、そこにはただ、原野が雨に濡れているだけだった。

VOL．１４　足音＿３　［白皙の破面］

聞けばよかったんだ。

夏梨は、１人、唇をかみ締めていた。
５年前、小学４年生だったとき、夏梨は冬獅郎と出会った。
サッカー場を賭けた、中学生との勝負。
それに強引に付き合わせたのがきっかけだった。

後になって、先遣隊を率い、日夜破面と戦っていた状況を知り・・・
よくも、引き受けてくれたものだと苦笑が出たが。
あのころ、冬獅郎は、夕焼けになるたびに、町で一番夕焼けがきれいに見える場所に立っていた。
その理由を、一言。
――　「なつかしいんだ」
そう、言っていた。

まだ小学生の癖に、何がそんな懐かしいんだと思ったけど。
死神として、外見よりもよほど長い時間を生きていることを知った今、ちょっと見方が変わった。

聞けば、よかったんだと思う。
どんな思い出が、夕焼けに詰まっているのか、ほんの少しでも素顔を。
そしたら、今、こんなもどかしい気持ちと戦わなくても、良かったのかもしれない。
あの子供の割に低い声を、蒼緑の目を、こんなに懐かしいと思ったのは、初めてだった。
廊下の床の目を見下ろし、はぁ、と息をついた時。

そのため息は、途中で断ち切られる。

――　なんだ？

「ちくしょう、聞こえねえな・・・」

夏梨に並び、部屋の中の会話に耳を傾けていたジン太が、痺れを切らしたように呟いた。

一護と浦原が、この部屋に入ってから３０分が経とうとしていた。

ぼそぼそ、とたまに声が聞こえるが、それ以外はシンと静まりかえっていた。

「オイ夏梨、お前も何か手を考えろよ・・・ん？」

ジン太は、隣に潜んだ夏梨の横顔を見て、言葉を止めた。

夏梨が、放心したように、入り口の外に視線を向けていたからだ。

その表情は、無心。

まるで、蛇に睨まれた蛙のように、微動だにしない。

――　なんだってんだ？

ジン太は、夏梨が視線を投げている、ガラス戸の向こうに向き直った。

ガラス戸の向こうは、本降りになり始めた、春の雨。

軒先に停められた一護のバイクの、ハンドルに雨が当たるのが見えた。

雨どいから、雨水が伝い、水溜りに水滴が跳ね返る。

まるで、別の世界を見ているかのように、ジン太や夏梨のいるところには、雨音さえも聞こえない。

突然。

その世界がつなげられるまでは。

「な・・・！」

ジン太が、電流を流されたような機敏な動きで、立ち上がった。

バイクの後ろの風景が・・・突然、布地を裂くように、「切り開か

れた」。
裂かれた風景の向こうには、墨を流したかのように、漆黒が広がっている。
そして、その男は・・・漆黒の向こうから、やってきた。

驚くほどに白い肌。
その顔を、黒いイレズミが彩っている。
イレズミに隈取られた瞳は、まるで感情の無い蛇。
肩まで伸びた黒髪。その頭を、殻のような「仮面」が半分ほど覆い隠していた。
その喉元に、拳が入るくらいの大きさの、穴が開いている。

「破面！」
ジン太が歯を食いしばる。
男は、無表情に一歩、夏梨やジン太のいる世界へ踏み出した。
夏梨は無言のまま、じり、と後ろに下がる。

――　何だ、こいつ・・・半端じゃねえ！
「ジン太！逃げるんだよ！」
気づけば夏梨はジン太を振り返り、叫んでいた。
あの男は、あたし達が何をしたところで、敵うような相手じゃない。
それだけは確かだと思えたからだ。
ぞくり、と、男に背を向けた夏梨の、首筋が粟立つ。

――　しまった・・・
こいつに、背中を向けては絶対にいけない。
振り向いた夏梨の目に、男が腕を上げ、ジン太と夏梨に向けて振り下ろすのが見えた。
直後。
ドン、という強い衝撃に、夏梨とジン太は互いを庇いあい、廊下に

座り込んだ。

「あいつ、何を・・・」
ジン太が顔をあげた瞬間。
ふたりに向かって、天井が崩れ落ちた。

「・・・なぜ、刃向かおうとする」
ガラスを音もなく踏み、数瞬前まで店だった残骸の中を、男は近づいてきた。
「もうお前達は、明日を失っているというのに」
「てめえ・・・」
強い怒りがこめられた、その言葉と同時に向けられたのは、一太刀の剣。
「大丈夫っスか」
廊下に突っ伏したジン太と夏梨を庇った、浦原が2人を見下ろして微笑んだ。
「心配ないスよ。黒崎サンがいますから」

「え・・・」
夏梨が顔を上げ、ジン太もそちらを見た。
3人の視線の先にいたのは、風にはためく死覇装。
「ウルキオラ・・・やっぱり、生きてやがったのか」
一護は、斬魂刀「斬月」の切っ先をウルキオラに向けて言った。

VOL．15　足音―4　［封印解除］

対するウルキオラは、相変わらず感情の無い双眸で、一護を一瞥する。
「もう、空座町にも貴様にも、用はない、はずだったがな」
「じゃぁ、何で今更現れた！」
まるで炎と氷のように、真逆の温度の視線が交錯する。

「昨夜。６つの力が空座町に現れた。」
ピクリ、と一護が片方の眉を動かした。
「何が言いてえんだ、てめえは」
「いや、むしろ元々あったものの、一つ一つは目立たぬほど小さな力だったというべきか。
集まらなければ、力として認識できぬほどに」
ウルキオラの冷たい瞳が、一護を見下ろした。
「貴様が何も知らぬはずはない、と思っているのだがな」

ウルキオラの言葉に、夏梨は思わず一護の顔を凝視した。
一護は、ニヤリと挑発的に笑う。
「買いかぶりだぜ」
「黒崎サン！」
ジン太と夏梨の前で片膝をついていた浦原が、彼に似合わない鋭い声を上げた。
「狙いは『アレ』です！行ってください！」

「遅い」
ウルキオラの、鏡のように平坦な声が、その場にやけに通った。
それと同時に、手のひらを一護たちに向かって突き出した、と思った時には、その手が光に包まれた。

――　虚閃！
「チッ！」
一護は、背後の夏梨やジン太をチラリと見やると、その場に踏みとどまった。
「だから貴様は甘いというのだ」
一護の脇を、風のように行き過ぎた影が、一護の耳元で囁きを残した。
その姿が、ふっと、地面にぽっかりと空いた隙間に消えるのを目の端に捉え、一護はチッと舌を打つ。

「浦原サン、ここを頼む！」
一護は叫ぶが早いか、床の隙間から、ぽっかり姿をのぞかせた、地下に身を滑らせる。
そこは、浦原商店の地下に広がる、岩場が続く巨大な空間。

「待ちやがれ！」
一護は、地下に下りるが早いか、斬魂刀の一閃をウルキオラの背中に振り下ろした。
無表情に振り返ったウルキオラが、腰の斬魂刀を引き抜き、一護の攻撃を受け止める。
ギィン！
と金属が弾け合う音がした。

「一兄！」
「夏梨サン、危ない！」
浦原の言葉も聞かず、夏梨は地下へ下りる縄梯子を見つけ出すと、それにしがみついた。
戦いに集中している一護とウルキオラは、気づかないのか、余裕が無いのか、そちらを見はしない。
夏梨が見ても、２人の実力は伯仲しているように見えた。

誰の目にも触れずに、夏梨はスルスルと縄梯子を下りると、近くの岩場に身を隠した。
恐怖と、興奮と・・・しかしそれよりも強い、焦燥。気分が、やけにザワザワする。
――　何だ？この気配。
岩に背中をつけたとき、不思議な感覚が夏梨を覆った。
まるで、弱く緩く、打ち続ける心臓の鼓動のような。そんな気配を感じる。

ギイン！
耳を覆いたくなるような剣戟の音と共に、火花が地下空間に舞い散る。
「なるほど。岩の中に、結界をかけ封じ込めたか」
「うるせぇ！」
一護の刀が一閃する。
跳び下がったウルキオラの頬に、紅い線が一本、刻まれた。
ウルキオラがその場に残した場所に、血の粒が、岩一色の風景の中に、やけに鮮やかに散った。
スッ、とウルキオラが中に舞う血の粒を、指差したように、見えた。
その直後、その「血」が、まるで爆弾のように破裂する。

「つッ・・・」
一護が、自分に石つぶてとなって跳んでくる岩に、顔を腕で覆う。
「うわっ！！」
衝撃と共にあたりが土煙に包まれ、夏梨は思わず目を閉じた。
薄目を開けたとき、その目の前に、ザッ・・・と土を踏む、白い草履が見えた。
「うっ・・・」
間近で見るウルキオラの姿に、夏梨は凍りつく。

「夏梨！」
それに気づいた一護が、それを見て・・・走った。
「ここにあったか」
ウルキオラは、夏梨には全く視線も向けず、崩れ落ちた岩の中にその腕を差し入れようとした。
「させねえ！」
横合いから飛び込んできた一護が、斬魂刀を一閃させる。
あらかじめそれを予想していたかのように、迎え撃つウルキオラの動きも滑らかだった。

「夏梨！できるだけ離れてろ！」
汗を飛び散らせ、一護が夏梨を振り返る。
しかし、夏梨の目は、違うところを見ていた。
たった今、ウルキオラが腕を差し入れようとしていた、崩れた岩の隙間を。
「おい、夏梨！」
一護の声を聞きながら、夏梨は、フラリと岩場に歩み寄る。

岩の割れ目の先は、真っ暗で何も見えなかった。どくん、と、その先で何かが息づく。
――　何か、いる。
夏梨は、ゴクリと唾を飲み込むと、その中に腕を差し入れた。
背後に、一護とウルキオラが激しく斬り結ぶ音が響く中で。

すぐに、手が固い棒のようなものにぶつかった。
息をつめると、その棒のようなものをしっかりと掴み、引きずり出した。
それが白日の下にさらされた時・・・夏梨は、思わず悲鳴をあげて、「それ」を取り落とした。

カシャン、と音を立てて、「それ」が地面に弾む。
どくん、と心臓が大きく波打った。

「一兄、」

地面を見下ろしたまま、夏梨は助けを呼ぶように、兄の名を呼んだ。
「昨日言ったよな。ルキアちゃんや、冬獅郎や、他の奴等も。
みんな、精霊廷で元気に死神やってる、って」
「夏梨」
ウルキオラを跳ね返し、距離をとった一護が、夏梨と下に落ちた「それ」を交互に見て、言葉を途切れさせた。
「なら、なんでだよ・・・」
言葉は、口に出した傍からかすれた。

「なんで氷輪丸がここにあるんだ！」

VOL．１６　足音＿５　［７人目の影］

「・・・それは」
一護がぐっと詰まり、夏梨が大きく一歩、一護のほうに踏み出した。
ちらり、と夏梨は、氷輪丸を取り出した穴の中に視線を走らせる。
――　氷輪丸だけじゃない。
見えるのは、刀が４本・・・５本。
それが、昨日会ったあの６人のものだと予測するのは、簡単だった。

「一兄！」
「黒崎サン！」
そのとき、地下に身を躍らせたのは、浦原喜助だった。
ほとんど音も立てず、ヒラリと地上に足を着くと、立ち上がった。
「たった今、『七人目』の霊圧が確認できました」
「七人目？」
一護が、鸚鵡返しに問い返した。
「ちょっと待て・・・それってどういうことだ？」
チラリ、とウルキオラが浦原の顔を見やる。その表情は、まったくの無表情のままだ。
対する一護の声は、明らかに動揺している。

「シロかクロかってことですか？」
帽子の鍔の向こうの目は、冷徹なまでに鋭い。
「限りなくクロですよ。アナタも知ってるでしょう。『七人目』は、ありえないんですよ。
そしてその人物は、日番谷サンのところへ向かっている」
ぐっ、と一護が唇をかみ締める。
「浦原サン！ここは俺が抑えるから、冬獅郎のところに行ってくれ！」

「無理ですね」
浦原の言葉は、簡潔だった。
「もうじき、大事な連絡をしてくる人たちがいるんでね。
アタシは準備をしないといけません」
浦原と一護が視線を交し合う。それは切れそうなほど鋭かった。
しかし、一護はすぐに、わかった、というように頷く。

「じゃあ、コイツを倒して俺が行く」
一護が、斬月の切っ先を、まっすぐにウルキオラに向けた。
その目には、全く迷いがない。
ビシッ！！
刀に光芒がまとわりつくと同時に、刀の真下の地面に皹が入った。
「てめえらは、絶対許さねえ・・・！」
夏梨は兄を見上げ・・・ゾクッ、とした。
いつもの兄じゃない、と思うくらいに。
その表情にあるのは、明確な「憎悪」。
夏梨には、兄がこれほど誰かを憎むことが出来るとは、想像もしなかったくらいに。

「それほどの力を、眠らせているとはな」
ますます光芒を強くする刃を見つめ、ウルキオラがぽつりと言った。
「あの６人の死神のためか？無駄なことだ」
「・・・てめえには、絶対わからねえ」
――　それでも、ダメだ・・・
対する二人の霊圧を、夏梨は冷静に見極めていた。
その大きさは、一護が上回ってはいるものの、ウルキオラを倒すほど凌駕してはいない。

「・・・夏梨サン」
その夏梨の後ろから、浦原が声をかけた。

「日番谷サンは、六本木にいるようですよ」
「浦原サン！あんた、夏梨に何を・・・」
「何をしたらいいんだ？」
夏梨は、一護の言葉を強くさえぎった。
できるか、できないかじゃない。やるか、やらないかだ。
「・・・上等」
ニヤリ、と浦原が笑った。
そして、抜き身の氷輪丸を拾うと、夏梨にむかって突きつけた。

VOL．17　タイムアウト―1　［グリムジョー出陣］

「ルキアちゃん」
小太りで、白いものがかなり混じった髪を結わえているのは、私の担当の先生だ。
「人生の幸せの量って、みんな同じだというわ。
あなたは前半苦労した分、これからいっぱい幸せが待ってるから。
・・・幸せになりなさい」

その言葉を、私は何度胸の中に呼び起こしてきたことだろう。
皺に囲まれたやさしそうな目、上を向いた口角。写真のように鮮やかに思い出せる。
でも・・・考えてみれば、彼女は誰だったのだ？
私は、名前すら「思い出せない」のに。
そして名前を覚えていないことにすら、今まで気がつかなかったのに。

「あ・・・」
怖い。自分の記憶が、信じられない。
ルキアは両方のこめかみを押さえ、深くうつむいていた。
「ルキア」
恋次がルキアの肩に触れ、ルキアはびくりと肩を震わせた。

「よく聞けよ・・・」
恋次の声がゆれている。
「近所の人にざっと聞き込んだがな。ここに、孤児院なんてなかったそうだ。
5年前どころか、何十年も前から」
「あ・・・」

見上げた恋次の顔も、なんだか見慣れないもののような気がして。
ルキアはぞくぞくとこみ上げる寒気を押さえた。

――「5年前。何してたんだ？」
夏梨の声が、耳に突き刺さる。
妙に違和感があったあの質問は、実は的を得たものだったのではなかったか。
現に私たちは今、自分たちの5年前を、否定されたばかりではないか――
腕にかけていた赤い鞄が、音を立てて濡れた地面に落ち中身が散らばっても、ルキアは拾うことができずにいた。

「ルキア。しっかりしろ」
ルキアを我に返らせたのは、いつになく穏やかな恋次の声だった。
地面にしゃがみこむと、散らばった中身を拾い集め始める。
「恋次、お前――」
「過去の記憶がどうだろうが、俺とお前は変わらずここにいるんだ。消えてなくなるわけじゃない。過去なんて、それだけのもんだろ？」
この男は、強いな。
私がもしも一人だったら、このままパニックに陥ってしまったかもしれない。

「ありがとう。恋次」
臆病なためにヒネクレモノ。
そんな私が、ヒトに心から礼を言うことなど、めったにない。
恋次は立ち上がると、ポン、と私の肩に手を置いた。
それは恋次の癖のようなものだ。
手を置かれるたびに、私は大丈夫だと、言われた気がする。

「ん？これ何だ？」

恋次が、拾い忘れた赤いカードを見下ろして、怪訝そうに眉をひそめた。
「あぁ。昨日、クロサキ医院であった、綾瀬川という人にもらったんだ」
「あぁ？」
とたんに恋次が、顔をしかめてそれを見下ろす。
「あのオカッパ男か？いつの間に・・・」

ルキアとすれ違うときに、そっとカードを手の中に滑り込ませてきたのだ。
――「気が向いたら遊びにおいでよ」
そこには美容院の名前、アドレスと、「綾瀬川弓親」という名前が黒字で記されていた。
「ただの美容院のカードだ」
なぜか言い訳がましい気分のまま、そそくさと拾おうとして・・・
ルキアはぴたりと動きを止めた。

「なぁ、恋次」
「なんだよ」
「あの場にいた、私たち以外の４人の客、全員が５年前以前は別の町にいて・・・
そして、何してたか聞かれたら口ごもったな。私たちと同じように」
「ン？お前、ひょっとして」

もちろん、こんなものは賭けだ。
おそろしく的外れな考えかもしれない、ということは分かっている。
でも、今この状態から一歩でも抜け出すには、何かやらなければ始まらない。
「・・・お前の直感は信用してる」
バカバカしい、と一笑に付すかと思った恋次は、ニヤリと笑ってル

キアを見下ろした。
――　過去を失ったのが、もし私達だけでないとしたら・・・
もう春も爛漫だというのに、ボタンを押す指は凍えそうなほど冷たかった。

そして、2人はまだ気づいていない。
雨の濡れる坂道を、ゆっくりとした足取りで歩いてくる男の姿。
雨が男の体にも降り注ぐが、水滴はその肩を、足をすり抜け、そのまま地面にはじける。
薄く差しこんだ太陽の光も、この男の下に影を作りはしない。

その男の装束は、黒いマークは入っているが、ほぼ純白。
逆立った髪の色は、淡い水色である。
目の周りに黒の隈取があり、その顔も喉も手も、驚くほど色が白かった。
「ち。めんどうくせえな」
ペッ、と野卑な仕草で地面に唾を吐いた。
「このグリムジョーが、いちいち出張る必要があんのか？あんな死に損ないの奴らのために」
上がりきった坂の向こうに、電話で話し込んでいる2人の背中が見えた。

VOL．18　タイムアウト―2　［砂の記憶］

「あのさ。僕、ずっと前から思ってたんだけど」
「なんだよ」
「不要だと思わない？」
ペシ、と髪ひとつない頭を叩き、弓親がため息をついた。
わずかな動きで、綺麗に切りそろえられた髪が揺れる。

「こんなパチンコ玉、ワックスつけて磨いておいたらいいじゃない」
「てめえ。客捕まえてパチンコ玉たぁ何だ！」
「やだやだ、口が悪い男なんて、いまどきもてないよ？」
一角が何かを言い返す前に、
「弓親さん、こっちお願いします！」
黒髪を見事なドレッドにした女が、弓親に声をかけ、弓親はシャンプーを終えたばかりの客の席に向かった。

場所は、弓親が昼間働いている、渋谷に程近い美容院だ。
映画などの特殊メイクにも引っ張りだこの、個性派ぞろいのスタッフで有名な、その名も「髪結ＵｃｈｉＨａ」。
もちろん、オカッパで前髪を七色に染めた弓親のファッションは、同僚と比べても遜色ない。

「うわぁ、今日もホントにお綺麗ですね、由美子さん」
「あらやだ、今日も口がうまいわね」
華やいだ女の声を聞きながら、はぁ、と一角は不機嫌そのもののため息をつく。
大きな鏡に映し出された、強面そのものの顔、そしてエプロン姿は、とてつもなく滑稽だ。
――　何がお綺麗デスネー、だ。

女におべっかを使う男なんて、男の風上にもおけないと思う。
一体なんで、あんなに外見も中身もオカマみたいな奴と、これほどの腐れ縁が続くのか。
我ながら謎だ、と一角は思った。

「ホラホラすねないの、一角。もうちょっとしたらその頭磨いてあげるから」
ちらり、と弓親が一角を見やった。
その時だった。鳴り響いた音に、弓親のはさみを握る手が止まる。
ジリリリ・・・！
その電話は、昭和の香り漂う「黒電話」である。
カウンターの向こうにかけていったスタッフの一人が、受話器を耳に当てる。
「はい。髪結ＵｃｈｉＨａです。ご予約のお客様でしょうか？・・・
あ、はい。綾瀬川、ですね」
「誰？今仕事中だから、後でかけなおすって言ってくれないか」
「ええ・・・でもそれが、ずいぶん慌てていらっしゃって・・・
朽木ルキアさん、だそうです」

朽木ルキア・・・？
あぁ。しばらく考えて、弓親は心中頷く。
昨日クロサキ委員で会って、美容院のカードを渡した生真面目そうな少女が、ルキアと呼ばれていた。
口数は少ないが、その分もの言いたげな大きな瞳が、印象的だった。

「・・・分かった。今出るよ。すみません由美子さん」
「モテる男は大変ねぇ。ぜんぜんいいわよ」
甘い声を背中に聞きながら、手をぬぐった弓親が、カウンターの向こうに手を伸ばした。
「・・・はい。綾瀬川です」

「あ、あの。昨日クロサキ医院でお会いした、朽木ルキアといいます」
受話器の向こうから聞こえたのは、凍えたような少女の声だった。
「あの。突然ですみません。
ぶしつけなお願いだということは承知しています。
ですが、5年前の知り合い・・・例えばご両親に連絡を取ってもらえませんか？」
「・・・どういうことだい？なんのために」
弓親は眉間に皺を寄せて、聞き返した。
初対面に近い人間に頼むこととしては、いや、そうでなかったとしても・・・突拍子もない頼みごとには間違いない。
ただ、その声には何かに追い詰められたかのような、切迫感があった。

「オイ？どーしたよ、弓親」
一角が大またでこちらに歩み寄り、カウンターを覗き込んだ。
「昨日のルキアちゃんっていう女の子がね。親と連絡取ってくれって急に言うんだよ。
今事情を聞こうとしてるとこ」
「・・・」
一角は、口をへの字に曲げてしばらく沈黙していたが・・・おもむろに、尻ポケットから携帯電話を取り出した。
「ん？電話するの？」
「どーせヒマなんだ。それに、どーせ電話しなきゃなんねーと思ってたんだ」
不器用な手つきでボタンを押す一角を、弓親はあっけに取られて見守った。
東京に出てきてから、一度だって実家に連絡をしたことはないはず

だ。
「・・・ちょっと待て」
携帯に耳を押し付けながら一角は言った。
呼び出し音が聞こえる。３回、４回・・・
早く出ろ、という気持ちと相反して湧き出してきた「出るな」という思いに、一角は心中辟易した。
そっちに帰ることは、伝えなければならない。
そのためには、今すぐにでも連絡は取らなければならない。
しかし、最後に会ったときの父親の顔が、忘れられないのだ。

大学は行かない、家を出ると言った一角に、怒り狂った厳格な父親が、最後に見せた涙を。
大学にいけなかった父親が、成績優秀だった一角に見ていた夢。
息子とは言え他人に夢を見るな、と思っていた。
でも、その夢とは程遠い今の自分が戻ってくるとしれば、父はどんな顔をするか、なんとなく想像はついたからだ。
しかし、そんな一角の迷いは、意外な形で断ち切られた。

「はい」
出てきたのは、無愛想な年嵩の男の声。
風邪でも引いているのか、と初め思った。声があまりに違ったからだ。
「・・・俺。一角だ」
「あ？一角？誰だお前」
は？
一角は、思わず携帯から手を離し、接受画面に映し出された電話番号を見やった。
「ちょっと一角。ひさしぶりだからって、実家の番号間違える？普通」

弓親はルキアとつながったままの受話器をぶらさげて、弓親が呆れた。
しかし。
「・・・」
一角は、接受画面を睨んだまま、ピタリと動きを止めていた。
一言も発しないのを、怪訝そうに弓親が見やる。
「――　間違って、ねえ」
何度見直しても、自分が生まれ育った家の電話番号に、違いはなかった。
なのに、なんで別人が出るんだ？
たとえるなら、今まで強固だと信じていた土台が、突然崩れ落ちたかのような。
背筋がサァッ、と寒くなるような焦りが、一角を包み込む。

「住所から、ネットで検索できない？」
弓親が、カウンターの上におかれたノートＰＣのマウスを覗き込んだ。
新しくブラウザを立ち上げ、Ｇｏｏｇｌｅ　Ｅａｒｔｈを検索する。
２人が育ったのは宮城県、高千穂の中心部。Ｇｏｏｇｌｅ　Ｅａｒｔｈなら、家の屋根まで見られるはずだ。
そして、住所を検索欄に打ち込もうとして・・・弓親の細い指が止まった。
――　住所は・・・
高千穂、までは思い出せる。
しかし、町名となるとぼやけてくる。番地となると全く覚えていない・・・

一角と弓親は、思わず顔を見合わせた。
こんな重要な、基本的なことを忘れたまま、そして忘れたことにも気づかないまま、どうして５年間も暮らしていられたんだ？

「おい！」
耳元で、ルキアの声が聞こえる。
「連絡できなかったのだな？実は、私たちも・・・」
一角がズカズカとカウンターの置の奥に回り、受話器に耳を近づけた。
そこからもれ聞こえるルキアの話は、自分たちと・・・状況こそ違えど、瓜二つだった。

VOL．19　タイムアウト―3　［襲撃］

――　どういうことだ。
過去の記憶は、持っている。場所だったり、電話番号だったり。
しかし、個人を確実に突き止められるような記憶は抜け落ちている。
そして、自分の記憶が穴だらけだということに気がつかないよう、
今まで操作されていた・・・？
「・・・誰に？」
ふと浮かんだ自分の考えに、弓親は背筋が寒くなった。
そんなはずはない。
ひとりひとりの頭にしかない、過去や思いに、誰かが手を加えられるはずがない。

「あの場にいた客人は、あと2人いた。あの2人は・・・？」
ルキアの声に、弓親はハッと我に返った。
あの場にいたのは・・・乱菊と、冬獅郎。
「・・・冬獅郎くんなら、今六本木だよ」
「オイ、なんで知ってんだよ」
一角が横から口を挟んだ。
「ノルウェーの出身って言ってただろ？彼。
僕の友人で、ノルウェーに渡りたいって言ってる子がいてね。
紹介したんだよ。たぶん今頃会ってると思う」
ただ・・・この調子じゃ、もしかしたら僕たちと同じように、記憶の穴を見つけるだけかもしれないけど。

「電話してみるかい。まぁ、夜にしたほうがいいけど」
初めの動揺は、潮が引くように収まってきていた。
確かに、自分の過去を・・・土台の部分が全く思い出せない、というのは心もとない。

だが、この5年ずっと忘れていたということは・・・いまさら慌てたところで、どうなるものでもない。
夜にでも一度集まらないか、と弓親が電話の向こうに言おうとしたときだった。

「なんだ、てめえ！何モンだ！」
電話の向こうから、緊迫した恋次の声が響いた。
「なんだ？どうしたんだい？」
「・・・刃物を持った、青色の髪の男が・・・」
ごくり、とルキアが唾を飲み込む音が聞こえた。
「なん・・・」
「おい、弓親」
一角が弓親の肩を、痛いほどの力でつかむ。

「どうし・・・」
振り返ったとき、一角は美容院の大きな窓の外を見ていた。
窓の外はスクランブル交差点で、皆信号待ちをしている。
だが・・・通りの真ん中を、明らかに異形のモノたちが何人も、まっすぐにこちらに歩いてきていた。

服は手首から足首まですっぽりと覆う、揃った白装束。
その顔には、ところどころに割れた仮面のようなものがついていた。
車が走り抜ける・・・が、その異形の者たちの体をすり抜け、何事もなかったかのように通り過ぎていく。
周りにいる人々も、これほど異様な風景なのに、誰も見えていないようだった。
言ってみれば、それはまるで合成映像のような。

しかし・・・その顔のひとつは、はっきりと一角と弓親のほうを見て、ニヤリと笑った。

そのとき、ルキアとつながった電話の向こうで、声が聞こえた。
「何だァ？忘れたのかよ。お前たち死神とは、ずいぶん仲良くしたもんだろうが」
――　死神？
たしか、その名を昨日、黒崎夏梨が口にしていた。
「現世なら、人間に溶け込んで逃げ切れると思ったのかよ？
・・・だが、もう逃がさねえぜ。タイムアウトだ」

その、次の瞬間。
歩いてきた異形の者たちが、手のひらをこちらにかざすのが見えた。
それと同時に、手のひらから吐き出されたのは、光球。
それは、あっという間に2人のいる美容院に迫り・・・それが危険だ、と察したときには、美容院の一角に突っ込んでいた。

ドォン！！

鈍い音が響き、辺りに人々の悲鳴が木霊する。
握り締めた黒電話の受話器からは、回線がやられたのだろう、ツー・ツー・ツーとしか聞こえてこない。
「なに・・・」
「どうしたの？急に・・・」
訳が分からないだろう人々が、逃げ惑う声が耳を打つ。

土煙と、崩れ落ちるコンクリートの破片の中・・・彼らは、やってきた。
まるで、ロボットのような無表情で、あわてるでもなく、一角と弓親のほうへ歩いてきた。
「なんだか分からねぇが、弓親、ここから離れるぞ！」
「・・・ああ！」
なにがなんだか分からぬまま、二人は瓦礫の中身を翻し、通りに向

かって駆けた。

絹糸のような柔らかな雨が、さっきから降り続いていた。
細かい雨粒は、落ちるというよりも、空中で舞っているように見えた。
空を見上げると、ぐんぐんと雲が動いてゆく。
もうすぐ雨上がりも近いのだろう。雲間から光が漏れた。
一切の外の音は、遮断されている。

ｉ－ｐｏｄ　から流れる、異国の楽器の音、どこか物寂しげな音楽に、冬獅郎は耳を済ませていた。
窓ガラスには、中学の制服姿の自分が映っている。
その首筋に浮かんだ赤い跡を見て、冬獅郎は眉間に皺を寄せた。
そして、制服の襟を立て直して、その跡を隠した。

ＶＯＬ．２０　タイムアウト―４　【情事未満】（前書き）

日番谷と乱菊、微エロです。苦手な人回れ右！

VOL．20　タイムアウト―4　［情事未満］

今朝のことだった。
冬獅郎は制服のボタンを留めながら玄関に下りると、革靴に足を通した。
「あたしのゴールドのヒール、出しといて！」
部屋の中からは、バタバタと走る音と一緒に、乱菊の慌てふためいた声が聞こえてくる。
あぁ、と返事を返すと、冬獅郎は靴箱をあけた。
乱雑に詰め込まれた靴に顔をしかめながら、目指す金色の靴を出し、玄関に並べる。

「オイ、眉毛片方しかねーぞ」
走ってきた乱菊の顔を見ていうと、うぁ、ともあぁ、ともつかない呻きを漏らして、また洗面所に走っていった。
――　全く。これでできるＯＬってんだから・・・
世間の評価って言うのもテキトーなもんだ、と冬獅郎は思う。

まもなく、革のスカートと黒いジャケット、白のインナーをまとった乱菊が走り出てきた。
インナーはデコルテがかなりあいており、豊かな胸元がこぼれそうに見える。
「ありがと！」
玄関の靴に足を入れうつむくと、スカートに深く入ったスリットと、白い太腿が目に入った。
「・・・」
別に見たくて見たわけじゃない。勝手に目に飛び込んできただけだ。
しかし、乱菊は急にバッと顔をあげて、立ち上がった。
身動きすればぶつかる、狭い玄関の中で、二人の視線がぶつかった。

「シたい」
「はぁっ？」
たじろいた冬獅郎が文句を言うよりも早く、乱菊のやわらかい体が、体当たりでもするかのようにぶつかってきた。
その赤く彩られた爪が、押し返そうとした冬獅郎の手首をまさぐり、押さえつけた。
しっとりと湿った唇が、冬獅郎の唇の上に、印でも押すかのように、ゆっくりと押し当てられた。

おい。
冬獅郎は、とっさにリアクションする意欲を失った。
今、どちらも遅刻寸前で、慌てて家を出ようとしてただろ。
なのに、なんでいきなりこうなるんだ、コイツは。
せめて夜まで待て。
そう言おうと口を開くと、間髪いれず、するりと乱菊の舌が忍び込んできた。
言葉を形作ろうとした舌を音を立てて吸われ、冬獅郎が眉間に皺を寄せる。

――　なんだ・・・？
それは、その時に初めて感じた、違和感。
性急に求めてくるその舌が、唇が、震えている。
その震えはあっという間に全身に広がった。
しかし、乱菊がそれに気づいていないように見える。
――　何か怖いのか？
怯えているのか、焦っているのか、押しのけて何事もなく終わらせるには、それは切実だった。

「・・・」

無言の間に、2人の間に息が漏れる。
次に喘いでのけぞったのは、乱菊だった。
「・・・ッ」
その耳朶に近い首元に唇を寄せられ、思わず声を漏らす。
冬獅郎の手が、手首を押さえた乱菊の手を跳ね除けた。
そして、わずかに離れた乱菊の細腰に手のひらを当てると、ぐっと引き寄せる。
もう片方の手が、空いていたドアの鍵を、再び閉めた。
カチリ、と。
玄関に音が響いた。

いつのまに立場が逆転したのか、乱菊はドアに背中を押し付けられていた。
背中にすれるドアの感触すら、体を熱くさせる。
いつの間にかインナーのボタンが外され、その隙間から白い下着が覗いている。
「前から・・・思ってたんだけどさ。ブラのホック取る速度は大したもんよね」
「うるせえな」
吐息の間に漏らした感想は、ぴしゃりと封じ込められる。

下着と肌の隙間に、冬獅郎の手が入り込んだ。
やがて、冬獅郎の手の動きと共に、乱菊の肌が上気し始める。
露になった胸に、冬獅郎が唇を寄せた。
ほぅ、と喉をのけぞらせた乱菊が、満足げに息をつく。

「早く終わらせて・・・学校行かなきゃ、なんて思ってる？」
「当たり前だろ」

「そう簡単にイかないから」
スル、とその手が動き、冬獅郎の首のネクタイを解く。
「そっちこそ。ネクタイを解く速さは大したもんだ」
「ヘラズグチ」
ニコリ、と乱菊が笑うと、シャツのボタンをあきれるほど鮮やかに外した。
そして、裸の胸にヒンヤリした手のひらを這わせる。

「オイやめろよ」
眉間に皺を寄せる冬獅郎。
「男にこんなもんいらないわよね。必要だとすると、カンジるため、くらい？」
ワインレッドに塗られた乱菊の爪が、ぐりっ、とそれを押さえつけた。
「うっ・・・」
初めて冬獅郎が声を漏らす。
「ゾクゾクするわ。その声。大好き・・・」
首を捕らえた乱菊が、冬獅郎の体を引き寄せ、その耳にキスを落とした。

「ねぇ。好きよ」
「・・・あぁ」
「あぁじゃなくて。あたしのこと好きならそう言ってよ」
「・・・・」
「いえないの？言ってよ。『愛してる、乱菊』て」
「無理」
「・・・・ちょっと」
乱菊が、体を離しかけた冬獅郎を手招きする。
「いいから。近う寄れ」

「いつのヒトだ、お前は」
そして、身を寄せた冬獅郎の顎のしたあたりに口をつけ、強くキスをした。
「・・・て！」
淡い痛みが走り、冬獅郎はあわてて逃れるが、もう遅い。

「てめ・・・跡つけるなってあれほど言ってんだろーが！」
「知らないわよ！！」
「何切れてんだ、急に！！」
「惚れた女を苗字呼び？好きって言ってって返事が『無理』？？」
さっきまでの雰囲気はどこへやら、冬獅郎の襟をつかんで引き寄せた姿は、カツアゲにしか見えない。
「さあ言え！」
「・・・」
2人の間に沈黙が落ちる。
3秒、4秒・・・乱菊の気は、短い。

「馬鹿野郎！」
男前にもそういい捨てると、服を直しもせず、そのままドアを開けて姿を消した。
もしも廊下をすれ違う人がいれば、間違いなく動揺させるだろうカッコウのままで。
そのまま、カツ、カツ・・・と足音が遠ざかってゆく。
そして、エレベーターが閉まるとき、乱菊はふと、心細い視線を、動かないドアに向ける。
室内では、鏡の前で冬獅郎が頭を抱えていた。
襟を立てれば一時的に隠れるが、これじゃ目ざといクラスの女子に、絶対気づかれる。
その首には、くっきりとキスマークが浮かんでいた。

VOL．21　タイムアウト―5　［禁じられた出会い］

めんどくせえ・・・
どうしても、気づけば頭が今朝のことに戻ってきている。
どうしたって、アイツと俺では、ものの考え方が違う。

俺に足りないのは、誰かに会いたいっていう衝動。
そして、誰かとずっと一緒にいたいっていう、継続した気持ち。
それから、愛してるとか、一緒にいたいとか、会いたいとか、相手に気持ちを伝えるスキル。

これまで、そんなもの必要なかったんだから、仕方ない。
それどころか、「レンアイカンジョウ」なんて、テレビドラマにしか存在しない感情だって本気で思ってたくらいなんだ。
俺にとって他人は、モニターに映っては通り過ぎる、景色と同じだった。
目に見えるし、近づけるけど、決して触れることはない。
ましてや、モニターの向こうの相手に何かを求めるなんて・・・夢にも考えたりはしない。
そう。今ヘッドフォンを通してみる、人々が無音で通り過ぎる世界のように。

これまでは、そうだったんだ。
俺は、俺のペースを崩したくないんだ。
それでも。
馬鹿野郎。そう言い放ちながら、涙をためたアイツの瞳を思い出す。
言おうとすれば簡単に口に出せる一言を、いつまで経っても言わない俺が憎かったか？

まさか、そんなことも言えないくらい臆病者だとは、思っていないんだろうな。
怖いのは、これまでの自分を壊すことか。
それとも、乱菊を失うことか。

その時、もたれかかっていた壁の向こうで、ドアが開くのが見えた。
小さな袋を手に持った男と、その腕にしがみついた女が、同時に出てくるのが見えた。
店を出たところで、小さな袋を渡された女が、満面の笑みを浮かべ、男に何か言っている。

冬獅郎は、その店のショーウィンドウに、幾度目かの視線を走らせた。
煌びやかな照明の下で輝いているのは、色とりどりのアクセサリーだった。
シルバーやゴールドの指輪。冬獅郎には名前も分からない、色とりどりの宝石。
冬獅郎は、無言で腕時計を見下ろした。
時刻は、１６時４５分。待ち合わせの時間には、まだ１５分ある。

ふう。
冬獅郎は幾度目かのため息をつくと、ｉ－ｐｏｄの電源を切り、ヘッドフォンをかばんの中に突っ込んだ。
途端に、世界に音が戻ってきた。

十分後。
小さな紙袋を提げて、冬獅郎が店を出てきたその瞬間だった。
「あなたが・・・日番谷冬獅郎くん？」

女・・・少女くらいにも思える、まだあどけなさの残る声。
思わず声が出そうなほど驚いた冬獅郎だが、動揺をおくびにも出さず、現れた人物を見返した。

「アンタが、斑目が紹介するって言ってた人か？」
待ち合わせは５時に、この辺り。
銀髪に碧眼という目立ちすぎる外見のため、いちいち相手の外見までは聞いていなかったのだ。
しかし、男か女かくらいは聞いておけばよかった。
冬獅郎はこっそり、襟を立てて首のアザを隠した。

――　斑目より何歳も年下か？
黒目がちな、丸い大きな瞳が、まっすぐに冬獅郎を見上げていた。
おそらく長い黒髪は、後ろですっきりとまとめられている。
「ええ。斑目さんに、ノルウェーに詳しい人がいるって聞いて、あたしが紹介を頼んだの」
「あぁ、聞いてる」
冬獅郎がうなずくと、少女はにっこりと微笑んだ。
「あたしの名前は、雛森桃。よろしくね、日番谷くん」
頬にくっきりと笑窪が浮かんだ。

――――――――――――――――
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・
ちょっと休んだら、もどってきます。

VOL．22　最後の6人─1　［脱皮］

「ちっ・・・くしょー！何なんだ、このバケモン共は！」
ぜぇ、ぜぇ、と息を切らして通りを駆けていた一角が、後ろを振り返った。
振り返ったとたん、
「あぶねえ！」
隣を走っていた、弓親の肩を突き飛ばした。
さっきまで弓親のいたところを、光球がないで行く。
アスファルトが、まるで豆腐のようにアッサリと削れ、向かいに道路にいた女子高生たちが悲鳴をあげる。

「てめえら・・・変な攻撃しやがって。直接殴りかかって来い！」
「バカ、一角！何考えてんの！」
その場に立ち止まり、化け物たちと向き合おうとした一角を見て、振り返った弓親が叱責する。
「どうした・・・反撃しないのか、死神」
背後に影のように迫る化け物たちは、疲れも見せず、スルスルと距離をつめてくる。
その数、合わせて8体。

──　死神？
死神、という言葉くらいは知ってるが、どう頑張ってみたところで、自分たちとの接点なんてない。
「人違いだろ、こりゃ・・・」
弓親に肩を無理やりつかまれ、その場から引きずられた一角が、チッと舌打ちをした。
「人違い」
弓親が息を弾ませながら、一角に視線をはしらせた。

「じゃあ、言ってみるかい？この化け物どもに。人違いですーって。きっと帰ってくれるよ、スムーズに」
「てめーこそ、嫌味いう余裕あんじゃねえか・・・こっち行くぞ！」
一角が指差したのは、東京の緑地増加計画で作られた、広大な自然公園だった。
こんな雨混じりで、しかも平日となれば、人はそれほど多くないだろう。
人気がないゲートをくぐり、花海棠が両側に咲き乱れる道を、公園内に走りこんだ。
見渡す限り芝桜が広がり、周囲はぐるりと森に包まれている。
「つまらぬ」
ほっ、と息をついた途端。背後から声が聞こえた。
「な・・・」
空気が鳴る音に一角が振り向いた時には、その眼前に鎖鎌が迫っていた。

「ちっ！」
とっさに、顔の前に腕をかざす。そして、その手首に鎖鎌が巻きついた。
「ちょろちょろ逃げおって。反撃する気がないなら、殺す！」
その腰に手をやり、引き抜いたものに・・・弓親は、思わず一歩引いた。
それは、時代劇で見るような、古風な日本刀。
――　冗談だろ・・・？
優雅な曲線を描く刃が、ギラリ、と淡い光に輝く様は、まるで悪い夢のようだ。
仮面に覆われた目の奥は、何を考えているのか全く読み取れぬ。
「逃げろ弓親！ここはてめーで何とかする！」

一角が弓親を見て怒鳴ったとき、弓親の視界の隅で、その化け物が滑らかに地面を動くのが見えた。
一角のほうに向かって、刃を振りかぶる。
「一角！！」
「接近戦なら・・・勝てる！」
弓親は、信じられない思いで一角の横顔を見た。
笑って・・・いる。まるで嬉しくてたまらないように。

「この野郎！！」
鎖鎌を逆に引っ張り、力の限り引き寄せる。
「な・・・」
バランスを崩した化け物に向かって、一角は獣のような速さで、一直線に駆けた。
「逃がさねえ！」
たわんだ鎖を投げかけ、その胴体をデタラメに絡まった・・・と思った瞬間、一角の膝が、化け物の腹にストレートに食い込んだ。
「ぐ・・・」
その体が後ろに吹っ飛び、刃が隣に落ちる。
俊敏な動きで立ち上がったが・・・その体が、ゆらり、と一度大きくゆれた。

「バケモノだろうが、イキモノだろ。だったら勝てる」
この男が好戦的なのはいつものことだが、ここまで・・・危険な香りが漂うほどだったか？
弓親は目を見張った。
まるで脱皮でもするかのように、この男の中から、別のモノが生まれようとしている。

「・・・とにかく！もっと人目につかないところに行こう！」
弓親が一角に声をかけ、先に立って走り出す。

チッ、と一角も舌打ちをすると、弓親の後を追った。

「どっかで止まるぞ！俺は戦う！！」

「調子に乗るんじゃないの。八体いるんだよ？」

さっきの一体も、今は何事もなかったかのように追ってきている。

普通の攻撃で、致命傷に近いダメージを与えるのは、きわめて難しい、と思っていいだろう。

――　どうする？

弓親が考えをめぐらせたとき。ふ、と頭の中に滑り込んだ明晰なイメージがあった。

――　「弓親。もしも私たちに連絡を取れなかった時は、ここに電話しなさい」

それは、母親の言葉。

弓親の記憶の中の母親は、「志可（しか）」とい名の女性。

しかし、映像に浮かぶ母親は、首下まではくっきりしているが、顔は全く分からない。

――　「いりませんよ、そんなもの」

そう言った弓親に、すうと手が伸び、小さなメモを握らせた――

なぜだろう。

5年前以前の記憶は全て漠然としているのに、この記憶だけは、やけにはっきりしている。

そのメモを、僕はどうしたんだったか・・・

「おい！弓親！この辺でいいだろう」

一角の声に、弓親は我に返った。

ふわり、と鼻腔をくすぐったのは、花の香り。

顔を上げると、見渡す限りの薄紫が目に入った。

ピンクと紫が交じり合ったような花房が、弓親の頭のあたりまで垂れてきている。
見事な藤棚だ。
そう、言おうとした。
その時。ふわり、と柔らかな亜麻色が視界を通り過ぎ、弓親は顔を上げた。
「・・・あ」
思わず、藤棚を振り仰ぎ・・・声を漏らしていた。

VOL．23　最後の6人―2　［亜麻色の姫君］

弓親の見上げた先、藤の曲がりくねった、巨大な枝に腰を下ろしていたのは・・・一人の、若い娘だった。
亜麻色（あまいろ）の波打つ髪が、風に乗って揺られ、春のやわい光の中で、けぶって見えた。
その髪は、小柄なその娘の、膝より下くらいの長さはあるだろう。
深い藍の着物の上に、全身を覆う銀糸の薄布（ショール）をまとっていた。
薄布には、異国を思わせる、精緻な透け模様がかたどられている。
ふわり、と藤の花房を揺らした春風が、薄布を漣のように輝かせた。
花に隠れてよく見えないが、下は黒い袴を履いているらしい。華奢なブーツの足が覗いていた。
肌の色は、透き通るように淡い。

明るい翠（みどり）の双眸が、ひた、と2人のいる辺りに据えられた。
「き・・・きみは」
弓親は、その言葉を押し出すのがやっとだった。
その姿の後ろに、藤の花がかすかに透けているのを見ても、弓親は驚かなかった。
これは・・・人外のものだ。
ヒトにしては、あまりに神々しく見える・・・
人が、これほどの麗しい姿でこの世に在ることが出来るとは、思えないほどに。

一角も、凍りついたように動きを止めている。
ザッ、と2人の背後に、幾つもの足音が響き・・・弓親と一角は鋭い動きで振り返った。
「おいアンタ、何者かしらねえが、逃げろ！」
少女に背を向けた一角が怒鳴った。

ゆらり、と少女の翠の瞳が、化け物たちに流れる。
――　動揺・・・してない・・・？
ちらり、とその瞳を見た弓親は、ちらりとも怯えを見せないその表情に驚いた。

「・・・これは、驚いたな」
次に言葉を発したのは、化け物たちの一人だった。
刀を下ろし、まるで弓親と一角が目に入らないかのように、ゆったりとした足取りで、少女のところへ向かう。
「『紅』の姫君ではないか。現世でお目通りかなうとは、夢にも思ってなかったぜ」
仮面に半分隠された口元が、ニヤ、と亀裂のように上がった。
「アンタの綺麗な目には俺たちなんか、獣みてえに見えるんだろうな。
汚らわしい破面に貶められる王家の姫。・・・そそられるぜ」

濁った8対の瞳を向けられても、紅の姫、と呼ばれた娘は、軽く小首をかしげただけだった。
その透き通った桜色の唇が、ゆっくりと開かれる。
「けがらわしい人など、おりません」
「穢れを知らないって奴か。その綺麗な顔、歪ませてやるよ」
「俺が先だ！！」
我先、と化け物たちが少女に襲い掛かった、その瞬間だった。

ザッ、とその眼前に、2人の男が姿を現す。
一角が、振り上げた腕を、そのまま横に払った。
拳で横っ面を張られた化け物が、さすがに倒れこむ。
弓親は、全く表情を変えず・・・化け物の一体の股間を、思い切り蹴り上げた。
「うぉぉ？？」

他の6人も動きを止める。一瞬の間隙に、一角の大声が響き渡った。
「寄ってたかって女襲いやがって、それでも男か、てめえら！」
「てめえら、先に片付けてやるよ！」
2人と8人の男たちが、一歩も譲らず、にらみ合う。

「もし。そこの方」
不意に、涼やかな声が、弓親に呼びかけた。
「何でしょう、美しいお嬢さん」
「こんな時でもそれかよ・・・」
一角がウンザリした声を出したが、聞こえないことにする。
娘は弓親の声に、ふわり、と微笑んで弓親のほうを見やる。
――　目が、悪いのか・・・？
声が聞こえてから視線を動かすそのしぐさは、視力に頼っていない。
弓親は思わず、明るく輝く瞳を見返した。

すぅ、と。
娘は、その細い指で、弓親を指し示した。
「過去を見失ったときには、どうすればよいか。あなたは知っていますね」
「・・・えっ？」
まるで宣託を下すような、穏やかな、それでも人を圧するような口調。
弓親は、思わず身の危険も忘れ、娘をまじまじと見た。

――　ここに電話しなさい。
そう言った母親の口元を、弓親は思い出す。
弓親が思い出したまさにその時、娘ははっきりと一度、うなずいた。
どうせ、誰も出やしない、とか。
出たところで、一体誰がこの状況を助けてくれるのか、とか。
さっきまで頭をよぎっていた考えは、嘘のように影を潜めていた。

娘の穏やかな言葉に、魅入られてしまったかのように。
「おい、弓親？」
一角の声をよそに、弓親は携帯を取り出し、そのメモリーを検索する。
「緊急連絡先」。
驚くほどあっさりと、無愛想な名前で記されている、その電話番号にたどり着いた。
そして、永遠に続くかと思われた呼び出し音の後・・・突然音が途絶えた。
一瞬の空白の後。電話の向こうから、声が聞こえた。

「はーい、浦原商店です♪」
「・・・は？」
そんなところ、聞いたことない。
弓親の当惑をよそに、男は飄々とした声でしゃべり続ける。
「綾瀬川弓親サン。あなたが最初にここにかけてくると思ってたんですよ。
傍には斑目サンもいますね」
「あなたは・・・僕たちをどこまで知っている？」
「知ってますよ。よーくね。五年前以前からも、ずっと」
明らかに口元は笑っているだろう、と思わせる声で、男は続けた。

「そろそろ、過去の穴に『気がついてしまう』頃かと思ってたんスよ。
貴方たち6人が出会うことが引き金でしたから」
「・・・お前、誰だ。僕たちの過去に関わっているのか？」
気づけば、冷たい声で問い返していた。
気がついてしまう？
引き金？？

「アタシは浦原喜助。貴方たちの記憶を弄(いじ)くった男ですよ」
「な・・・」

「弓親、戦わねーなら下がれ！」
ひょう、と振り下ろされた刀を交わし、一角が化け物の腕に取り付いた。
そして、力づくで、その刀を奪い取る。
「てめえら！」
振り回すと同時に、辺りには鮮血が飛び散った。
「一角！」
膝をついた一角に、弓親は携帯を持ったまま走り寄った。

見下ろしたその体には、あちこちに決して浅くはない傷があった。
勝てない、な。
それは、初めから分かっていたことではある。
でも、それを自覚した瞬間、自分の中に湧き出してきた、破滅的、とも言える衝動に弓親は戸惑った。
戦いを、欲している。自分たちの血が肉が骨が。
どうやら・・・バケモノを心に飼っていたのは、一角だけではないらしい。
「逃げるのは得意技じゃなかったのかよ？」
「あ？」
化け物の声に、一角は太い眉をひそめた。

「だってそうだろうよ。逃げて、逃げて逃げまくって、現世まで来たんだろ？てめーらは」
何を言ってる？弓親が聞き返そうとしたときだった。
「ちょっと弓親サン、携帯きらないでくださいよ！そしたらおしまいだ」
携帯から漏れてきた声に、弓親は顔をしかめる。

「何を・・・」
弓親の声は、電話から漏れてきた、浦原の声にかき消される。
――　経文か？
それは、日本語に見えるが早口のため、聞き取れない。
娘が、ぽつん、と呟いた。
「時空が・・・転送される」
「え？」
２人が振り返った瞬間・・・周囲が光に包まれた。
そして、一瞬の光が晴れた後、そこにはもう、誰の姿もなかった。

ＶＯＬ．２４　最後の６人└３　［死神色の狂戦士］

一歩ずつ、一歩ずつ、ゆっくりとしかし確実に。
青髪をもつ異形の男は、こちらに向かって歩いてきた。
どうして、そんなことが分かるのかは、分からない。
ただ、全神経が告げていた。
この男に勝てる可能性は、万が一にもないと。

「・・・ルキアよ」
恋次の声は、思いがけなく静かだった。
いざというとき、こいつはいつも、こんな風に穏やかな声になる、とルキアは思う。
「走れ。俺が、お前が逃げ切れるくらいの時間は稼いでやる」
「な！何を言うのだ恋次！私も・・・」
「もちろんタダとは言ってねえ！！」
恋次は、一歩ズイ、と踏み出し、ルキアを振り返りもせずに言った。
「もしも俺が戻ったら。一緒に暮らしてもらうぜ、ルキア」
「・・・恋次」

ルキアは、恋次の背中を見つめることしかできなかった。
強引で、不器用で、いかにもこの男らしい言葉。でも・・・
こんなときに。こんなふうに。気持ちを伝えられることなんて、望んではいない。

――　望んではない！
衝動的に言い放とうと想った言葉は、喉の奥に押し込められる。
この、大きな広い背中を、いつもいつも自分よりも前に、見続けてきた気がする。
時には仲間として。兄弟として。親しさと・・・時に、妬むことさ

えもあった。
――　妬み？
ルキアは、そこでふと、考えを止める。
一瞬浮かんだ、恋次の背中は・・・黒い、着物を着ていた。

「恋次」
「まだいんのかよ！早く行け！」
私たちは。
何か、本当に大切なことを、見過ごしているのではないか？

「ほぉ。見事に、タダの人間に化けたみてえだな。霊圧をカケラも感じねえ」
野卑な瞳が、ジロリ、と恋次とルキアに据えられた。
「な・・・何言ってやがる！人を人間じゃねえみてえに・・・」
グリムジョーは、チッ、と舌打ちすると、唾を地面に吐いた。
「それを説明するほど俺はヒマじゃねー。面倒臭ぇから、殺していくぞ」
そして、腰に差した刀を、無造作に引き抜いた。
「ルキア！」
恋次が叫ぶ。ルキアが凍りついたように動かないのを見て、
「くそっ！」
ルキアを横ざまに抱え上げ、駆け出そうとした。

背中に、力が抜けそうなくらいの強い気配を感じる。
おそらくそれこそが、「殺気」なのだろう。
濡れたアスファルトを、蹴る。
無我夢中の目に、その黒が焼きついた。

そして・・・恋次の視界の先に、不意に現れたのは・・・草履の足だった。

草履も、足袋も、足を固めた脚絆も、全て、闇に染め抜いたかのような漆黒。
「・・・とっ！」
慌てて恋次が足を止める。
そして、目の前に突然現れた、その姿を唖然として見つめた。
「誰だ・・・お前」

恋次よりの目の前に立っていたのは、手足を手甲脚絆で固めた、単衣に袴姿の男だった。
少年、といっていいほど、まだ年若い。
その服装も、髪も、瞳も、全て闇色に閉ざされている。
旅でもしてきたかのように肌は日焼けしており、襟元から除く胸元には、いくつもの古傷が見えた。
野蛮、とさえ言えるその気配は、ヒトのそれというよりも、獣に近い。
「あァ・・・気にすんな」
その瞳に、ギラリと冥い光がわたった。
「ただの殺し屋だ」

目を合わせた瞬間、ゾクッ、とした。
――　コイツは、ヤバい・・・
恋次は、本能的にこの少年に向き直り、青髪の男に背を向けて立っていた。
「恵蓮（エレン）が言うから来てみれば、アジューカスじゃねえか。
とんだ雑魚つかんじまった」
薄い唇から発せられたのは、少年にしては低い声。

「その漆黒の衣装、古傷・・・てめえまさか、鉄逸輝（くろがねッキ）か」
相手を見下すような、どうでもいいような、そんな視線を少年は返した。

それが示すのは・・・是。
少年の、これ以上ないほどに短い反応に、対するグリムジョーが返したのは
・・・一瞬の沈黙と、狂ったような笑いだった。
「王属特務どころじゃねえ、王家の狂戦士(バーサーカー)じゃねえか。
まさか、そこの死神を庇いに来たか？人助けとは似合わねえな」
「あぁ？」
逸輝、と呼ばれた少年は、面倒くさそうに、自分を唖然と見つめる恋次とルキアを見返した。

「死神？五年前、ソウル・ソサエティにいたとかいう奴らか？なんでこんなトコにいるんだ」
五年前。
その言葉に、ゾクリとルキアは背筋が冷たくなるのを感じた。
この異形のものたちまで、その言葉を口にするのか？

「じゃあ、なんでここに来た？」
「てめえら破面がいるからだろ。お前は殺してゆくぞ」
まるで、ちょっとモノを借りてゆく、という気安さで。漆黒の少年はグリムジョーを見た。
ニヤリ、とグリムジョーが笑みを浮かべる。
「てめえ相手に遠慮はしねえ。一気にいくぜ」
「あぁ」
顔色一つ変えず、少年はグリムジョーを見返す。
「『軋(きし)れ・・・豹王！！』
そのグリムジョーの叫びと共に、その体が、形を変えてゆく。
大きく開かれた口から、牙が何本も突き出した。
そして耳は、動物のそれへと姿を変える。
その全身は白い鎧のようなもので覆われ、髪は一気に、全身よりも

長く伸びた。
「な・・・」
ビリビリと空気が振動する。傍にいるだけで鼓膜が破れそうだ。
加えて、突然台風が来たかのような風圧。
数メートルの距離にいるルキアと恋次は、耳を押さえて道路に突っ伏すことしか出来なかった。

その隣を、影のように漆黒の姿が通り過ぎた。
「アジューカス※にしては強ぇな。もう一息でヴァストローデになるか・・・」
「おい！お前、素手じゃ・・・」
ルキアと恋次の前に立った、逸輝を見て恋次は叫んだ。
「死ね！」
グリムジョーの手のひらに、凶暴な力が集まっていくのが、ルキアから見ても分かった。
――　逃げなければ・・・
ルキアは立ち上がろうとするが、上半身を起こすことすらままならない。
あのグリムジョーという男から発する力が炸裂したら、どれほどの被害になるのか見当もつかない。
ここは、人通りはあまりないとはいっても、住宅地なのだ。
「王虚の閃光（グラン・レイ・セロ）！！」
勝ち誇った叫びと共に、カッ、と辺りに雷のような閃光が走る。
「うっ！」
とっさに、恋次がルキアの上に覆いかぶさった。
グリムジョーが、振りかざした右の手のひらを逸輝に向けた・・・
その刹那。
漆黒の闇が、光を裂いてグリムジョーの懐に飛び込んだ！

「な・・・！」
グリムジョーがのけぞるよりも早く、逸輝はすばやく、グリムジョーの振りかざした手のひらを握りこんだ。
逸輝の手のひらが、毒々しい漆黒の光に覆われてゆく。
ドォン！と激しい衝撃波が、地面に伏した2人にも届いた。

「・・・なんだ・・・」
一秒・・・・三秒・・・五秒。
何も起こらないことに気づいた恋次が、狼狽した表情のまま身を起こした。
それは、さきほどと変わらぬ薄曇。
静かな雨が、アスファルトに落ちているだけだった。
何も破壊されず、光の片鱗も感じられない。

「どういうことだ」
上半身を起こしたルキアが見たのは・・・両手をガッチリと合わせたまま、対峙する2人の男。
「・・・王虚（グラン・レイ・セロ）の閃光を相殺しやがるとは・・・」
ギリッ、と歯を食いしばって逸輝を見下ろしたのは、グリムジョーの方だった。
「『王』なんて言葉、そんな軽々しく技につけるんじゃねえよ」
バシッ、と何かが弾けるような重々しい音が響く。
交差した手の真下のアスファルトが、音を立てて割れ、割れ目は見る見る間に広がってゆく。

「・・・その命、狩らせてもらう」
その逸輝の言葉に、ルキアは冷水を浴びせられたかのようにゾッとした。
あまりにも、その口ぶりが滑らかだったからだ。
まるで毎日毎日、言いなれた言葉だとでも言うように。

その言葉を聴いた、グリムジョーがニヤリと笑う。
「てめえが死ねや！」
互いに、開いた手を相手に向かって繰り出した・・・と思ったとき。
不意に、辺りが光に包まれた。
「何？」
逸輝の言葉を残し・・・光が晴れた先には、もう誰の姿もなかった。
ただ、無人の原野が、雨に濡れているだけだった。

ーーーーーーーーーーーーーー
補足
※アジューカス
破面（アランカル）の強さ順に並べると、こんな感じらしい（原作ひっつんより）
ギリアン＜アジューカス＜ヴァストローデ
　ヴァストローデは稀にしか存在しない。隊長格よりも上の、最強の破面。
　原作みる限り、アジューカスと隊長の実力が似たようなもんみたいです。

VOL．25　最後の6人―4　［微笑みの殺意］

「おつかれさまでした！」
乱菊は、足早にエレベーターに乗り込むんだ。
地上1階へのボタンを押して、ふぅー、と息をつく。
そして、携帯をカバンから取り出すと、もう何度か見たメッセージを開いた。
「7時ごろ、外の日本庭園の辺で待ってる。冬獅郎」
必要最低限のそっけないメッセージに、ふふ、と笑う。
エレベーターが開くと、カツカツとヒールを鳴らしながら、セキュリティゲートを通って外へ足を踏み出した。
まるで迷宮のような大理石の階段を下り、日本庭園へとまっすぐに向かった。

ネオンに挟まれた、奥まったその日本庭園は、小さな都会の谷間のようだ。
ざっと見渡したところ、まだ冬獅郎はついてはいないらしい。
入り口の見える場所で、タバコをくわえると、ライターでそっと火をつけた。
ふっ、と煙を吐くと、一日の疲れが、そのまま煙と一緒に抜けていくように思えた。
――　謝らなくちゃ、ね。
愛してるって言えとか。名前で呼べとか。
普通の恋人同士だったら、それは別におかしなことじゃないだろう。
でも、冬獅郎は何というか・・・おそろしく不器用なだけなのだ。
口にされなくても、普段どれほど大切にされているかは、実はよく分かっているはずだったのに。
なぜだかあの時は、衝動的に、その言葉が聞きたくなったのだ。
明日じゃ、ダメなのだ。今晩でも、ダメなのだ。今すぐ、確かな言

葉がほしいと思った。
あの時全身を覆ったのは、恐怖・・・というより、正体も分からぬ焦りだった。

――　あたしも、まだまだ弱いな。
次にどう顔を合わせようかと思っていたときに、届いた一通のメール。
それは、思わずトイレに行ってもう一回まじまじと見るほど、驚いた。
ケンカすれば、自然修復するまでほったらかし、ていうのが今までの冬獅郎のスタイルだったからだ。
きっと葛藤しただろう、と想う。それでも、彼は一歩踏み出すことを選んだ。
だから。あたしが謝らなきゃ、と乱菊は思う。気づけば、ひとり微笑んでいた。

雑踏の中で、はしゃぐ女の声が聞こえてくる。
「ねー、見てみて、日番谷くん！カモの赤ちゃんがいるよ！」
そう、こんな風に、カワイイ女を演じるのも悪く・・・
日番谷ァ??
がば、と乱菊は体を起こした。
そして、それに返した声は間違いもなく・・・
「お、ほんとだな。こっち来るぞ！」
「かわいい～！！」
オイ。
乱菊は、じゅっ、と灰皿でタバコをもみ消した。
そして、大股で日本庭園の、池のほうへと向かった。
池の傍にかがんだ2人は、庭園に足を踏み入れると、すぐに見つかった。

よちよちと池のふちを歩くカモを、並んで見つめる一組の男女。
冬獅郎の隣にいたのは、黒髪をお団子にまとめた、高校生くらいの見知らぬ少女だった。
「あ、転んだ！」
「かわいいね～」
思わず、乱菊が足を止めてしまうほどに。
乱菊は、冬獅郎があれほど素直な笑顔を見せるのを、初めて見た。

・・・て。待て。
なんでアタシが、足を止めなきゃいけないのよ。
「何を・・・キャッキャ　キャッキャ騒いどんだ、冬獅郎！」
ハッ、と冬獅郎が顔を上げる。
「何だ、松本か」
立ち上がったその表情は、いつもの無表情に戻っていて。
乱菊は、ワケの分からない悔しさに襲われた。
「何イラッとしてんだよ？」
「来い！」
有無を言わせず、乱菊は、冬獅郎の襟首をつかんで、庭園の端へと寄った。
これじゃ、今朝と一緒だ・・・と思いながら。

「だ・れ・な・の・よ。そこの女は」
「お前が、斑目からの話取り次いだんだろうが！
ノルウェーの話聞きたいから、紹介してくれって」
ああ。
乱菊は一人で合点した。
そういえば、相手の性別は聞かなかったが、こんな若い女だとは思ってなかったのだ。
「話は終わってたんだが、お前が来るまでヒマだろって言って、いてくれただけだ」

「う・・・悪かったわよ」
さすがの乱菊も、冬獅郎の襟にかけた手を離した。
その時、じっ、と自分のほうを見つめる視線に気づき、乱菊はぱっと振り返る。
思いがけず近くにいたのは、さっきの少女だった。
「雛森桃といいます、はじめまして」
「え、えぇ、はじめまして！」
照れ笑いする乱菊を、冬獅郎はにらみつけた。
しかし・・・
2人が間近で話す姿を見て、乱菊は心中首をひねる。
冬獅郎は、人一倍他人と距離を空ける性格のはずなのに。
この雛森、と名乗った少女に対しての、この打ち解け振りはいったい、何なのだろう。

「じゃ。あたし帰るね。いろいろ話してくれてありがとう！」
気を利かせたのか、雛森がニコリと笑うと、手を振った。
「イヤ、こちらこそ。また・・・」
「じゃあね、雛森ちゃん！冬獅郎を見てくれてありがとう！」
「・・・俺はそんなガキじゃねーぞ・・・」
冬獅郎がジロリ、と乱菊を見上げる。
また・・・の後に言葉をかぶせたのはワザとだ。
また会おうなーなんていわれたら、今後が不安。
「じゃ、行こう」
冬獅郎の腕を取って、先に歩き出す。

数歩歩いた冬獅郎が振り返り、空いているほうの手を上げた。
「じゃあな」
しかし。
振り返った先に、そこに立っているはずの、雛森の姿はなかった。

――　え？
周囲に視線を走らせるが、どこにもその、可憐な姿はない。
その、刹那。
冬獅郎は、ゾクッ、と背筋を走った寒気に、身を強張らせて、振り返った。
その視線の先。わずか３０センチほどのところに、雛森の姿があった。
ピンクのワンピースの代わりに、まとった黒い着物が風に揺れた。
「さよなら」
その桃色の唇から、言葉が漏れる。
キラリ、とその腰のあたりで、何かが光ったような気がした。
それが白刃の切っ先だ、と気がついた時には、雛森はすでに一歩、踏み出していた。
「ひな・・・もり」
乾いた唇が、無理やりに言葉を紡いだ。
それは、まるでスローモーションのように。
紅いしぶきが上がり、雛森と冬獅郎の頬にサッと飛んだ。
「・・・え？」
そのものの正体を、冬獅郎が気づくよりも早く。
冬獅郎の腕をつかんでいた乱菊の力が、急に緩む。
ハッ、と見上げたとき、視界に飛び込んできたのは。
乱菊が、肩から血を吹きながら、よろめく光景だった。
「まつ・・・もと」
とっさに、手を伸ばして、倒れた乱菊の背中を受け止めた。
「あっ・・・っ！」
ビクン、と体を痙攣させる乱菊を見て・・・急に冬獅郎は我に返っ

た。
「てめえっ！！何を・・・！」
血が流れ出す傷口に手を当て、冬獅郎は雛森を怒鳴りつけた。
――　止まらない・・・！
どくどくと、途切れなく血をみれば、その手の知識のない冬獅郎にも、これが致命傷だということは分かる。

「きゃぁっ！！」
「何・・・！」
異変に気づいた人々の間から、悲鳴が上がる。
血刀を下げ、死覇装姿の雛森は、ゆっくりと冬獅郎と乱菊に歩み寄った。
「・・・ごめんね」
雛森は、独り言のようにつぶやいた。

冬獅郎は、乱菊の肩を抱き、少しずつ雛森から距離をとろうと後ずさった。
――　ヤバイ・・・
とにかく、乱菊をここから遠ざけなければ。
「貴方たちは、『私たち』の敵。
これ以上生かしておくわけにはいかないの。日番谷くん・・・乱菊さん」
底の見えない暗い光が、その瞳には宿っていた。
そして、その数瞬後。
その建物の一角が、まるで砲弾でも打ち込まれたかのように轟音を立てて崩れ落ちた。

VOL．26　最後の6人─5　［戦慄の破面］

その頃。
浦原商店の巨大な地下空間は、もうもうとした土煙に覆われていた。
「な、なんだぁ？」
斬魂刀を構えていた一護は、煙の中にウルキオラを見失い、顔をしかめて煙から飛び下がった。
その瞬間、土煙の中に現れた複数の気配に、目を凝らす。

──　この気配、恋次、ルキア！一角さん、弓親さんも・・・
しかし、それだけじゃない。
同時に感じる破面の気配に、一護はギリ、と歯を食いしばった。
「・・・グリムジョー」
何度も何度も刃を交わしたこの相手の気配は、五年経っても昨日会ったかのように鮮やかだ。

「黒崎サン、アタシも参戦します。遅くなりました」
スッ、と背後に現れた影に、一護は目をやらずに答えた。
「準備とか言ったのはこのことか？浦原サン」
「ええ。街中でドンパチやられると被害は甚大だ。ここなら、多少暴れても大丈夫ッスから」
「けどよ。雑魚8体はとにかく、ウルキオラとグリムジョーは手強い・・・」
そこまで一護が言いかけ・・・唐突に言葉を切った。
「黒崎サン」
ほぼ同時に、浦原が気づいた。
「どうやら招かざる客がいるようだ。ご注意を」
それは、浦原がそういい終わるか、言い終わらないかのわずかな間。
ぐっ、という何かが潰れたかのようなうめき声と同時に・・・ドス

ッ、と鈍い音が響いた。

「なんだ・・・」

「破道の二、旋風(ツムジ)！」

浦原が早口で鬼道と唱える。

すると、その場を覆っていた土煙が風により吹き飛ばされた。

ようやくはっきり見え出した景色と同時に、濃厚な血の匂いが鼻腔に届いた。

「・・・なっ・・・」

茶色にかすんだ景色の向こう。

それを見た一護が初めに漏らしたのは、驚愕の呻きだった。

あのグリムジョーが、ごほっ、と口から血を吐くのが見えた。

そして、その腹を貫通していたのは・・・血にまみれた拳。

「・・・まず一体」

全く波立たない、平静な声と同時に、拳が引き抜かれる。

ピシッ、と拳にまとわりついた血を払い、音もなく墜落したグリムジョーの体の向こうに現れた、漆黒の姿。

それを見やった浦原の目が、見開かれた。

「・・・アナタ。鉄家(くろがね)の若君ですね」

逸輝はその問いにすぐには答えず、チラリ、と冷たい目を周囲の８体の破面に向けた。

次の瞬間。

その８体の破面の体が、体内の爆弾が炸裂したかのように、爆発的に血が吹き出した。

「何だと・・・！」

唖然とつぶやいた一護の目に、ほんの一瞬、破面の体から突き出したものが見えた。

――　刃、か？

確かめようとした時には、すでに破面たちは地面に次々に墜落していた。
悲鳴を上げる余裕すらない、ぼろ切れのような、死。

「若君？誰もそんな風には呼ばねぇよ」
その口元が、苦笑、といっていい形にゆがめられた。
「皆俺を狂戦士（バーサーカー）と呼ぶぜ」
今度は、浦原の方がかすかに苦笑する。
確かに・・・と心中同意したところで、狂戦士（バーサーカー）などと呼べるわけがない。
「・・・鉄って何だ？貴族か？」
こっそりと一護が、浦原に耳打ちする。

「ソウル・ソサエティの頂点に君臨する『霊王』の存在は知ってますよね。
霊王の側近が準王家です。
『紫』の紫城（シジョウ）家を筆頭に、『黒』の鉄（くろがね）家、『紅』の緋鹿（ひが）家、
『白』の白漣（びゃくれん）家、『蒼』の蒼月（そうげつ）家の五家。
本来は雲の上の存在なんですけどね。こんな現世（ところ）にいるとは、前代未聞です」
「わたくしがお連れしました」
涼やかな声が、血なまぐさい地下に響き渡った。
完全に煙が晴れた岩場に腰掛けていたのは、藍色の着物を着た娘。
大輪の花がほころぶかのように微笑む姿は、さきほど藤棚に腰掛けていた時と同じように、優美に見えた。

「貴女までがいらっしゃるとは・・・緋鹿恵蓮（ひがエレン）どの。
こんなむさくるしいところへ、いきなりお連れして申し訳ない」
「かまいませんわ」
にっこり、と緋鹿恵蓮と呼ばれた娘は、邪気のない笑みを浮かべた。

しかし、眼前の惨状を見やると、その表情に憂いが浮かぶ。
死者をいたむようにゆっくりと瞼を閉じた恵蓮は、やがてゆっくりと囁いた。
「いけませんわ。わたくしを人質に取ろう、などとお考えになっては」
「・・・っ、ウルキオラ！」
その方向を見やった一護が、地面に向けていた斬月の切っ先を、ウルキオラに向けた。
今まさに、恵蓮に向かって跳ぼうとしていた白皙の男は、無言で動きを止めた。

「良かったな、忠告されて」
恵蓮の背後に、スッと黒い影が降り立った。
「恵蓮に刃を向けた奴は、絶対に殺す」
「逸輝」
ゆるり、と首を動かして振り返った恵蓮が、その逞しい腕に細い指を添えた。
その動きは、体を預けたようでもあり、戦いにはやるこの少年を諌めたようにも見えた。
ただ、目で見るよりも先に、指先で探り当てるように触れるしぐさが、その娘の視力がかなり悪いことを示していた。

「お前がこんな戦場に来る必要、なかったのに」
逸輝の漆黒の衣に、亜麻色の髪が流れる。
それをそっと梳(す)いた逸輝の指は、つい1分前、破面9体を倒したとはとても思えない。
「見届けたかったのよ」
何を？おそらく、逸輝はそう聞こうとしたのだろう。
しかし、その問いは、突然のウルキオラの動きにさえぎられる。
瞬速でその場から消えたウルキオラが次に現れたのは、瀕死の状態

のグリムジョーの傍だった。
そのまま、軽々と肩に担ぎ上げると、ちらり、とその場の４人を見やる。

「今更死神に手を貸す、目的は？」
そのウルキオラの問いに、彼だけでなく、一護と浦原も逸輝と恵蓮を見やった。
「『真実』を、見届けるため」
その返答は、恵蓮の口から、まるで何かの宣託のように成された。
それを聞いたウルキオラが、わずかに訝しげに眉を潜めた。

「緋鹿家・・・準王家の中では、占や預言をつかさどる一族だったな」
その澄んだ翠の瞳は、ウルキオラを写してはいない。
「もはや『死神』は、ソウル・ソサエティの歴史からは抹消された種族。
今何を想うのか知らぬが・・・もう、手遅れだと言っておこう」
その問いに、恵蓮は否とも是とも答えなかった。ただ、静かにその瞳を閉ざしたのみ。
ウルキオラは、そんな恵蓮を一瞥する。それとほぼ同時に、その姿がフッと溶けるように消えた。

ーーーーーーーーーーーーーー
※いちお補足。
　霊王は原作にもでてきますが、準王家はオリジナルです。
　立場的には、←となります。
　ただ、中央十三室は原作で藍染&市丸に殺されてるので、有名無実なはず。

霊王＞準王家＞王属特務＞中央四十六室＞護廷十三隊

VOL．27　最後の6人─6　［決断の時］

「アイツらは・・・！」
一護は、ウルキオラの気配がその場から完全に消えたのを確かめると、斬月を背中に収めた。
そして、かすかな気配を頼りに、岩伝いに跳躍する。
「ルキア恋次！弓親さん、一角さん・・・」
難なく岩場の影に、気を失って倒れた4人を見つけ、駆け寄った。

「空間の転送に、体が耐えられなかったみたいですね。
今の状態なら、無理はないかもしれませんが・・・」
一護はそれぞれの口の前に手のひらをやり、規則正しい呼吸を確かめると、ほっ、と息をついた。
「何なんだ、こいつらは？」
足音もなく背後に現れた逸輝が、眠る4人を見下ろした。
「破面たちには死神だって追われてたようだが、こいつら霊圧はただの人間だぜ？」
「破面が正しいんです」
その問いに答えたのは、浦原だった。
その腕には、4振りの刃を抱えていた。

夏梨が氷輪丸を発見した、同じ穴の中に隠されていた斬魂刀。
蛇尾丸（ざびまる）、藤孔雀（ふじくじゃく）、鬼灯丸（ほおずきまる）、そして、袖白雪（そでのしらゆき）。
どれも、死神の手に在ったときの輝きを忘れたかのように、くすんだ鈍色に沈んでいる。

「この方たちは間違いなく死神。前世が死神だったなんてオチもないっスよ。
つい5年前まではこの刀を手に、最前線で破面たちと戦っていた」

「じゃぁ、この霊圧の低さはなんだ？なんで覚えてねえんだよ？」
「封魂術、という術、ご存知ですか？
文字通り、魂を封じ込める術。
これをかけられると、自分の名前すら分からない完全な記憶喪失になります。
死神のような力ある存在でも、力そのものを無くしてしまうんスよ」

「・・・術をかけたのは、お前なのか？」
「ちょっと技術を加えて、適当な過去を吹き込んでおきましたがね・・・
まぁ、封魂術は元来不完全な技です。
術者のアタシの霊圧を、もしも被術者の６人全員の霊圧が上回れば、封印は解けます。
永遠じゃぁない」
そう言って、浦原は６人を見下ろした。

「ただ通常、それはありえないことでした。
それぞれバラバラに暮らしている以上はね。
でも、彼らは出会ってしまった。

一人ひとりは微細な霊圧でも、６人いれば、少しずつ封印のタガが緩むくらいの現象は起こります。
そして、タガは加速度的に緩み始め・・・もう、この人たち、部分的には死神の気質や記憶が戻りかけてますね」
「こいつらのことは分かった。
でも何で、そんなまだるっこしいことする必要があったんだ？」

「死神の血を、絶やさないためじゃねえか・・・」
ルキアの前にしゃがんでいた一護が、逸輝に背を向けたまま、つぶやくように言った。

そして、バッ！と振り返る。
その瞳が怒りに満ち、まっすぐに逸輝を射た。
「なんで、あの時・・・破面と死神が全面戦争になったとき、死神を助けなかった？
アイツらは！！藍染の手からお前たちを・・・王廷を護るために最後まで戦ったんだぞ！」
張り詰めた緊張が、その場を覆った。

「・・・そして、『精霊廷』は、歴史から消えた」
その瑞々しい声に、一護はぎりっ、と歯を食いしばる。
視線の先には、恵蓮の姿があった。
「教えてくれよ。あんた先を見る目があるのなら・・・
こいつらを除いた死神は、どこ行っちまったんだ？」
その言葉に、浦原は視線を落とし・・・逸輝はその表情を崩しはしなかった。
「・・・」
「見つからないんだ。どこを探しても。」
一護の瞳には、もう、怒りは浮かんでいなかった。
その代わりに、はっきりと見えたのは、苦悩の色。

その感情の動きは「見える」のか・・・恵蓮がスッ、と目を細めた。
「それを伝えるのは、わたくしの役目ではありません」
「じゃあ、誰の」
その問いに答えず、恵蓮はその翠の双眸を見開き、浦原に向けた。
その穢れを知らぬようなまっすぐな瞳が、帽子の鍔の奥に隠れた浦原の瞳とぶつかる。
「・・・畏(こわ)い方だ、貴女は」
永遠に続くかのような、息詰まる沈黙の後。
浦原は囁くように、そう言った。

「仮初の平和。６人は、その中で生きてきた。偽りの記憶に気づくこともなく。
でも・・・彼らは、再び出会ってしまった。
・・・もう後戻りは、できないっスよ。彼らが望もうと、望むまいと」
「・・・浦原サン。こいつらの記憶が完全に戻るってことは・・・封印が切れるってことはありえるか？」
一護は立ち上がると、浦原に視線を向けた。
浦原はその問いに、どこか寂しげな笑顔を返した。

「五年前、日番谷サンはアタシに言いました。『自分たちの未来は、自分で選ぶ』と」
ハッ、と一護は、４人を見下ろした。
事態の急転に気が回らなかったが・・・ここにいない、ここにいるはずの２人。
日番谷冬獅郎と、松本乱菊はどこにいる？
その時、気配をさぐった一護の脳裏に・・・忘れられるはずのない、懐かしい霊圧がよみがえった。

――　冬獅郎・・・？
そして。
それに呼応するように、ぽぅ・・・と４振りの刀が、光に覆われてゆく。
「浦原サン！」
一護の叫びを、よそに。
「今がその時です」
浦原は静かに、目を閉ざした。

VOL．28　最後の6人─7　［追い詰める者］

東京都心、六本木。
そこは、突然に崩れ落ちたビルを目にして、恐慌状態に陥っていた。

「なんだ！ガス爆発か！警察はどうしたんだ！」
「いや違う、テロか？」
ビルの内部から、買い物を楽しんでいた観光客や、オフィスワーカー達が我を失って駆け出してくる。
人々はあっという間に車道にあふれ、道路のあちこち、立ち往生した車のクラクションが響き渡った。

「どうなってんだ、こりゃ・・・」
前に進めず、やむを得ずブレーキを踏んだ車の運転席から、男がビルを見上げた。
昨日見た平和なビルの景色は、もはやどこにもなかった。
その中層階から吹き出した炎は、まるで血のように赤い。
黒い煙が、ビルを覆い隠そうとしていた。

その時、男の視界を、車の間を縫うように走ってきたバイクがさえぎる。
ヘルメットもかぶらないその姿に、男の視線は奪われる。
黒く長い髪が爆風にはためいた。中学生か高校生か、なんにしろまだ少女だ。
少女は、唇を噛んでビルを見上げると、その場でバイクを乗り捨て、ビルに向かって駆け出そうとした。

「おい、君！そっちは・・・」
止めようとした男は、少女が手に持った長い棒のようなものに目を

留め、ぎょっとして言葉をとぎらせた。
――　あれは、日本刀？
身長の半分はある、古めかしい長刀の鞘を握り、少女・・・黒崎夏梨は、まっすぐにビルに向かって駆けた。
ここまで来たら、もうはっきりと感じる。
あの、懐かしい霊圧を。

「冬獅郎・・・！」
刀をぐっと握り締めた夏梨は、その時初めて刀の異変に気づいた。
「何だ・・・なんで光ってるんだ？」
その刀は、今や発光しているように見えるほどはっきりと、青白い光に包まれていた。
ビリ・・・と、鞘を握っている夏梨の手が、電流が走ったかのように痺れた。
まるで、生き返ろうともがいているように。
――　この刀を御せるのは、冬獅郎しかいねえ・・・
それまで、この刀を取り落とすわけにはいかない。
夏梨は息を弾ませ、崩れたビルの中に足を踏み入れた。

「破道の三十三、赤火砲！」
雛森の声が、轟音の間を縫うように響いた。
その声と同時に、何もないはずの空間から炎が噴出す。
全ての電気が消えた薄暗いビルの中を、その紅蓮が赤々と照らし出した。
その炎は、イキモノのように、壁の向こうに潜んだ冬獅郎と、その腕で気を失った乱菊に向かう。
「くそっ・・・」

とっさに体勢を低めて、冬獅郎をその炎の一撃をかわす。
スッ、と華奢な指先が、その冬獅郎の頭を指差した。
それに答えるように、炎の向きが、下にいる冬獅郎へと変わる。
「・・・っ！」
無意識に顔の前にかざした腕に、炎が絡みついた。
ダン！
制服のジャケットを脱ぎ捨てると同時に、腕に燃え広がろうとした炎を、腕を壁に叩きつけることでかき消す。

「・・・その技を、紙一重でかわしてもムダよ」
ぜぇ、ぜぇ、と廊下にこだまする冬獅郎の息に重なるように、あどけない声が聞こえた。
ぎり、と冬獅郎は歯を食いしばった。
力を失った乱菊の体を、両腕で抱えなおす。
その肩から流れる血は、少しは止まりかけていたが、それでも乱菊の全身は、多すぎる出血のため青白く見えた。
これほど揺さぶられても、ピクリとも動かない。

崩れた壁のカケラを、草履の足が踏みつける。
ゆっくりと現れたのは、漆黒の着物に身を包んだ、雛森桃。
「忘れちゃったのね、日番谷くん。私があなたに教えた技なのに」
その口元に浮かんでいたのは、淡い微笑み。
それは、たったの３０分前に、微笑んで日本庭園のカモを見ていたときの表情と、変わらない。
その表情を見返した冬獅郎の背中が、ゾクゾクと粟だった。
この女は、俺たちを殺す。この笑顔のままで。
それが、その時はっきりと自覚できたからだ。

「・・・何言ってんだ、てめぇ！俺はてめぇなんか知らねぇぞ！」
冬獅郎の叫びに、雛森は、その微笑を深くしただけだった。

そして、鞘に収めていた日本刀を、スラリと抜き放った。
２人の距離が、１０メートル、８メートル、５メートル・・・どんどん、近づいてゆく。
柄を握るその指先が、力がこもるにつれて白くなるところまで、はっきりと見えた。
――　なんだ？
直接斬りかかるには、まだ遠い、その距離。
その桜色の唇が、開いた。
「弾け・・・『飛梅（とびうめ）』」
その言葉に呼応するように、何もないはずの空中から、大人の頭ほどの大きさの火の玉がいくつも現れた。

――　まずい！
冬獅郎は、とっさにぎゅっ、と乱菊の体を抱きしめた。
その姿を捉えた雛森の瞳から、笑みが消えた。
容赦のない火球は、冬獅郎でなく、冬獅郎のすぐ上の、天井を狙った。

ドォン！
激しい音と共に、鉄の溶けるなんとも言えない悪臭が、周囲にただよった。
天井が一気に崩れ落ち、冬獅郎たちのいたところにも、落ちてゆく。
「・・・来る」
雛森は、天井にあいた穴から、あらわになった空を見上げた。
そして、その空に黒点のように浮かぶ姿に、かすかに大きな目をしかめた。
その黒い点は見る見る間に大きくなり、仮面をかぶった人間・・・
いや、破面の姿を形作ろうとしていた。

VOL．29　最後の6人―8　［放たれた刃］

「・・・うっ・・・」
全身が、自分のものじゃないように動かない。
痛いというよりも、熱い。
冬獅郎は、自分たちに覆いかぶさった瓦礫の中から、何とか身を起こした。
乱菊の体の上にかかった瓦礫を払おうとした瞬間・・・
こみ上げてきた熱いものに、冬獅郎は思わず前かがみになる。

「が・・・がはっ・・・」
床に吐き出したものの紅さに、目がくらみそうになる。
肩口に、焼けるような痛みを感じ、そちらに目をやって、愕然と目を見開いた。
右肩の、首に近い場所。そこに、３０センチはある、ガラスの破片が突き立っていた。
瓦礫を払おうとした腕が、だらん、と下に垂れる。

「あ・・・」
ガラスが、見る見る間に赤に染まってゆく。
死ぬ、殺される。
悲鳴が、押し殺していた喉の奥からこみ上げてきた。
「・・・うぅ・・・」
混乱しかけた冬獅郎の意識を引き戻したのは、乱菊の声だった。
苦しげに眉根に皺を寄せる姿をみて、冬獅郎は口を押さえ、悲鳴をかみ殺した。
こいつに、俺の悲鳴を聞かせるわけにはいかない。
単なる意地にすぎないとしても。

――　こいつだけでも・・・
乱菊を床にそっと寝かせ、冬獅郎は顔を起こした。

とにかく、この場から離れなければ。
あの女は、俺を狙ってる。
俺がこの場から離れれば、乱菊の助かる可能性は高くなる。
「・・・！」
歯を食いしばり、ガラス片を引き抜いた。
バシャッ、と地面にはじけた血の上に、手のひらをついて、冬獅郎はよろめきながらも立ち上がった。

「あたしたちの味方になるなら、あなただけは、助けてあげるわ」
ざっ、ざっ、と雛森が足音と共に、冬獅郎の元に一歩ずつ、歩み寄る。
「松本は？」
その問いに、雛森は答えない。
かわりに、その唇がほころぶ。

「あたしと一緒に来る？日番谷くん」
瞬きもしない翡翠の瞳が、雛森の漆黒の瞳を射通すかのように向けられた。
このままでは、ほぼ確実に自分は殺される。
そしてその後に、乱菊は殺されてしまうだろう。
どうせ殺されるなら、自分ひとりだけでも生き延びたほうが理にかなっている・・・
でも、「それでは意味がないのだ」。

「断る」

雛森から目を逸らさないまま、冬獅郎はきっぱりと言い放った。

小賢しく独りで生き残るくらいなら、無様に2人で死にたい。
――　俺は、こんな風に考える人間だっただろうか・・・・
それは、自分自身でも意外なほどの、熱情。
これほどに、この女を愛しているとは、知らなかったくらいに。

雛森は、そんな冬獅郎の心の動きを追うかのように、静かに冬獅郎を見守っていた。
「そうよね。あなたは、そう言うわよね」
「てめえに、俺の何が分かる」
「・・・そうね」
冬獅郎の燃えるような瞳を見返し、雛森はその時わずかに、口元をゆがめた。

そのときには、冬獅郎も、上空に現れた人影に気づいていた。
――　なんだ、こいつら・・・
体や顔のどこかに、仮面のカケラのようなものをつけた者たちが、こちらに向かってこようとしている。
それだけじゃない。
異形のモノたちが、空座町の上空にあちこちに出現している。
なぜか、その気配だけは分かった。

「・・・待ってください、藍染隊長」

雛森はスッ、と目を閉じてつぶやいた。
その声に、こちらに来ようとしていた破面たちが、その動きを止める。
「日番谷冬獅郎は、私がこの手で・・・殺しますから」
雛森が手にした刃が、輝きを放つ。
静かに目を見開いた雛森の双眸に、光が渡った。

ダン！
その時、地面に響いた足音に、雛森と冬獅郎ははじけるように振り返った。
「冬獅郎！！」
フロア全体に、響き渡った、その声。
「お前は・・・！」
冬獅郎が肩を抑えて、振り返る。
「バカ野郎！お前、なんでこんなトコに・・・」

冬獅郎の視界の先にいたのは、クロサキ医院でであった少女・・・
黒崎夏梨だった。
汗で長い髪は首に張り付き、顔は煙で黒く汚れている。
夏梨は躊躇わず瓦礫の山を越えてこちらに来ようとしたが、ハッと足を止める。
エスカレーターがあった部分は無残に崩れ落ち、２人の間に５メートルはある隙間を作っていた。
「くそっ・・・冬獅郎！」
歯噛みした夏梨は、手にしたものを冬獅郎に差し出した。

「それは・・・！」
雛森が目を見開く。
青白い光がまとわりついた、その刀は・・・
「受け取れ！」
夏梨は、氷輪丸を冬獅郎に向かって投げつけた。

VOL．30　最後の6人―9　［氷輪丸再び］

心が躊躇(ためら)うよりも早く。その腕が、氷輪丸の柄を受け止めた。
それと同時に、恐ろしいまでの力が、自分の中を吹き荒れた。
――　なんだ？
ガクン、と冬獅郎の体が前かがみになる。

「冬獅郎！オイ、大丈夫か！」
夏梨、とかいう女の声が聞こえる。
自分の中に暴力的なまでの力であふれる何かを、押さえつけようとするものがあるんだ。
まるで、蘇ろうとするものを押さえつけるように。

――　封魂術か？
そう思った直後、自分の答えに自分で驚いた。
そんな言葉知らないはずなのに。

混沌とした冬獅郎の脳裏をはしったのは、光に満ちたノルウェーだった。
その中で微笑む父母。
風のように過ぎた、幼い頃の淡い日々。
――　いかないで・・・
さし伸ばされた手は、父か、母か。

「嘘だ」

全てを断ち切るように。冬獅郎は一言言い放った。
嘘だ嘘だ。
そんな平和な風景なんて、おれの過去のどこにもなかった！

「邪魔だーーー！！！」
叫ぶと同時に。その風景にピシッ、とひびが入り、あっという間に霧散してゆく。
冷たくしかし熱い、あの懐かしい霊圧が、冬獅郎を取り巻いた。

「次から次へと、わいてくるものですね・・・破面。
このままじゃ、空座町全体が襲われますよ。五年前のように」
浦原が地下から、上空を見つめてつぶやいた。
「護る」
それに対する、一護の言葉は短かった。
「アイツと約束したんだ。こいつらを、絶対に護り抜くと」

そして、気を失ったままの４人を見下ろして・・・ぴたり、と動きを止めた。
「こ・・・これは！」
浦原が手にしていた４本の刀が、突然暴力的な光を放ったのだ。
「なんだ、こりゃ！」
狼狽した一護とは逆に、浦原は、ひとつ、大きくうなずいた。
「選んだ・・・って、ワケですね。日番谷サン。
こんな霊圧ぶつけられたら、封印なんてひとたまりも無いっスよ」

――　この霊圧は！
一護は、その風圧に顔の前に腕をやりながら、刀を見つめた。
そこから放たれたのは、間違えようもない、あの４人の霊圧・・・
突然、伸ばされた太い腕が、浦原の腕から刀を一本、奪い取った。
「退屈すぎて死にそうだったぜ」

ばさっ、と黒い袖がゆれる。
「すっかり忘れてたくせに」
わずかに笑いを含んだ声と同時に、もう一本の刀が、奪い取られる。
「みんな立場は同じでしょ、一角さん、弓親さん」
ひときわ大きな長刀に手を伸ばしたのは、赤髪の男。
漆黒の影のように、その大柄の姿が躍動する。

「・・・あ・・・」
一護は、突っ立ったまま、その４人を、見返すことしかできなかった。

「・・・私が最後か」
浦原から刀を手渡されたのは、死覇装に身を包んだ、小柄な女死神。
動くのを忘れたかのように棒立ちになっている一護を、見上げた。
その感情のこもった大きな瞳が向けられる。その唇が、かすかに動いた。

――　すまぬ。

顔を伏せると、一護に大股で歩み寄り・・・ぽん、とその二の腕の辺りを叩いた。
「何を、泣きそうな顔をしているのだ。一護」
黒い大きな瞳。
自信に満ちた、微笑み。
全く、変わっていない。

「・・・ルキア」
一護は一瞬、空を仰いだように見えた。
死覇装の袖で、ぐいっと目の辺りをぬぐう。
「行くぜ」

自分を見返すルキア、恋次、一角、弓親の４人の目を見つめた瞳には、張りが戻っていた。

――　封印、か。
それは、過去を封じ込め記憶を操作する、一種の鬼道。
封印よりも強い力を与えれば、雲散霧消する――
「・・・霜天に座せ。『氷輪丸』」
静かな声が、炎の吹き荒れる地におちた。

とたんに、青白い光が当たりにはじけ、炎がたちまち凍りついてゆく。
圧倒的な霊圧が、その場を静かに制圧してゆく。
そのためらいのない指が、氷輪丸の柄を握り締めた。
漆黒の死覇装が、爆風にあおられる。
同時にはためいたのは、純白の羽織だった。
その背に刻まれた、「十」の文字。

翡翠の、混じりけのない強い瞳が、放たれた矢のように雛森を射すくめた。
「・・・まだ、記憶は戻っていないようね。・・・ちょうどいいけれど」
先に、目を逸らしたのは雛森だった。
――　何を言っている・・・
過去のことも、未来のことも考えられない。
ただ感じるのは、手のひらを通じて刀から流れ込んでくる、圧倒的な力の塊。
「三度目ね。あなたと刃をかわすのは」
雛森、という女がつぶやき・・・斬魂刀の切っ先を冬獅郎に向けた。

――　ＨＩＮＡＭＯＲＩ・・・

ふと頭をよぎったのは、数日前に買ったあの本で、目に付いた名前。
何か、取り返しのつかないことを、している気がした。
でも・・・
冬獅郎は、後ろに横たわる、血まみれの乱菊の姿を振り返った。
怒りが、いったん生まれた躊躇いを吹き散らしてゆく。

「松本を傷つける奴は、許さねぇ」
抜き放った氷輪丸の刃先を、冬獅郎はまっすぐに雛森に向けた。
「てめぇは殺す。雛森桃」

VOL．31　死神滅亡―1　［大切なひと］

「こりゃ、すげえな」
一護は、浦原商店の傍の電信柱の上に飛び乗り、周囲を見渡した。
ざっと一瞥しただけで、視界には何十体もの破面や虚が見て取れた。
目を閉じれば、何十キロもの範囲に渡り、破面が転々としている気配を感じる・・・

「寝てんじゃねーぞ、一護ォ！」
張りのある大声に目を開けた瞬間、前を唐突に通り過ぎた影に、一護は思わず手を伸ばす。
「ダメだ、一角！まだアンタ戻ったばっかりなんだ、調子が・・・」
「延びろ、鬼灯丸！」
一護が言い終わるよりも早く、手にした斬魂刀が、槍にその姿を変えた。
「調子・・・」
「死ねや、コラァ！！」
一番手近にいた虚を、全く反撃のそぶりすら見せず突き通す。
霊圧がはじけ、虚はくぐもった悲鳴と共に消失した。

「あ？なんか言ったか、一護？」
「・・・なんでもねー」
そうだ。
十一番隊は、他のどの隊よりも戦い好きの死神の集まりだったな・・・
二度と引き出されるまいと思っていた、そんな記憶に、一護は一人微笑む。
「笑ってるとは余裕だね、一護君」
ふわり、と一護の隣に飛び降りたのは、弓親だった。

「アンタら、もう全部思い出してるのか？」
一角よりも話が通じそうだ。
斬魂刀を構えながら、一護が弓親に問いかける。
「イヤ？過去のことなんて考えてないよ、僕は。別に興味もないね」
弓親は、斬魂刀を引き抜き、破面たちを見据える。
ぽぅ、とその斬魂刀が輝きを放ち始めた。
「ただ、この姿のほうが、本能に忠実だってことだけだよ、今分かるのは」
あまり、一角と変わらなかった。
フッ、と弓親が瞬歩で姿を消すのを見やり、一護は思った。

「ヒィィ！」
その攻撃に、破面たちが雪崩を打って逃げ出す。
「逃がさないよ！追い詰めて、追い詰めて、もっと醜い顔を見せておくれ」
――　趣味悪ぃな・・・
五年たっても、全く戦闘力も性格も変わっていない。
むしろ、五年間普通の人間と混じって、暮らせてきたほうが不思議になってくるくらいだ。

「ま、腕鳴らしにはちょうどいいか」
浦原商店の屋根に立った恋次が、辺りを見渡す。
隣にはルキアが立っていた。
「てめーらまで急に、笑顔で破面に斬りかかるのか？」
「ま、聞きたいことは山ほどあるぜ」
恋次は、屋根の上に飛び移ってきた一護を、チラリと一瞥して言った。
「お前、なんだその古傷は？5年前には無かったはずだぜ」

確かに、死覇装から覗いた首といわず、腕といわず、胸元といわず。
一護の体のあちこちに、決して浅いとはいえない古傷が見えた。
「戦い続けていたのか？・・・たった一人で」
一護を見上げるルキアの大きな瞳が、揺れている。
一護は、それを見下ろして・・・微笑んだ。
「いーんだよ、もう」
たった一人でも、この6人を、何が何でも護り抜くと思っていた。
同じ力を持つものが、隣に立ってくれる感覚すら、もう遠いものになっていた。

「・・・話は後だ。行くぜ」
「おう」
一護と恋次は、同時に斬魂刀を襲い来る破面たちに向けた。
「斬月！」
「吼えろ、蛇尾丸！！」
二人の声が、夕闇の迫り始めた空に響き渡った。
――　虚や破面が一掃されるのも、時間の問題だな。
冷静に戦いを見守っていたルキアは、内心つぶやくと、タン・・・と屋根を蹴り、近くの電波塔に飛び移った。
ほんの３０分前まで、自分にそんな跳躍力があるなんて、夢にも思わなかったのだから妙だ。

記憶は、まるで点のように心もとない。
全てが断片で、全体像が見えてこない。
ただ、自分達が死神だったこと。
そして、破面と呼ばれる敵と戦っていたことだけが、薄ボンヤリと思い出される。

――　日番谷隊長と、松本副隊長はどこだ・・・？
ルキアが気にしていたのは、その二人だった。

二人の記憶が戻っているのかいないのか、それは分からない。
しかし、この騒動に巻き込まれ、破面に襲われている可能性は十分にある。
本来の二人なら、全く問題が無いだろうが、記憶が戻っていないなら話は別だ。

――　霊圧が、うまく探れない・・・
そうそう、全てが直ぐに戻るわけではないらしい。
しかし・・・
ビクッ、とルキアは目を見開く。
自分と同質の、氷雪系。
しかし、自分よりとんでもなく強い力が、爆発的に高まるのを感じたからだ。

「日番谷隊長・・・！」
思わず、届くはずの無い名を呼ぶ。
その霊圧は、自分たちのいる場所からは、かなり遠い。
それでも、明確に居場所を告げるほどに、その力は強かった。
そう思った瞬間。
突然空がまばゆい光に照らされた。
それは、ほんの一瞬。

「雷・・・？」
ルキアが顔を上げたその頬に、パラリ、と何かが当たった。
「雹（ひょう）？こんな季節に」
それは、小指の先くらいはある、大きな雹だった。
茜色の空に、恐ろしい勢いで、黒く巨大な雲が集まりつつある。
「なんだぁ？」
一角が、戦いの手を止めて、上空を見上げた。
一護がその隣で、つぶやく。

「・・・冬獅郎が、怒ってる」

冬獅郎の持つ斬魂刀は、氷雪系最強と呼ばれる氷輪丸。
その力は天候さえも支配し・・・雪雲を呼び、雷雲を発生させることもある。
そして、今ヒシヒシと肌に感じるのは、凍て付くような激情だった。
「日番谷隊長は、誰か敵と戦っている！」
ルキアが、４人を見上げて叫んだ。
「破面かよ！」
「待て・・・この霊圧は」
破面では・・・ない。
この霊圧を、自分はよく知っている、はずだ。
その時、ルキアの脳裏に浮かんできた、はるか昔の風景があった。

――「ねぇシロちゃん、待ってよ！」
――「だから。俺はもう隊長だっつってんだろ！隊長って呼べ、隊長って！」
――「イヤよ」
――「何でだよ？」
――「だって、何だか遠くなっちゃうみたいなんだもん。シロちゃんはあたしの大切な人なのに」
――「でかい声で何言ってんだ、お前は」

振り返った冬獅郎が、思いがけないほど穏やかな笑顔だったから、よく覚えていた。
冬獅郎にとっても大切なひとなのだと、一目で分かるほどに。

「・・・日番谷隊長・・・貴方は、一体なにを」
届くはずのない距離。
しかしルキアは、つぶやかずにはいられなかった。

なぜ、あのふたりが刀を交わしているのだ？
大事な人・・・なのでは、なかったのか。
「一護！皆！日番谷隊長のところへ行くぞ！」
気がつけば、ルキアはそう叫んでいた。

VOL．32　死神滅亡―2　［決着］

夏梨は、瓦礫の山をどうにか乗り越え、地面に横たえられた乱菊の傍にかけよった。
「大丈夫かよ？」
声をかけるが、
「うぅ・・・」
乱菊は、呻き声を漏らすのみで、目を開けない。

「だいじょうぶだ、絶対助かるから・・・！」
懐からハンカチと消毒液を取り出すと、手早く応急処置をする。
サッカーなんて生傷の絶えないスポーツをしているだけに、道具を持ち歩いていたことに感謝した。
ただ・・・この傷では、病院に一刻も早く連れて行かなければいけないのは明らかだ。
だが、夏梨の体格では、とても乱菊を抱えて、瓦礫の中を降りてゆくことなどできない。
「冬獅郎・・・！」
夏梨は、冬獅郎と、黒衣の女が消えていった西塔の方角を見やった。

「・・・っ・・・」
思わず、あいている左手で、右の二の腕を押さえた。
夏梨のように霊圧の敏感な者には、耐えられないほどの霊圧が、そこからは放出されていたからだ。
「早く、しねえと・・・」
夏梨は唇を噛み、今や分厚い雲に覆われた空を見上げた。
辺りは、漆黒の闇に覆われ始めていた。

「破道の六十三！双蓮蒼火墜！」
雛森が、両方の手のひらを冬獅郎に向け、凛とした声を放つ。
その両手から、蒼い炎が吐き出され、その場が明るく照らし出された。
片手で放つ蒼火墜と違い、数十メートルにも及ぶ圧倒的な質量の炎が、一瞬にして生まれる。
それは、西塔の一角に炸裂し、その一角を燃え上がらせた。
「もう一発！」
息を切らせながらも、間髪いれず、同じ場所に術を放つ。
双蓮蒼火墜は、その威力の分、消費する霊圧も桁違いに大きい。
雛森の代で、双蓮蒼火墜を二連発できたのは、鬼道の達人と呼ばれた、彼女だけだった。

しかし。

それに応じたのは、地響きのような低い叫びだった。
「――　なに？」
向かい合った雛森の腕に、ヒヤリとした空気が届いた・・・と思ったとたん、ピキピキと音を立て、腕が凍りだす。
「くっ！」
雛森はすばやく飛び下がる。

その時。
上空を走った稲妻が、辺りの風景を照らし出した。
「・・・」
それを目にした雛森は、言葉をなくして、その場に立ち尽くした。
双蓮蒼火墜により放たれた炎は、炎の形のまま、その場に凍り付いていた。

そして、その先の上空で白銀に輝いていたのは、身の丈２０メートルに迫る、巨大な氷龍だった。
生き物のようにとぐろを巻き、紅い瞳が、まっすぐに雛森を睨みつけている。
「・・・氷輪丸」
雛森は、かすれた声でつぶやいた。
氷雪系最強の斬魂刀の化身。
かれの前には、鬼道など問題にならない。

間断なくとどろく雷、そして閃光。
その閃きが、竜の頭の部分に片膝をつき、こちらを見下ろす死神を露にした。
――　日番谷冬獅郎。
普段は落ち着いた翡翠色の瞳が激情に駆られるとき、明るい蒼に彩(いろ)を変える。
片手に刀を携え、爛々と輝く瞳で自分を見下ろす冬獅郎の姿は、まさに命を狩る「死神」のものだった。

冬獅郎の力は、熟知していたつもりだ。
しかし・・・
「これまで貴方が私に剣を向けたのは・・・本当に、本気じゃなかったのね」
かすかに、雛森は苦い微笑を浮かべた。

冬獅郎が、無言でその長刀の切っ先を、天に向けた。
――　氷雪系の技か！
雛森の得意技は炎熱系。
敵対する上には、申し分の無い相性だった。
雛森が炎の鬼道の詠唱を始めようとしたとき。
間髪いれず、冬獅郎の凛とした声が響いた。

「雷吼砲！！」
しまった！
雛森の背に、ゾクッと戦慄が走る。
雷は炎の属性。雛森が放とうとしていた、炎熱系の術では対抗できない。
直後、天で明滅していた雷が、一気に雛森めがけて殺到した。

「な・・・！」
乱菊の肩を抱え、西塔を見つめていた夏梨が、声を上げて身を乗り出す。
天から降り注いだ巨大な稲妻が、西塔を直撃し・・・
ボロ屑のように、西塔が粉々に吹っ飛び、崩れ落ちるのを目の当たりにしたからだ。
「冬獅郎！！」
叫ぶ夏梨の腕の中で、乱菊が、うすく目を開いた。

「とうし・・・ろう・・・？」

かすかな、その声に気づかず、夏梨は西塔があったところを凝視していた。
その視線の先には、夏梨も見覚えがある、巨大な氷の龍が出現していた。
龍の頭の部分に、人影が見える。
あれが冬獅郎なのは間違いない。

龍は、ゆっくりと頭を下に垂れ、冬獅郎が影のように、その頭から滑り降りた。
ゆっくりとした足取りで瓦礫を乗り越え、歩みを進める。
その先の岩場に、背中をもたせ掛けた小さな人影を見て、夏梨は口

の中で叫びを漏らした。
――　殺すのかよ・・・
殺さなければ、殺される。
そんな世界に縁がなかった夏梨だが、それくらいのことは分かる。
でも・・・
夏梨は、唇をかみ締める。

冬獅郎と戦っていたのは、どこにでもいるような、あどけなさを残した少女だったはずだ。
芯からの悪人なんていないのかもしれない。
でも、殺さなければならないほどの者とは、どうしても思えなかった。
本当に、こんなことが正しいのか？
視線を落とした夏梨は、その時ようやく、自分の腕で身じろぎした乱菊に気づいた。
二人の目が、至近距離で合う。

「あ・・・あんた」
夏梨は、かすれた声でつぶやいた。

VOL．33　死神滅亡―3　［十字架の烙印］

「み・・・ごとな、ものね。自然の雷の力を利用するなんて」
投げ出された脚が、自分の体じゃないみたいに、動かない。
立ち上がったところで、勝ち目がないことは、もう分かっていた。
もうもうと上がった煙の中から、ゆっくりと、死神の姿が現れるのを、雛森は黙って見上げた。

5年前は背中に担いでいた氷輪丸を、今は腰に差している。
そして、身長が雛森を大きく越えている以外は、5年前と、変わらなかった。
怒りに燃えていたその瞳には、今は穏やかな翡翠が戻ってきている。

「今度はこちらが質問する番だな、雛森桃」
その落ち着いた声に含まれるのは、隊長として死神の頂点に立ってきた者の、絶対の威厳。
一分の隙もない冷たい瞳が、雛森に向けられた。
「投降するか？それとも死ぬか。選べ」

雛森は、その言葉にしばし、言葉を失ったように沈黙した。
そして。地面に投げ出されていた飛梅の柄を、血がにじむ手で握り締める。
「あたしを生かしておけば、何度でも狙うわよ。それがあたしの役割だから」
それに対し、冬獅郎はわずかに、怪訝そうに眉をひそめた。
「なぜ挑発する？死にたいのか」
「・・・死にたい・・・？」
雛森は、投げかけられた言葉を、咀嚼（そしゃく）するように反芻した。

「死なねば、終わらない道よ」
眦(まなじり)を決し、雛森は冬獅郎を見返した。
飛梅の柄を両手で握り、ありったけの霊圧を込める。
「・・・そうか」
冬獅郎はしばらくの沈黙の後、そうつぶやいた。

大丈夫か、という声が、なんだか遠くに聞こえる。
体がとてつもなく重くて、ピクリとも動かせない。
――　冬獅郎は・・・
頭の中が朦朧としているが、それだけが気になった。

「とうし・・・ろうは？」
「アイツはあっちだ・・・！」
自分を見下ろしていたのは、クロサキ医院にいた、少女だった。
綺麗な顔を泥と炭で汚し、眉間には泣きそうなほど、深い皺を寄せている。
乱菊が動けないのを見て、その首を、崩れた西塔の方へ向けさせた。

――　なに・・・をしてるの？とうしろう・・・
意識が、ゆれる。
ゆらめく景色の中で、銀色の髪が見えた。
――　なんで、そんな格好・・・してるの？
漆黒の死覇装が、風にはためいている。ギラリと、手にした白刃が輝く。
一陣の強い風が吹き抜け、乱菊が凝視する先で、羽織がはためいた。
――　十。

背中に黒々と染め抜かれた、その数字。
かすんだ乱菊の目には、十字架を背負っているように見えた。
「・・・まだよ！」
その時、風に乗り、かすかな女の声が乱菊のところにまで届いた。
お団子にしていた黒い髪はほどけ、腰まで波打っている。
――　あれは、あたしを斬った女・・・
いや、違うのか？
判然としない。

あの女は・・・前に、冬獅郎と仲が良くなかったか。
――　「ホント、信じられないわ。あのシロちゃんが偉くなっちゃって」
あどけない声が、脳裏によみがえる。
無邪気な笑顔が、銀髪の少年を、見下ろしている。
――　「もうお前より偉いんだ。俺は××だからな」
ニヤッと笑って、女を見上げたのは、今よりもずっと子供の、冬獅郎。

――　あたしは、何を考えてる？
乱菊は、突然舞い込んできた脈絡の無いイメージに、戸惑う。

視線の先では、女が手にした刃が、赤い光芒を帯び、冬獅郎に斬りかかった。
冬獅郎は慌てたそぶりも見せず、その一撃をかわすと、逆に一歩踏み込んだ。
そして、その首元を左手でつかむと、岩に押さえつけた。
「・・・っ！」
夏梨が、目を硬くつぶり、体を強張らせた。

――「だから」
冬獅郎は、少し躊躇いがちに目を落とした後、急に睨みつけるように、女を見た。
――「これからは、俺がお前を護るんだからな。雛森！」

「ち・・・がう」
気づけば、乱菊はそうつぶやいていた。
なにか、とんでもない間違いが、起ころうとしている。
どくん、と胸が高鳴る。
「た・・・」
その唇が、言葉を形作ろうとするが、うまく出てこない。
冬獅郎の声が、その場に鋭く響き渡った。
「死ね！雛森！！」
――ひ・な・も・り。

「隊長っ！！ダメですっ！！」
ダン、と手を地面に着き、身を乗り出して。乱菊は、声の限りに絶叫した。

VOL．３４　死神滅亡―４　［裏切り］

稲妻のように、冬獅郎は振り向いた。
そして、崩れかけた本館で、自分を見つめる、黄金色の髪の女を見返す。

「・・・まつ、もと」
急に夢から覚めたような目をして、戸惑ったように二人に視線をめぐらせた。

「お前。・・・夏梨か？」
涙を浮かべた夏梨が、何度も何度も頷いた。
「記憶が戻ったんだな、冬獅郎！」
「き、おく・・・・」
左の手のひらでこめかみを押さえ、冬獅郎はぼんやりとした声で、つぶやく。

――　なんだ・・・どうなってんだ、俺は確か・・・
そこまで考えて。
自分の手のひらにべったりとついた紅に、ぎょっとして手を止めた。
そして、その開いた指の隙間から、飛び込んできたのは・・・

「・・・。雛森」

その首元を押さえつけた、自分の右手を、冬獅郎は黙って見下ろした。
唖然としていた、といってもいい。
はぁ、はぁ、という雛森の熱い吐息が、右手を伝って感じられる。
冬獅郎の右手から力が抜け、雛森の喉下から、滑り落ちた。

雛森は、唇を噛み、冬獅郎の視線から逃れるように、下を向いた。
「・・・わ、悪い。なんで俺たち戦ってたんだ？」
弾けるように立ち上がった冬獅郎を、雛森は目を見開いて仰ぎ見た。
冬獅郎は、急に糸をはずされた操り人形のように、感情が追いついていない無表情で、雛森を見下ろす。
「みんなは・・・他の死神はどうした？戦いはどうなってるんだ」
冬獅郎には珍しい多弁は、ひとつのことを表していた。
かれは、自分の頭に浮かんでいるある確信を、見つめたくないのだ。

「とにかく立てよ。・・・大丈夫か、雛森？」
何事も無かったように、冬獅郎は雛森に手を差し出そうとした。
「なっ・・・」
夏梨が身を乗り出す。
「冬獅郎、危ねぇ！そいつは敵だろ！！」
ぴた、と冬獅郎の手が、空中で中途半端に止まった。
「敵？」
まるで、その言葉を初めて聴いたかのように、その言葉をゆっくりと反芻する。

「松本・・・」
その瞳が、乱菊に・・・その肩の傷に、向けられる。
乱菊の表情が歪んでいるのは、決して傷の痛みからだけでは、ない。
その瞬間、冬獅郎は、まるで道に迷った子供のような貌(かお)をした。

「・・・雛森」
再び視線を合わせたとき。
物言わぬ雛森の瞳に涙があふれ、次々と頬を伝って流れ落ちた。

「なんでだよ・・・」
その問いに、雛森は答えない。
「・・・言ったでしょ」
その瞳で冬獅郎を見つめて、雛森は口を開いた。
「『貴方たちは私たちの敵。生かしておくわけにはいかないの』」
「ふ、ざけんなよ・・・」
「もう戻れないの」
何かを振り切るように、ピシリ、と雛森は言い放った。
「あたしは、死神と破面の最後の戦いのときに、死神を裏切ったの。藍染隊長の仲間になることを選んだの！」

冬獅郎が、一歩よろめくように背後に下がるのを、雛森は目の端に捕らえた。
――　これで、いい。
ゆっくりと身を起こす。
両足がズキリと痛んだが、それにも構わずよろめきながら立ち上がった。
冬獅郎は、それを見下ろしながらも、手を貸そうとはしなかった。

――　そう。これで・・・
冬獅郎と目を合わせることなく、後ろに下がろうとした、その時。
「雛森」
冬獅郎は、一歩、雛森に歩み寄った。
雛森は、信じられないように、自分に差し出された手を見つめた。

「来い」

「話・・・分かったでしょ？あたしは敵なの、もう！」
「それでもいい」
その声に含まれていたのは、5年たっても変わらぬ、家族の情。

雛森は、烈しく首を振った。
「それだけじゃないの、あたしは・・・！」
「いいから来い！」

5年前とは二周りは大きい冬獅郎の手のひらを、雛森は言葉を失って見つめる。
荒いその息が、小刻みに震える。
冬獅郎の眉間に寄った皺は、他ならぬ苦悩を表していた。
それでも。雛森に手を伸ばす自分の決断は、間違っていない。そう信じようとした。

次の瞬間。
雛森の背後の空間が、突然布を引き裂くように、割れた。
「あかんなぁ、雛森ちゃん・・・」
ビクッ、と雛森の両肩が揺れた。
割れた空間の奥。暗闇のほうから聞こえた声。
くつくつと笑っている誰かがいる。
そう思ったとき。暗闇から閃光のようなものが奔った。

「『射殺せ。神鎗』」

「・・っ！」
冬獅郎はとっさに飛び下がりながら、腰に収めていた氷輪丸を抜刀した。

VOL．35　死神滅亡―5　［死神滅亡］

ガキン！
激しい金属音と共に、神速で抜き放った氷輪丸と、同じくらいの速度で飛んできた切っ先がすれ違う。

「てめぇ・・・」
冬獅郎の頬から、ドロリと紅い血が流れ出た。
「動き自体は、前より良うなったんとちゃうか？十番隊長さん」
ぬるり、とでも形容すべき動きで、闇から姿を現したのは・・・
「ギン・・・」
乱菊が、その姿を見て、そうつぶやく。

冬獅郎よりやや暗い色の銀髪。
亀裂のような微笑。
そして、チラリと覗く、紅い瞳。
冬獅郎の記憶と寸分変わらぬ、「市丸ギン」の姿がそこにはあった。

「正直に言わなアカンわ。
雛森ちゃんが何したか、ちゃんと言わな、十番隊長はん分からへんで」
蛇を思わせる、その愉悦の表情のまま、ギンは冬獅郎を見つめた。

「何だと？」
「教えたろか・・・」
「やめてぇ！」
切羽詰った声で、雛森が叫ぶ。
ギンはその雛森の肩に、後ろから腕を回した。

「5年前。
2ヶ月に及んだ死神と破面の全面戦争の末、精霊廷は壊滅。
生き残った死神も、破面が追い詰めて殺したんや。
『最後の一人まで生かすな』
藍染隊長の、その命令のもとに」

スラリと抜き放たれた神鎗が、冬獅郎の首元を、なぶる様にゆっくりと掠める。
浅い傷から、紅い血が流れ出しても・・・冬獅郎は動けなかった。
「てめえらには・・・それでも、心があるのか」
やがて。冬獅郎の口から押し出された震える声に、市丸は笑い出した。
「何を言うか思たら、おもろいこと言うなぁ」

神鎗の刀身をすべる紅い血を、市丸は愛でるように見下ろして、嗤った。
「おもろかったで。偉そうにふんぞり返ってた死神を、捕らえて、なぶって、殺すんは」
「・・・！」
ギリ、と歯を食いしばり、冬獅郎は抜刀した刃を市丸に向けた。
チリリ・・・
音を立て、その刀身が震えている。
その切っ先の前に、市丸は雛森の体を押し出した。

「・・・どけ。雛森」
冬獅郎の激情に燃える瞳が、雛森に向けられる。
しかし、雛森は、動かなかった。
「一番殺すべきなんは、そこにおる雛森ちゃんで間違いないはずやで」
「・・・なんだと？」

「藍染隊長と通じ、精霊廷に破面を引き入れ・・・
滅亡の切欠(きっかけ)をつくったんは、雛森ちゃんやからな」

「えっ？」
壊れる。
冬獅郎の表情を見た雛森は、そう思った。

「それでもアンタ、雛森ちゃんに手を伸ばすんか？優しい言葉かけれるんか」
冬獅郎の狼狽を愉しむかのように、市丸は畳み掛けた。
「・・・うそだ」
「ほぉ。信じへんのか？でもな、アンタが最後の隊長やってことは事実や」

最後の隊長。

その言葉に、冬獅郎は凍りついたように立ち尽くす。
「・・・雛森」
噛んで含めるように、ゆっくりと冬獅郎は雛森に視線を据えた。

「市丸の言ってることは、真実(ほんとう)か」
冬獅郎を見返す雛森の無表情からは、感情(おもい)は読み取れない。
しかし、一度だけ明確に、彼女は頷いた。

「ほな、行こか。藍染隊長が呼んではる」
「・・・分かったわ」
「・・・市丸！」
「日番谷くん！」
詰め寄ろうとした冬獅郎に、雛森が叫ぶ。
その声は、いまだに冬獅郎の動きを止める力を持っていた。

「ひとつだけ。ひとつだけ聞いて。『ルーツを求めては、ダメよ』」

「・・・なん・・・」

冬獅郎が、その言葉を理解できたかは分からない。

その姿が、闇に飲み込まれる直前。

市丸は、その紅い瞳を一瞬、乱菊のほうへ向けた。

「待・・・！」

冬獅郎が駆け寄ろうとした瞬間、二人の姿は闇に飲まれ、ふっ、と消えた。

――　来る・・・！

夏梨はハッと上空を見上げた。

破面たちが、3人に狙いを定め、夜空から降りてきそうに見える。

――　冬獅郎！来るぞ！

そう、言おうとして。夏梨は冬獅郎を見つめた。

「・・・冬獅郎・・・」

地面にくず折れるように片膝をついた冬獅郎に、続ける言葉が無かった。

市丸と冬獅郎の会話は、夏梨のところにもはっきりと届いていた。

「・・・っか、やろう・・・」

何かを吐こうとするかのように、冬獅郎がつぶやく声が聞こえた。

激しい苦悶にさいなまれている、その表情。

夏梨は。

ひとがこれほど苦しむ表情を、初めて見た。

戦えと、刀を取れというには、あまりにも酷なほどに。

そのときだった。

「月牙天衝！」
懐かしい声と同時に、巨大な衝撃派が破面たちを吹き飛ばした。
「一兄！」
夏梨が上空を見上げ、ほっとした声をあげる。
「・・・黒崎」
「他の奴らも来てるぜ。戻ったみてえだな」
一護は、冬獅郎の隣に降り立つと、深くうつむいたままの冬獅郎の前に、膝をついた。

「その顔だと、知っちまったみたいだな。破面との戦いの結末を」
返事をしない冬獅郎の肩に、ゆっくりと手を置いた。
「ムリもねえ。退がってろ、冬獅郎。ここは俺がやるから」
当然だろうと思う。
自分だって、受け入れるのに何ヶ月もかかったのだ。
普通の人間としての人生を与えられて、5年もそれに沿って生きてきたのに、突然元の人生に戻されたって戸惑うだけだろう。
でも・・・運命は、彼らを待ってくれない。

「でもな。冬獅郎。まだ終わっちゃいないぜ」
一護がそう言って夜空を見上げた先で、キラリ、といくつかの光が輝いた。
「舞え、袖白雪！」
「吼えろ、蛇尾丸！」
暗闇を裂いて、よみがえった死神たちの声が聞こえる。
「・・・あぁ」
冬獅郎は、刀を手に、ゆっくりと立ち上がった。
「冬獅郎、さがって・・・」
「いや」
氷輪丸に、再び光が宿った。
「冬獅郎、お前・・・」

「俺がここで退けるわけ、ねえだろ」
どこか寂しげな瞳を、冬獅郎は一護に向けた。
「奴らの言葉が正しいなら・・・俺は、最後の隊長、だから」

VOL．36　死神滅亡―6　［死神の帰還］

浦原商店の屋根に座り、浦原が夜空を見上げていた。
下からは、トーン、カーン、とテッサイが家を補強する音が聞こえてくる。

「王廷に戻るのですか。鉄殿、緋鹿殿」
後ろに現れた気配に、振り向かずに問う。
浦原の隣に、恵蓮と、恵蓮の肩を支えた逸輝が現れた。
月光に、銀色にけぶって見える恵蓮と、影のように隣にたたずむ逸輝の姿を、
浦原はどこか、まぶしそうに見上げた。

「今更、間違ってもソウル・ソサエティに戻るとか言い出すなよ。ムダだから」
そう言い放ち、逸輝は腕をぐい、と水平に突き出す。
すると、何も無い空間から、一羽の白鷹に似た鳥が現れた。
その鳥が一声鋭く鳴くと、和風の扉のようなものが、闇の中にぼんやりと現れた。
閉ざされた障子の向こうには、得体の知れない気配が満ちている。
「なるほど、これが王廷への扉ですか。死神とやり方が似てますね」
死神の場合、ソウル・ソサエティへと導くのは地獄蝶という黒揚羽に似た蝶だった。

「ムダですかねえ」
浦原は、飄々（ひょうひょう）とした声で、逸輝の言葉を反芻した。
「勝ち目ねえだろ」
「勝ち目がなければ、ムダですか？」
浦原の問いに、逸輝は言葉を止め、浦原を見やった。

「ムダだろ」
あっさりと言い返す。

ふぅ、と浦原は息をついた。
「5年前、死神たちは、圧倒的な劣勢の中で、最後まで戦い抜きました。
歴史の流れが、破面に傾いている・・・それを知りながら、ね。
歴史の奔流に立ち向かい、敗北し、そして歴史から精霊廷の名は消えた。
歴史に忘れられ捨てられてゆく。見事な生き様ではないですか」

「・・・たった今、死神が滅びた理由が分かったよ」
逸輝は肩をすくめて口をつぐみ、浦原はアッハッハッ、と声を立てて笑った。
しかし、恵蓮の翠の瞳が自分を見つめているのをみて、笑みをすべり落とす。

「あなたは、罪をおかしましたね」

桜色の唇からつむぎだされたその言葉は、質問ではない。断定だった。
「・・・アタシの罪？」
浦原は、恵蓮をまっすぐ見返した。
「どの罪でしょう？精霊廷を護れなかった罪？
それとも、死神の生き残り達の記憶をいじくった罪」
「違います」
恵蓮も、浦原をまっすぐ見返した。

「・・・あぁ、その罪のことですか」

浦原は、目を細めて・・・微笑んだように見えた。
「それは、アタシが墓場まで持っていくものです。・・・勘弁してください」
「恵蓮？」
逸輝が恵蓮を見下ろした。
ふる・・・と恵蓮は首を振り、それ以上は追求しようとしなかった。

「それでは、わたくし達はお暇しますわ」
「ええ。・・・時空を渡る姫よ」
黙って見送っていた浦原が、不意に、呼びかけた。
感情（おもい）のこもった声音に、門の前に進み出た恵蓮が振り返る。
「貴女（あなた）は複数の世界を渡るという。
どこかに死神が、幸せに暮らす世界はあるんだろうか」
浦原はつかの間、さびしげに唇を噛んだ。
返事の代わりに、ふわり、と恵蓮が微笑んだからかもしれない。

「どこかで、彼らに出会ったら。
今度は護ってやってください。
こんな『結末』になる前に」

それは、彼女に求めても、おそらく意味を持たないこと。
分かっていても、言わずにはいられなかった。
しかし、恵蓮は門を通りざまに、涼やかな声で言い残した。
「約束しますわ」

「・・・約束、か」

浦原は、完全に日が落ち、星が瞬く夜空を、放心したように見つめていた。
その中に、闇よりも黒い姿が、次々と浮かび上がる。
「戻ってきましたね。・・・だが、傷は深いようだ」

先頭が、一角、弓親。
その次に、乱菊を抱き上げた冬獅郎と、夏梨を背負った一護が続く。
恋次とルキアが後方を護っていた。

「浦原サン。井上、呼んでくれるか。乱菊さんの傷がかなりひどい」
タッ、と屋根に飛び降りた一護が、浦原に声をかけた。
「もう呼んでありますよ。そろそろ到着するはずです」
屋根の端に、続いて冬獅郎が飛び降りた。
乱菊は意識を失っているらしく、冬獅郎の腕にぐったりと、頭をもたせ掛けている。
冬獅郎の表情は月を背にしているせいで、全く見えなかった。

「戻られましたね。『日番谷隊長』」
顔を上げたとき、その翡翠色の瞳に光が渡った。
「教えろ。精霊廷に何があったのか」

VOL．37　たった一人の戦争―1　［虚の記憶1］

ちらり、と行灯の燈が揺れる。
思い思いに座る死神たちの姿を、影絵のように障子に浮かび上がらせた。
「ありがと・・・織姫。アンタ、いい女になったけど、腕もあがったわね」
布団に横たわった乱菊の細い指が、そっと織姫の頬を撫でた。
織姫は涙ぐみながらも微笑み、軽く首を振った。

織姫が浦原商店に辿り着いたのは、一護たちが戻ったのとほぼ同時だった。
――　「織姫」
苦しい息の下から、冬獅郎に抱かれた乱菊が、少し大人びたその姿に、呼びかけた時。
駆け寄った織姫は、冬獅郎ごと、乱菊をぎゅっと、抱きしめた。

――　「・・・冬獅郎くん、乱菊さん。・・・おかえりなさい」
震えるその腕が、この5年を耐えて暮らしてきたのは、この娘も同じだということを示していた。
乱菊を覆っていた、淡い乳白色の光が、少しずつ小さくなり・・・
そして、ふっと消えた。
その場で光を放つのは、行灯と、夜空に浮かぶ月光だけだ。

「うん、もう平気みたい。相変わらずすごいわね」
乱菊はひょい、と起き上がると、斬られた右肩をぐるぐると回して見せた。
「さっきまで死に掛けてただろうが、すぐに起きんな」

柱に背中を持たせかけ、両足を畳に投げ出した冬獅郎が、乱菊に声をかけた。
今も死覇装のままで、右手に氷輪丸の鞘の部分を握っている。

「隊長ったら、相変わらず心配性ですね～。でも、だいじょぶですから」
「お前が、楽観的すぎんだよ」
二人の会話を楽しげに聞いていた織姫が、ぷっと吹き出した。
「変わらないね～、ふたりとも。
あたしの家で、3人で暮らしてた時のこと、思い出しちゃうな」
「・・・当然だろ」
プイと目を逸らした冬獅郎を見て、織姫がキョトンと小首を傾げた時、
「いや～、今宵はいい月だ。役者も揃ってることだし、長話にはちょうどいい」
ガラリ、と襖が開いて、浦原が入ってきた。
そして、一同をぐるりと見渡す。

部屋の奥から、乱菊、織姫、冬獅郎、一護、恋次、ルキア。
開け放たれた障子の傍で、縁側に足を投げ出して寝転んでいるのが、一角。
傍に弓親が胡坐をかいている。
月光に照らし出された死覇装姿の死神は、この世のものでないほどに朧に見える。

「長話なんて、いらねーんスよ、浦原さん」
浦原が入ってくるのを見上げた一角が起き上がると、その場にくるりと胡坐をかいた。
「過去のことなんて、もう終わったことだ。
変えようがねえんだから。今ソウル・ソサエティがどうなってるの

か。
それだけ分かればいい」
「・・・市丸と、雛森に会った」
それに返したのは、冬獅郎だった。
鞘に収められた氷輪丸を見下ろす彼の瞳は、普段の明るい翡翠色が嘘のように、冥(くら)い。
「市丸は言っていた。
5年前に起きた死神と破面の全面戦争の結果、死神は滅びた、と。
・・・事実か」

ガタッ、と音を立て、ルキアが身を起こす。
隣で恋次も、声にならぬ叫びを漏らした。
「滅びたって・・・！」
「精霊廷が現在、ソウル・ソサエティには存在しない、というのは事実です」
冷徹、といっていい響きを持って、浦原が言い放った。

まるで、死刑宣告を受けたかのように、その場は重い空気に沈んだ。
「・・・バカな。何千人もいて、精霊廷を護れなかったのか・・・」
ルキアが上半身を起こした体勢のまま、額に手をやって、呻いた。
「騒ぐなよ」
一角が、その場をギラリと見渡した。
「相手の力が上回った、それだけのコトだろ。・・・ただ、気が変わった」
鋭い視線が、浦原のところで止まる。
「事情を聞かせてくれ。なんで、そんなことになった」

「・・・5年前。貴方がたは破面の動向を探るため、先遣隊として

空座町に現れた。
それは覚えていますか？」
「あぁ。この数時間で、ずいぶん記憶がハッキリしてきたのでな」
ルキアが浦原の問いに頷いた。
「上等。では質問を変えましょう。覚えている最後の記憶は、何です？」
「十刃（エスパーダ）とかいう奴らが襲ってきた辺りだね。
８本の触手を持つ破面が現れて、日番谷隊長が倒されたんでしたよね。
何っていう名前でしたっけ」
「ルピ」
弓親の問いに、冬獅郎が必要最小限の返事を返した。

「そうですね。貴方がたの記憶は、その辺りからあいまいになっているはずだ。
十刃を撃退した直後に、日番谷隊長、貴方は何かに気づいた」
浦原は口角を上げ、どこか挑戦的な視線を冬獅郎に向けた。
しかし冬獅郎は、不可解な表情をして首を振る。
「イヤ、ルピを『千年氷牢』で封じた辺りから覚えてない」
「『なんだこの気配は』。そう言ってましたよ、隊長。ガラにもなく慌てて」
織姫に支えられ、布団の上で上半身を起こしていた乱菊が、口を挟んだ。

「俺がか？」
「乱菊サンは、いつも日番谷隊長を見てましたからね。
いつもと違う貴方の態度が、強く印象に残ったんでしょ」
「あたし、優秀だったんですね、隊長」
「混ぜっ返すな、話が先にすすまねーだろ。・・・まぁ、大体想像はつくが」

「記憶を推測で補いますか。それは何だと?」
「最強の破面・・・ヴァストローデが、精霊廷に侵攻してた、とかな」
そう浦原に答えた冬獅郎の言葉には、静かな自信がたたえられていた。

当時自分達が戦ったのは、十刃と呼ばれるアジューカス・・・破面の中では中級の力を持つ敵だった。
そして、山本総隊長は、ヴァストローデの数がもし十体を超えたら、敗北するのは死神だと言っていた。
五年前の自分をそこまで動揺させたもの。
そう考えれば、答えを導き出すのは、そう難しいことではない。

「・・・安心しましたよ」
浦原は、ほっとした表情というよりも、満足したように言った。
「五年間のブランクがあっても、人間ボケはしてないみたいですね」
「俺達の記憶を弄ったくせに、よく言うぜ。・・・時間は待っちゃくれねえんだ」
それは、わずか数時間前に、思い知らされたこと。
とはいえ、もしもあの時、一護たちが助けに入らなければ、破面と戦う気力があったかは自分でもわからなかった。
「アタリですよ、日番谷隊長。
あの時藍染は、ヴァストローデを引き連れて精霊廷を襲った。
ヴァストローデの総勢は三十名。対する精霊廷は三千名」
「百倍じゃねえか!それくらいの敵・・・」
一角の態度とは裏腹に、冬獅郎は深くうつむいた。

VOL．38　たった一人の戦争―2　［虚の記憶2］

浦原は、話を続けた。
「そうですよ。わずか三十名。しかし、ほぼ3日で精霊廷は壊滅状態にまで追いやられた」
「ヴァストローデの実力は隊長よりも上。一人ずつ、相打ちで倒せと言われてた」
浦原に押しかぶせるように、冬獅郎が付け加えた。
「・・・誰に」
「山本総隊長に決まってんだろ」
たずねた恋次だけでなく、その場の死神たち全員が顔を見合わせた。正直なところ、その段階で、隊長たちが死を覚悟するほどの深刻な状況だとは、想像だにしていなかったからだ。

「三十体。それは、絶望的な数字だったんですよ。確かにね」
浦原がそう言うと、彼には珍しく、ため息をついた。
「精霊廷が壊滅してからも、死神たちはゲリラ戦に持ち込み、反抗を続けました。
2ヶ月も持ったのは、よく戦ったというべきでしょう。
しかし・・・2ヵ月後には、すべての戦いは終結した」

「・・・ちょっと待ってくれよ、浦原さん」
そこで口を挟んだのは、一角だった。
「納得いかねーな。俺達は、そんな事態に何やってたんだ？
まさか、のほほんと見守ってたってのか？」
「イヤ？そんなことありませんよ。
日番谷隊長が異変を感じ取って直ぐ、貴方たちは精霊廷に戻ろうとした」
「で！戻ったのか？」

「いいえ」
浦原は、手にしていた煙管に火を入れながら言った。
「精霊廷には、辿り着けなかった。
アタシとテッサイがその前に、貴方たちの記憶を封じ込めましたから」
「な・・・なんでだ！」
一角だけでなく、恋次もその場から身を乗り出した。
対照的に、浦原は冷静なそぶりで、ふーっ、と煙管から煙を吹き出した。

「封魂術、か」
冬獅郎が、二人の前に手のひらを返し、浦原に詰め寄ろうとしたのを制した。
「言い訳でもいい、理由を聞きたいところだね」
弓親が浦原に言う。口調とは逆に、その視線は鋭い。
「・・・貴方がた、初めに先遣隊として選抜されたとき、おかしいと思いませんでした？」
煙に巻くような口調で、浦原が話し出す。

「隊長が一人。副隊長が二人。一流の戦闘能力の持ち主が二人。貴族が、一人。
ずいぶん豪華な布陣じゃないですか？先遣隊にしては。
いくら破面が強いとは言え、これだけいなくなれば、本隊にも影響がでるでしょう」
「・・・何がいいたい」
ルキアが眉をひそめた。
「山本総隊長が直々に選抜したんですよ、貴方がたは。日番谷隊長はご存知ですね」
「・・・あぁ」
冬獅郎が頷く。

「先遣隊のメンバーは、山本総隊長が直々に選んだ。
京楽隊長が、今アンタが言ったのと同じ意見を言ったが、あっさり却下されてた」
すでに、七分がた想像がついているのか、その表情が不快なものに変わっていた。

果たして、浦原は続けた。
「総隊長は、いずれ精霊廷が主戦場となること、そしてヴァストローデ級が十体以上いることも、見越していたんですよ。
だから、少数精鋭を選抜したんです。様子見のためではなく、現世へ『逃がす』ために」
「ちょ、ちょっと待てよ！じゃあ・・・」
「ええ」
恋次の狼狽を押さえつけるように、浦原が頷いた。

「貴方がたが現世に来る前日、山本総隊長から打診がありました。
そして、精霊廷が存亡の危機に曝されたとき、貴方がたの記憶を封じるように、アタシに命じたんですよ。
貴方がたがそれを望まぬことは当然だから、騙してでも術をかけるようにと。
だからアタシは5年前、精霊廷へ帰ろうと逸る貴方がたを陥れ、ここで封魂術をかけた」

「・・・つまり、何か？私達は、ぬけぬけと術中に嵌って、生き延びた・・・のか」
「霊圧も、記憶も失った貴方がたを追うことは、破面にだって不可能だ。
そうして5年、普通のヒトとして現世で暮らしてきたんですよ。
・・・アタシを、貴方がたは恨んでいい」
「・・・やめろよ、お前ら。みっともねえことはすんな」

間髪いれず、冬獅郎が言った。
立ち上がろうとした恋次と、一角の気配を感じ取ったのだろう。
その一言に、死神たちは全員、黙り込む。

――　ムリもねえ。
俺だって心中はムカついてんだ、と冬獅郎は思う。
未来を託された、といえば聞こえはいい。
しかし、精霊廷が滅びるか滅びないか、という分け目で、共に戦えなかった。
もしもそんな命令を直接されたら、例え処罰されようが歯向かっただろう。
「もしもできるなら、山本総隊長の横っ面をぶん殴ってやりてえよ」
一角が、つぶやくように言った。
その拳は、青筋が浮くほど硬く、握り締められている。
「でも、もうそれも、できねえのか・・・どうなったんだ、死神の最期は」

「・・・それは、俺が話す」
これまでずっと黙っていた一護が、口を開いたのは、その時だった。
「そうだてめぇ、一護！お前は記憶あったんだろ！精霊廷には・・・」
「・・・行ってねえ」
自分を見下ろした恋次に、一護は視線を向けずに返した。
「どういうことだ！」
「行けなかったんだよ・・・！」
「黒崎くん・・・」
急に形相を変えた一護を、織姫が気遣わしげに見やった。
「確かに。貴方が話すのがふさわしいかもしれませんね。黒崎サン」
浦原の声は、いつになく優しく聞こえた。

「・・・5年前。俺は、精霊廷に行く方法を、一人で画策してた。
浦原サンの立場を考えれば、無理やり穿界門を創ってくれとはいえねぇ。
そして、1ヵ月後。俺は穿界門に辿り着いたんだ」
まるで、物語を語るような、淡々とした声。
それは、まるで別人のように聞こえた。
そして、一護の話は・・・文字通り、死神たちの心を凍て付かせるのに十分なものだった。

VOL．39　たった一人の戦争―3　［残された者］

チッ、チッ、チッ・・・
静まり返った部屋の中に、時計の音だけが響いていた。
一護は、電気もつけないまま、部屋のベッドに寝転がり、目を閉じていた。
夕日が沈み、濃厚な闇が降りてきているのは、瞼を閉じていても分かった。

――　静かだ、な。

たった一週間前まで、押入れの中にはルキアが隠れ住んでいた。
互いに言葉を交わさないことも多かったが、それでも、静かだとは思ったことが無かった。
こんな風に、時計の音が耳に障ったことは、一度も無かったように思うのに。
一護は、ゆっくりと目をあけた。
開けたままの窓から風が吹き込み、カーテンがまくれ上がる。
夜空の向こうに、満月がぽっかりと、顔を覗かせていた。
そのくっきりとした輪郭をじっと見つめていると、光に満ちた別の世界への入り口が、丸く開いているような気がしてくる。
――　あれが、精霊廷への入り口なら、良かったのに。

浦原は、精霊廷に辿り着こうと逸る一護を諌め、こう言った。
――　あの6人は、無力な人間として暮らしている。
貴方が護らなくて、誰が護るっていうんです。
貴方には貴方にしかできないことがあるはずだ。
肩を並べて戦ったあの死神たちが、ヒトとして暮らしているという。

遠い地かもしれないし、思いがけないほど近所かもしれない。
6人の死神たちが散った場所を、一護は敢えて聞かなかった。
聞けば、必ず姿を見たくなる。
そして、強い霊圧を持つ自分が近づけば、破面に見つかりかねないからだ。
そして、一護は生ぬるい日常に戻された。

ヴァストローデが精霊廷に攻め込み、日番谷先遣隊が記憶を奪われてから、1ヶ月が経過していた。
たった今このとき、死神の誰かが殺されているかもしれないのに。
「ちくしょう・・・」
一護は月から目を逸らすと、ひとり呟いた。
たった3ヶ月前は、敵だったはずだ。
更に2ヶ月前は、死神なんてものがこの世にいるとは、夢にも思っていなかった。
たった5ヶ月前に、記憶を巻き戻せばいいだけだ。
そしたら、何も無かったように、生きていける。
そう・・・思いもした。
でも、町を歩けば、まったくの他人が死神の誰かに見えて、慌てて振り返ったり。
死神が、殺される夢にたたき起こされたり。
ヒトの心はキカイじゃない。巻き戻したら、無くなる過去なんてないのだ。

「・・・黒崎くん」
スッ、と戸が引きあけられる。
廊下の蛍光灯の光が、部屋の中に長く差し込む。
ドアのすぐ外に立っているその姿は、影絵のように真っ黒に見えた。
「井上」
一護は、振り向かずに答えた。

「精霊廷の入り口が見つかったら・・・ソウル・ソサエティに戻るぜ」
それは、ずっと心の奥に秘めていた、願い。
もしも、ルキアや恋次たちが、今の迷ってる俺を見たら。
何をしているのだ、早くもどれと、叱咤するだろう。
「うん。・・・判ってたよ」
織姫は、ベッドに寝転がったままの一護を見て、どこか寂しげに微笑んだ。

「浦原さん、方法知らないのかな」
バタン、と扉を閉める音が聞こえ、部屋の中はまた、闇に閉ざされた。
月光を頼りに、織姫はベッドの脇に正座する。
「浦原商店の地下にあった穿界門も、浦原さんが壊しちまったからな・・・」
「壊したって・・・」
「門が残ってると、それを道しるべに攻め込まれることがあるんだと。
だから浦原さんが壊した」

――「浦原さん！アンタなんてことを・・・！！」
1ヶ月前。一護は、浦原商店の地下空間に降り立った。
目の前には、崩れ落ちる穿界門の残骸が散らばっている。
瓦礫の前に立ち尽くす浦原喜助に、一護は足早に歩み寄った。
――「ンなことしたら、精霊廷にはいれないだろうが！！」
――「これも、山本総隊長の命令なんスよ。
この門を使って、ソウル・ソサエティから破面が攻め込んでこないように、門は壊すように。

この門があれば、アナタは間違いなく戻ろうとする、それもあの方は言及されてました」
隙のないお方だ。
次の言葉は、かすれたようで聞こえなかった。

その背中が、やけに孤独に見えて。
一護は思わず、背を向けたままの浦原を凝視した。
――「諦めてください、一護サン。アナタがあちらに行っても、戦況が覆ったりはしない。
でもここにいれば、できることがあるはずだ。1＋1よりも簡単な選択でしょう。
――「なに、言ってんだよ」
一護は、ギリ、と歯を食いしばった。
――「諦めろだ！？諦められるかよ！アンタよく平気でそんなこと言えるな。
アイツらは、アンタの仲間だろ。精霊廷はアンタの故郷だろ。何も思わねぇのかよ！！」
背を向けたまま立ち尽くしている浦原の肩に、一護は手をかけた。

「・・・浦原さんには、頼めねぇ」
一護は、ベッドから起き上がると、織姫の顔を物憂げに見て、首を振った。
「・・・そう」
織姫も何かを感じ取ったのだろう。それ以上は何も問おうとはしなかった。
「誰か死神か、精霊廷の気配・・・感じ取れたか？」
「うん、毎日やってるんだけど・・・カケラも感じ取れなくて。でも頑張るよ！」

照れたように頭を掻いた織姫にも、疲れが見えた。
「お前。毎日どれくらいの間、霊圧を探ってるんだ？」
「うーん。平日だと４時間くらいかな？」
「４時間！」
一護は思わず大声を出して、織姫を見下ろした。
休日だとどれくらいの間試みているのか、聞きたくも無かった。

「平気、平気よ、全然。死神さんたちに比べたら・・・」
語尾は、小さくて聞き取れなかった。
「・・・くしょう、俺にも霊圧辿る力があれば」
ルキアにしっかり学んでいればよかった、と今更のように一護は後悔していた。
「この１ヶ月、ずっと探ってるんだけど、ダメ・・・。何も感じないよ」
「そうか・・・」
「ごめんね、黒崎くん。しょっちゅう押しかけちゃって」
「かまわねーよ」

確かに、この１ヶ月、織姫が一護の部屋を訪れる回数は増えた。
というよりも、こうなるまでは、一度だって織姫が、一護の部屋を訪れたことは無かったのだ。
「一人で霊圧を追いかけてると、たまにすごく・・・怖くなるの」
ポツリ、と織姫は言った。
それは、１ヶ月前の彼女だったらまず見せない、苦悩がにじんだ表情だった。
「どうしても、悪い予感のほうに頭がいっちゃって」
一護はとっさにどう声をかけていいかわからないまま、織姫を見下ろした。
「でも、大丈夫。黒崎くんが近くにいてくれれば。・・・がんばってみるね」

織姫は微笑むと、スッとその大きな瞳を閉ざした。

目を閉じた無表情が、見慣れないもののような気がして。一護は口をつぐんだ。

もどかしかった。

霊圧を感じ取れない一護には、織姫がどれくらいのプレッシャーと日々向き合っているのか、想像もつかないからだ。

一護は、その場に正座したまま動かない、織姫の一回り痩せた顔を見つけた。

そっ・・・と、その織姫の顔に向けて、手を伸ばそうとする。

――　もういいよ、井上。

そう言おうと思っていた。

1ヶ月間探り続けてダメなら、これ以上織姫が精神をすり減らしても、霊圧を感じ取ることはできないだろう。

それなら、別の手段を探したほうがいい。・・・それが何かは、わからないけれど。

そのときだった。

織姫がパッと目を見開き、一護は反射的に手を引っ込めた。

「お・・・おい、井上どうしたんだ？」

その体が小刻みに震えているのを見て、一護は織姫の顔を凝視した。

「やちるちゃん・・・やちるちゃんが！」

目をこぼれそうなほどに見開いて、織姫が一護の肩を掴んだ。

VOL．４０　たった一人の戦争―４　［やちるとの邂逅］

その、３分後。
死神化した一護は、夜空を駆けていた。
「あっち！上のほうよ」
織姫は、確かにやちるの霊圧を、夜空に感じ取ったといっていた。
上に向かって飛び続けて、もうずいぶん時間がたつ。

――　どれくらい来たんだ・・・
街を見下ろして、一護はふと眉をひそめた。
さっきまでまぶしいくらいに見えていた、街のネオンが、全く見えなくなっていた。
「なんだ？」
一護は口に出した。
目標にしていた、朧な月の姿も、視界から消え去っていたからだ。
うすぼんやりと明りが漏れてくること以外は、あたりは亡羊とした闇に包まれている。
気づけばたった一人、一護はそこにたたずんでいたのだ。
ここで自分が叫ぼうが、何をしようが、何もできない。
誰の気配も感じない。

――　俺は、無力だ・・・
一ヶ月前、浦原の肩を掴んで振り返らせた時に投げつけられた言葉が、耳によみがえった。
――　「アタシは無力だ」
振り返った一護の前にいたのは、見知らぬ男だった。
飄々とした表情をいつも浮かべた仮面をかなぐり捨て、苦悩に苛まれる一人の男がそこにいた。
――　「精霊廷が滅びる！死神が、殺される！

それでも、追放されたアタシが精霊廷にたどり着くのは不可能なんだ。
アナタに判るものか・・・！それがどれほどの苦しみか！！」
浦原の頬を伝ったものを、一護はなすすべも無く見守った。

――　ポツン。

なみだ、が、
手のひらに落ちた。
「ちくしょう・・・！」
気づけば、叫んでいた。
「ちくしょうちくしょう、ちくしょう！！！」
声と共に、勝手に涙が伝い落ちた。
こんな上空では、一護の叫びに気がつくものは居ないはずだったから。

ずっとずっと、怒鳴りたかった、わめきたかった。
死神、浦原、そして織姫。
自分と同じくらい、またはそれ以上苦しんでいるだろう人たちの間に挟まれて、苦しいと発露することもできなかった。
八方塞がりのこの状態を、打開する方法が見当たらないんだ。
どうすればいい？？

そのときだった。
――　いっちー。
あどけない声が耳に届き、一護は我に返った。
「いっちー」

「・・・やちるか？」
一護は、信じられない思いで、死覇装の袖で涙をぬぐった。
「こっちだよ」
その声に目を凝らすと・・・そこにはいつの間に現れたのか、一護が夢にまで望んだ、穿界門があった。
「・・・ここか？」
一護は、心臓がどくどく波打つのを感じながら、その扉・・・障子の取っ手に、指をかけた。
スラリ、とほとんど何の抵抗も無く、障子は開いた。
その先に広がっていたのは・・・どこまでも続く、どんよりとした闇だった。

「やちる！」
一護は、ためらいなく、その闇の中に飛び込んだ。
その先に、かすかに。光が見える。
そこからは、肌に突き刺さるような瘴気が漂ってきていた。
そのときには、一護ももう、気づいていた。
光の先には、精霊廷があるのだと。
薄ボンヤリとした闇の中を、一護はまっしぐらに駆け続けた。
何かに躓いて、肘を何かにかすったが、つんのめりながらも、光の方だけを見た。

「今行く！」
肩に背負った斬月の柄を、強く握り締める。
どんな現実が待っていても、ひるまぬように。

「・・・ん？」
その光が大きくなるにつれ、何か小さな、黒い点のようなものが、光の中に見えた。
それが大きくなり、人の形に見えた、と思ったとき・・・

「うわ！！」
一護の体は、いきなり壁のようなものに突き当たり、背後に吹っ飛ばされた。

「アッハ！相変わらず慌てんぼうだね、いっちー」
そのあどけない少女の声は、思いがけず近くに聞こえた。
「っつー・・・やちる！お前、よかった無事だったんだな！」
一護は鼻を押さえながらも、すばやく立ち上がった。
そして、そこに立っていたのは・・・微笑をたたえた少女、見間違えようも無い草鹿やちるだった。
「やちる・・・って、なんだこの壁みたいなやつは？」
やちるに近づこうとしたとたん、また壁に阻まれた。
暗闇の中で手をやると、目に見えない壁にダン、と手のひらが着いた。
一護とやちるの立つ幅は、わずか1メートルほど。
二人の間を阻んだ壁が、ピシッ・・・と、わずかに稲妻のような光を放つのが見えた。

「んー・・・」
やちるは、人差し指を口元にやって、小首をかしげた。
「いっちー、そこは通行止めだよ」
「通行止めって、オマエな」
「だって、精霊廷なくなっちゃったもん。こっち来ても、もう何もないよ」
やちるが何気なく発した言葉に、一護は耳を疑った。

VOL．41　たった一人の戦争―5　［慟哭］

「お前、今なんて！精霊廷が・・・どうなったって？」
「まけちゃったの」
やちるの表情から、ふっと炎をかき消したように、笑みが消えた。
「敗けたって、何でだよ？精霊廷は、隊長たちが護ってたはずだろ！」
「ひとり・・・いなくなっちゃったの」
「逃げた死神がいたのか？」
一護の知る限り、隊長格の死神で、ただの一人も敵前逃亡するような者はいなかったはずだ。

やちるは、うなずくでも首を振るでもなく、そのまま続けた。
「でね。その開いたところから、破面が押し寄せてきたの。
気がついた時には、精霊廷の中にはいりこんでたの」
「それは・・・」
一護は、次の言葉が継げず、やちるを見返した。
それは、逃亡というよりも・・・裏切りではないのか。

「ももちゃんはね」
やちるは、頬に少しだけ、笑みを浮かべながら続けた。
「そうちゃんが、大好きだったの。ホントにホントに、好きだったの」
「そ・・・そうちゃん？」
「藍染惣右介」
一護を見上げたそのピンクの髪が、風にふわり、と揺れる。

「だから・・・そいつは、精霊廷を裏切って、藍染についたのか」
それが、どれほどの結果を招くと思っているのだ。

「・・・許せねえよ、裏切ったのは誰だ！」
「ヒトを好きになっちゃいけないの？」
やちるの質問が、激情にかられた一護の耳に、涼やかに聞こえた。
その声音に込められた疼きに、一護はやちるの無心な顔を見下ろした。

「・・・ダメじゃねえ。ダメじゃねえよ。でも、犠牲になったものがデカすぎるだろ！」
「そうだね」
やちるは、瞳をゆっくりと閉ざした。
「でもあたしは、ももちゃんの気持ち、少しだけわかるよ」
「精霊廷は！どうなったんだ！」
その、どこか諦めたような表情が、一護の焦りを生んだ。
「みんな戦ったんだけど、敵さんがすごく、強かったの。
3日くらいで精霊廷はなくなっちゃって、みんなバラバラにされちゃった」
「なんだって・・・」
「あたしはね。やることがあってきたの」

闇に飲まれて見えなかったが、やちるは自分の身長くらいの斬魂刀を携えていた。
音も無く、それをスラリと引き抜くと・・・その刀が、朧な光を放つ。
光に照らされたやちるの顔は、泥とも、血ともつかないもので汚れていた。
「これが、最後の穿界門だから。壊さなきゃ」
「壊す・・・なんでだよ！！なんでそんなことする必要がある！！」
一護の心を、イヤな予感が暗雲のように広がってゆく。
やちるは、どこか寂しげな微笑を浮かべた。

「穿界門を壊せば、精霊廷から出ることも、入ることもできなくなるの。
敵さんを閉じ込められる」
「じゃぁ！お前らはどうなるんだよ！
ヴァストーデと一緒に閉じ込められて、勝ち目あんのかよ！！」
確かに、精霊廷に敵を閉じ込めれば、それ以外の世界・・・現世や王廷は助かる。
だが・・・死神はどうなる？
「自分達を犠牲にして護られたって、ちっとも俺達は嬉しくなんかねぇぞ！！」
その、表情から消えない微笑の壁を、何とか打ち破りたくて、一護は声の限りに叫んだ。
そしてやちるに手を伸ばす。

「こっちへ来い！！」
「ダメだよ。だって、穿界門を壊すには、こっちからじゃなきゃ、できないもん」
「だから、壊すなって言ってんだ！諦めんなやちる！」
諦めるな。その言葉に、やちるはにっこり笑った。
「いっちーのそういうトコ、大好きだよ」
笑みをたたえたまま、一歩後ろに引いた。手にした斬魂刀は、ますます光を増してきている。

「いっちー。つるりんはね。本当にケンカが好きだから、現世でもし会ったら、相手してあげてね。
ゆーみんは、キレイ好きだから。手を洗ってから会わなくちゃ『美しくない』って言われちゃうよ？
ひっつんはねー・・・」
「やちる」
「ひっつんにはね、小さいとか言ったら怒るよ！そのうち背、伸び

ると思うんだけどなぁ」
「やちる！！！」
一護は、大声を出して、しゃべり続けるやちるを遮った。

「いっちー、お願いだよ」
その時、やちるは不思議な笑みを浮かべた。
「みんなのこと、あたし大好きだよ。だから護ってあげて」
ダン！！！
返事の変わりに、一護は結界を拳で叩いた。
拳がミシリと音を立て、血が飛び散っても、一護は結界を叩き続けた。
「いっちー、この結界、そっちからは壊れないよ」
「お前は・・・こっちへ来るんだ！！」

「剣ちゃんが、死んだよ」

不意に、やちるがそう言った。
「あァ？？」
結界に集中していた一護が、その言葉の意味を理解するのには、しばらく時間がかかった。
やがて、一護は血が流れる拳を、結界から離した。
「なん・・・っつった？今」
「剣ちゃんが・・・死んだよ」
やちるは、繰り返した。
その大きな瞳に、あっという間に涙が膨らみ、頬から零れ落ちてゆく。
しゃくりあげ、その場にかがみこんだやちるに、一護は手をさし伸ばそうとした。
頭を撫でようとしても、その指先は届かない。

「やちる」
更木のことが自分の全てだと、満面の笑みで言い切っていたやちる。
――　更木・・・
死んだなどとは、信じられない。
でも、泣きじゃくるやちるを見れば、それが嘘でないのは明らかだった。
でも。
なんとか、やちるだけでも連れ戻さなければ。
そう思った瞬間、涙を拭いたやちるが、急に斬魂刀の刀身を、結界に押し当てた。
「やちる！！」
しまった！
その行動の意味に気がついた時には、その斬魂刀から放たれた光が、辺りを真昼のように照らした。
ぐにゃり、と空間が歪む。
はるか後方に見えていた穿界門が、音も無く砕け散るのが見えた。

「もし、現世のみんなに会ったら、伝えて」
やちるの、涙に光る大きな瞳が、まっすぐに一護を見つめていた。
「あたしたちの後を追ってきちゃ、絶対にダメだよ、て」
「待て・・・！」
手を伸ばす一護に、ふわりと微笑を返す。
そして、迷いない動きで、一護に背を向けた。
「馬鹿野郎、戻れ！」
声を限りに怒鳴ったが、一護自身も、やちるの姿も、どんどん闇に飲まれてゆく。
ぼんやりとした景色の中。
やちるの姿が・・・ふわり、と揺らめき・・・光り輝くのが見えた。
――　え。

目を見開いた時には、やちるのいた処は、ぼんやりとした光の粒子に包まれ・・・やがて、消えた。
――「死神というのは、人間と違っていてな。霊子から生まれ、霊子に戻るのだ」
何気ない会話の中で聞いたルキアの声が、耳によみがえった。
――やちる。
そうか。
お前は、もう、とっくに・・・

次に気がついたとき、一護は、闇の中に立ち尽くしていた。
しかし、見下ろせば町の明かりが見える。上には、月が煌々と輝いている。
「・・・お・・・・」
――いっちー、お願いだよ。
やちるの声が、サァッと真っ白になった一護の脳裏をかすめてゆく。
――みんなのこと、あたし大好きだよ。だから護ってあげて
「おお・・・」
どこにも、気配を感じない。
やちるも、穿界門も、精霊廷も。
「うぁぁぁ!!!」
一護の慟哭が、闇の中に響き渡り・・・そして、闇に飲み込まれた。

VOL．42　たった一人の戦争―6　［約束］

それから、五年後の春。
平和な街を見下ろし、空中に佇んだ男は、ニヤリと笑みを浮かべた。
「死神がいなくなればこっちのモンだ。思う存分・・・狩らせてもらうぜ」

その顔の右半分は、仮面のようなもので覆われている。
口からは長い牙が伸びており、爪も異様に長い。
完全なヒトにも見えない、半人半妖のような外見だった。
破面にとってヒトの魂を食らうのは、本能のようなものだ。
笑みを浮かべたまま・・・街に下りようとしていたその破面の後ろから、声がかけられた。

「おい」
「あ？」
振り返り、反射的に腰に差した刀を引き抜く。
破面が立っているのは空中。ということは、声をかけられるのは人外の者だ。
破面が目にしたのは・・・空にはためく、漆黒の着物。
そして、漆黒の刃の切っ先を、破面に向けていた。
「・・・なんだ、てめえ・・・まさか死神じゃねえよな」

死神は、滅びたはずだ。
もっとも、5年前精霊廷に侵入しなかった自分には、詳細はわからないが。
オレンジ色の頭をした、死神に良く似た男は、その鳶色の瞳を破面に向けた。

「破面は、絶対に許さねぇ」

――　こいつ！

一瞬のうちに高まった霊圧に、破面は戦慄した。

――　死神どころじゃねえ・・・死神より強ぇ！

判断は一瞬。

破面は背中を向け、全力でその場から逃げ出そうとした。

ふわり、とその背後に、霊圧が迫る。

「ひい・・・！」

振り下ろされた刃の向こうに、怒りに燃える瞳が見えた、気がした。

「黒崎くん！大丈夫だった？」

道路に降り立った一護を迎えたのは、織姫だった。

長い栗色の髪はそのままに、ジャケットを羽織った織姫は、5年前とは比較にならないほど大人びている。

「おー、井上。悪ぃな、いっつも駆けつけてくれて」

「最近、黒崎くんのほうが全然たどり着くの早いよね」

ケガが無いのを確かめながら、織姫が一護を見上げて微笑む。

五年前、霊圧を全く感じ取れなかったのが嘘のようだ。

いまではその能力は、一護のほうが上ではないかと思う。

「ごめんね。あたしがもっと早く着いてれば、こんな傷残らなかったのに」

この5年間で一護が破面と戦った数は、ゆうに3ケタを超えている。

その死覇装の胸の部分に、そっと手のひらを置いた。

「バカヤロー。今、誰のおかげで生きてると思ってんだ」

そう言って、ニヤリと笑う一護の表情に、もう影は無い。

5年前、やちるの霊圧を追い、そして独りで戻ってきた一護は、そ

れから変わった。
――　あれは、自分を護ろうとしない戦い方だ。
その戦い方と、傷を見れば一目で分かった。
傷つけられても決して、敵を殺すまでは退かない。
その狂ったような戦いぶりに恐れをなしたのか、2年ほどたったとき、破面の数は激減した。

それでも、織姫は知っている。
傷つけ傷つけられても、血の匂いに慣れられず。
斃(たお)れた破面の群れの中で、独り苦悶の表情を浮かべていた一護の背中を。
――　それでも、護るのね。

どこにいるかも知れず、過去も失った死神たちのために。
でも・・・
織姫は考えずにはいられない。
一護を護ってくれるのは、一体誰なのだろう。

「ごめん・・・ね。黒崎くん」
気づけば、ポツリとつぶやいていた。
「あたしがもっと強ければ。黒崎くんと一緒に戦えればよかったのに」
いい終わるかいい終わらないうちに、ポン、と頭を叩かれる。
「いっ・・・たぁい！」
「お前らしくねーぞ、井上」
見上げると、一護の強い瞳とぶつかった。
いつの間にか一護の身長は、織姫より頭ひとつ分は高くなっている。
「俺が必要なのは、戦ってくれる奴じゃねーよ。ただ隣にいてくれる奴だ」
その瞳が、少しだけ気まずそうにゆがめられ、すぐに一護は背を向

けた。
「ヒトは、一人じゃ生きられねーからな！」
その言葉は。
たった一人で戦ってきた一護を思うと、織姫の胸に堪えた。
でも・・・
――　あたしも、力になれてるの？
そうでありたいと、強く強く思う。
タタッと小走りに、織姫は一護の隣に並ぼうとした、その時だった。

「！」
ふたりの動きが、同時に止まった。
「黒崎くん・・！」
どくん、と胸が高鳴る。
この霊圧は・・・そして、この場所は。
「ルキア・・・？」
忘れようも無い、一護がいつも傍にいた者の持つ気配。
それと同時にかすかに感じるのは、恋次、冬獅郎、乱菊・・・一角、弓親。

「まさか。出会っちまったのか・・・しかも、俺の家で」
これは偶然か？それとも何かの符牒か。
「ヤバイ、俺達でも、今のアイツらの霊圧を感じるってことは・・・」
それでは、破面に感づかれかねない。
「井上、お前はここにいろ。俺が向かう」
俺は何を言っているんだ？
しゃべっている自分の口が、別人に思える。
動揺・・・していた。この5年、凍り付いていた心が、突然溶け出

したように。
クロサキ医院までは、瞬歩を使えば、全力で5分もあればたどり着ける距離だった。

ぜえ、ぜえ、と己の息が弾む。
心を満たしていたのは、喜びと焦燥、そして不安が入り混じった気持ちだった。
あの6人がこの5年、どんな人生を歩んでいたのかはわからない。
見知らぬ者を見る、温度の無い瞳。
そんな目を、あの6人から向けられるのは、間違いない。

それでもいい。
一護は、唇をかんだ。
それでも、今度こそ、死神たちを護る。
約束・・・したのだから。

黒崎家のドアを急いで開けると同時に、一護は生身の体に戻った。
バタバタと足音を立てて、廊下を急ぎ足で歩く。
リビングのドアを開けた瞬間、
「一兄!」
泣きそうな顔をした夏梨の顔が視界に飛び込んできた。

「一兄、この人ルキアちゃんだろ? ここにいるの、冬獅郎だろ? みんな、あたしのこと知らないっていうんだ。あたしがオカシイのか?」
夏梨の向こうには、6つの視線を感じた。
5年たっても、見間違いようの無い、あの6人の死神の姿が、そこにはあった。

一護に向けられた瞳が、他人を見る其れだったのは、確か。
でも、噴き上げるように体の奥からこみ上げてきた懐かしさに、一護は一瞬心を奪われた。
――　変わってねぇ、な。
ルキアは相変わらす強い瞳でそこにいたし、隣には恋次がいた。
一角と弓親の眼光は、何かに飢えているかのように鋭い。
そして、程よい距離を保ちながらも、身内のような空気を漂わせた、冬獅郎と乱菊。

――　約束だよ、か。
一護は、やちるの言葉を思い出す。
死神たちを、護れなかった。精霊廷も、救えなかった。
だから今度こそ、必ず最後まで護り抜く。

一護は、夏梨に視線を戻した。
「・・・夏梨。この人たちは、別人だよ」

VOL．43　たった一人の戦争―7　［Don't Look Back］

「・・・すまねえ」
一護の声が薄暗がりに響き渡り、余韻が消えても・・・誰も言葉を発しなかった。
一護は、両膝を立てて座り、立てた膝の上に両腕を組んで、顔を伏せていた。
その表情は、分からない。

死覇装から覗いた腕に刻まれた、無数の傷を見て、ルキアは唇をかみ締めた。
――　5年間も・・・
たった一人で、破面と戦い続けるのが、どれほどに酷なことだったか。
その傷が、全てを物語っているように見えた。
辛かったな、という同情も。ありがとう、という感謝も。
どんな言葉も、口に出せば、薄っぺらく感じるほどに。

浦原が、そっと口を挟んだ。
「精霊廷に侵入していた三十体のヴァストローデも、その結界を破ることはかなわなかった。
この五年一度も、空座町にヴァストローデが現れたことは無い。
最も、アジューカスの襲撃はありましたが」
「アジューカスっつったら、ギリアンの次の階級だろ？それくれえなら・・・」
「・・・いいえ」
それを聞いていたルキアが、眉間にシワを寄せて口を出した。
貴族とはいえ平隊員であるルキアが、席官の一角の言葉をさえぎるなど、まずあることではない。

怪訝そうな視線を浴びながら、ルキアは慎重に言葉を選びながら続けた。

「さっき会った、鉄逸輝、という少年が、グリムジョーという破面を見て言っていました。
『アジューカスじゃねえか。とんだ雑魚つかんじまった』・・・と。
後で思い出したのだが、あのグリムジョーという男、十刃の一人ではなかったかと」
ルキアの、最後の記憶。
それは、グリムジョーにやられ、傷ついた一護を庇い戦った時のものだ。
斃したと思っていた敵に、いきなり顔を鷲掴みにされた驚きと恐怖は、いまだ生々しくよみがえってくる。

弓親が険しい表情で、ルキアを問い詰めるように言った。
「ちょっと待ってくれよ。十刃は、破面の中でも最強の戦闘部隊じゃないのかい？
当然、ヴァストローデだとばかり思っていた」
「参考までに申し上げましょう。グリムジョーの階級は6。
日番谷隊長が戦ったルピと同じといえば、大体の強さは分かりますか」
「・・・！」
冬獅郎が、頬杖をついていた顎を上げて、浦原を見やった。

「アイツは、隊長格よりはわずかに弱かった。
あのレベルの破面なら、隊長なら苦戦しながらでも斃すだろう。
まぁ、油断したらやられるが。・・・そのレベルが、アジューカスだってのか」
「貴方がたは、ヴァストローデの恐ろしさを知らないんですよ」
浦原が、帽子の鍔の奥で、囁くように言った。

「ここに座って、一日霊圧を感じてみれば分かりますよ。
ヴァストローデの、遠くに感じるだけで総毛立つような強さを」
その底の知れない暗い瞳に、その場の全員が黙り込んだ。
浦原の目が、次に一護に向けられる。

「もっとも、今の黒崎サンが本気を出せば、斬り結ぶことくらいはできそうですがね」
「・・・足りねえよ、ぜんぜん」
浦原の言葉にかぶせるように、一護がつぶやいた。
「強くなりてぇ」
搾り出すような声が、発せられる。

「一護。この場の誰が、あんたを責められるっていうのよ。顔をあげなさい」
うつむいたままの一護に声をかけたのは、乱菊だった。
「でも俺は・・・やちるも、護ってやれなかった」
「バカにしないでほしいね」
一護が、ハッと顔を上げた。視線の先には、弓親の姿があった。
「知っているかい？死神とは、自分の意志で辞めることができないんだよ。
死神が死神でなくなるときは、死ぬ時だよ。
物理的な死だったり、精神的な死だったり。死に方は違うが、ほぼ例外なく、ね」
一護が、充血した目を弓親に向けたまま、黙っている。

「ヒトの命を奪い続ける仕事なんだ。命を奪われて終わるのは、因果応報なんだろうね。
死神になる者には、全員覚悟があるんだよ。殺す覚悟と、そして殺される覚悟だ」
「やちるも、覚悟があったって言いてえのか？」

「例え僕達が、副隊長に何を望んでいたとしてもね」
少なくとも。
こんな結末を、誰も望んでいなかったはずだ。
その場は、重い沈黙に包まれた。まるで、黙祷のように。

「今、戦いがどうなってるか、分かるのか」
冬獅郎が、浦原を見やった。浦原は頷く。
「この5年で、更に精密な霊圧探知機を開発しましてね。たいていのことは測定できます。
現在、精霊廷にいるヴァストローデらしき巨大な霊圧の持ち主は、合わせて七体。
現在立ち向かっている霊圧は死神ではない・・・霊圧の強さから言って、王属特務でしょう」
「・・・五年も、決着がつかねえもんなのか？」
冬獅郎が、眉間に皺を寄せた。
「何かある、でしょうね。ここまで長引いた理由が」
浦原はその理由は明言しなかった。
というよりも、どれほど精密な霊圧探知機だとしても、裏に潜んだ事情などは探りようがあるまい。

「ただここに来て、互いの霊圧がかつて無いほどに高まっています。
特に、王属特務側の、ね。
単体の力が上がっているんじゃない、今までいなかった者たちが、どんどん集結しつつあるんです。
あの鉄家の若君のようにね。」
ルキアと恋次が顔を見あわせた。

鉄逸輝、と名乗った、死覇装の上に手甲脚絆を身につけた少年。
闇の沼から上がってきたかのような、その冥(くら)い気配。
そして、記憶が戻った今なら分かる。

アジューカスを雑魚と呼び、グリムジョーを軽くいなした少年の実力が、どれほどのものかを。

「均衡が一気に崩れる。我々とて無関係ではない。死神亡き今、結界がいつ壊れてもおかしくないんだ。・・・イヤ、もう壊れていないとも限らない」

「ここから、精霊廷に行くことは？」

「論外、とお答えしましょう」

冬獅郎の問いに、浦原は言下に言い放った。

「まず、今のところ手段が無い。そして、万が一辿りつけても、死神が何とかできるレベルじゃない。大体、行く理由がありますか？」

「生き残りがいるかもしれねーだろ」

「で！でも、ギンは・・・」

乱菊が、たまりかねたかのように、口を挟んだ。

「ギンは・・・最後の一人まで、死神は殺したって・・・」

「あんな適当な奴の言うこと、当てになるか」

冬獅郎はあっさりと返した。

「隊長が全員死んだかどうかすら、破面どもは確かめてねーじゃねえか」

その言葉に、ハッ、と死神たちが顔を上げた。

冬獅郎が今この場に生きていることこそ、破面が隊長の死を全員分確認していない、ということになるはずだ。

「ソウル・ソサエティは広い。霊圧を消して隠れれば、見つけ出すことなんて出来ねぇはずだ」

「そうだ・・・もしかすれば！」

恋次とルキアが顔を見合わせる。

その表情には、初めて生気が宿ったように見えた。

タン！
一瞬浮き立った気持ちに振り下ろすように、浦原が、懐から出した扇子で、机の角を打った。
「アタマ冷やしたほうがいいっスよ」
冷酷、とも言っていい声音が、浦原から放たれた。
「それがどれほど無謀な賭けか、知らない訳じゃないでしょう。
山本総隊長は5年前、アナタたちに、生きるように最後の命令を下した。
草鹿サンの言葉を聞けば、他の死神もそれを知っていたのは明らかだ。
玉砕覚悟で結界を閉じたのは、アナタたちに生き残ってほしいと願っていたからだ。
違いますか？」
「しかし、俺達は死神だ！」
「だからといって、これまでの5年が消えてなくなるわけじゃない！！」
浦原の似合わぬ大声に、度肝を抜かれたように冬獅郎が、黙った。

「例え仮初の生活だとしても。貴方がたがすごした5年は『ホンモノ』だ。
捨てられるのですか？死神に戻るということは、そういうことですよ」
冬獅郎と、乱菊が。
恋次と、ルキアが。
それぞれ、顔を見合わせる。
互いの考えを、探るように。

「何事もなかったように。すべて忘れて現世で生きろって言いてぇのか・・・」

ギリ、と冬獅郎が歯をかみ締めた。
押さえ込んでいた霊圧が、その激情に触発されたように迸りだす。
「精霊廷は、俺達にとってルーツなんだ！！ルーツに立ち戻って一体何が悪・・・！」
――「ルーツを求めては、ダメよ」
その刹那、雛森が去り際に言い残した言葉が、冬獅郎の頭でフラッシュバックした。
――「絶対にあたしたちの後を追ってきちゃだめだよ」
やちるが言い残したという言葉も。
冬獅郎は、言葉を失ったように立ち尽くしたまま、浦原を見下ろした。
「・・・な、ンで。皆同じコトを言う？」

バン！！！
突然畳の上に手のひらをつき、土下座した浦原を、一同はあっけに取られて凝視した。
「どうか。これから破面に襲われるだろう、この街を護ってください。
間違っても、精霊廷だけには戻らないように。
そうすれば仮初も本物もない、全てが『無』に帰してしまう――」
浦原は、それだけ言い終わると、しばらく頭を下げたままでいた。

VOL．44　SAYONARA―1　［弓親、一角］

吹き抜ける風は生ぬるく、季節が夏に向かっていることを思わせた。
人通りの無い、暗い道。
切れかけた街灯がジジ・・・と音を立て、蝶がまとわりつく。
光の中で散った燐粉が、弓親の目にやけに儚く見えた。

話が終わった後、冬獅郎が死神全員を見渡して、かみ締めるように言った言葉が胸に残っていた。
――　「日番谷隊長。私達はこれから・・・」
――　「やめろ朽木」
口に出しかけた言葉を、ルキアが飲み込んで冬獅郎を見返した。
――　「護廷十三隊が滅びたってのに、隊長がいるのも滑稽な話だ。俺はもう、隊長じゃない。命令もしない。自分達がどうするのか、自分達で選ぶんだ」

それでも、貴方は隊首羽織を脱がないじゃないか。
そう思いながらも、弓親は何も言わなかった。
精霊廷時代から、彼は常に隊長である自覚を強く持っていたように思う。
そして今もきっと、誰よりも自分の使命をを背負おうとしているはずだ。

――　僕達も、選ばなければ。
もう既に、選択肢はないと思っているけれど。
弓親は、先を行く一角の、Tシャツをまとった背中を見た。
今朝までは何も思わなかったのに、死覇装を纏っていないことが変に見えるのだから、記憶とは妙なものだ。

「気に入らねーーーなぁ」
不意に、一角が夜空を見上げ、大声を出した。
「どれがだい？」
思わず弓親は聞き返した。
気に入らないことなんて、両手で数え切れないくらい聞かされた気がした。
「山本総隊長の采配だよ。俺ら以外の人選はまだ分かるが、俺達を戦いから外すなんてよ。
あの４人だけにしとけってんだ」
「僕たち６人は、現世で何も知らずに子供でも作れってことだったんじゃない？
死神から生まれた子供は、『真血※』だ。
強力な死神になる可能性が強いからね。・・・黒崎一護のように」
「子作りだぁ？」
ハン、と一角は鼻で笑った。

「それこそ、日番谷隊長と松本、恋次と朽木に任しとけばよかったんだ」
「そ・・・それは禁句だよ、一角」
「何がだよ？日番谷隊長と松本なんか、一緒に暮らしてただろうが！何を今更」
「だから、それはあの二人の前では、二度と言っちゃだめだ」
弓親は、両方の手のひらを一角に向けて、ため息混じりに一角を止めた。

「隊長と副隊長が恋人同士なんてご法度だ」
「ご法度だぁ？精霊廷がねえのに、誰が罰するんだよ」
「あの二人はアレでマジメなんだ。

大体、恋人に背中を護らせるなんて、日番谷隊長にはムリだ」
「そして、あの二人は必ず死神に戻る」
一角が、弓親の後を引き継ぐように続けた。

どれほど真実に愛し合っていたとしても。その5年は、必ず死神だった年月に負ける。
あの二人のことを考えれば、それは間違いないように思えた。
――　本当は、無理やりにでも、僕達以外の4人には、ヒトとして暮らしてほしいけどね。
再び眠りについた乱菊を見下ろした日番谷が見せた、優しい微笑み。
これが最期といわんばかりに、食い入るように見つめていた。
そして振り返ることなく、障子を開けて姿を消した。
その後、二人で言葉も無く、ルキアと恋次が立った。
夜道を肩を並べて去ってゆく姿は、まるで寄り添っているように見えた。

――　例え仮初の生活だとしても。貴方がたがすごした5年は『ホンモノ』だ。
一角には想像がつかないかもしれない。
でも弓親には、浦原の言うことも、少しだけわかるのだ。
「取り繕ってる場合じゃないよ。しがみついてでも護らなきゃいけないものもあるのに」
「ん？なんだ弓親？」
つぶやいた弓親の声に一角が聞き返したが、弓親は黙って首を振った。

「イヤ。精霊廷に生き残りがいるにしろ、いないにしろ。
更木隊長が亡くなられたのは、間違いないだろうね」
別の言葉に摩り替えた。
口にしてみると、それは意外と湿っぽくは無く。

ただ、それは厳然たる事実なのだということが、自分の声を聞くと同時に分かった。
「あぁ」
一角も同じ思いだったのだろう、すぐに頷いた。
「もしも生きてたら、あんなガキどもに、こんな楽しそうな戦いを任せておくはずねえ」
「そして・・・副隊長も」
「・・・だろうな」
一角は、うつむいた。

――　剣ちゃんはあたしの全てだから。剣ちゃんの傍にいられれば、幸せなの。
何の衒いもなく、そういっていたやちるの笑みを思い出す。
そんな風に、あっけらかんと笑ってそんなこといえるうちは、まだ分かってねーんだよ。
――　バカヤローが。
どうぜ、更木隊長がどれほど望んでも、傍を離れたりしなかったんだろう。
誰かが誰かに、生き方を押し付けることなんて傲慢だと、分かっている。
それでも。
「普通の女性として、いつか死神なんて辞めて、幸せになってくれればいい。
・・・みんな、そう願っていたのに」
弓親の言葉に、一角は黙って、地面に唾を吐いた。

人の気もしらねえで、勝手に死にやがって。
「・・・これから、祭りが始まるよ」
「あぁ。大物は後から来るって言うしな」

「だから。涙は最後にしなよ」
「うっせーよ」
一角は苦々しく吐き捨てるつもりだったのだろう。
しかし、その語尾は苦しそうに掠れた。
まるで空気を求めるかのように、一角は空を仰ぎ見た。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

※真血
原作によると、片親でも死神の場合、生まれた子供は「真血」と呼ばれるらしいです。
えてして、強い力を得ることが多いとか。

VOL．45　SAYONARA_2　［ルキア、恋次］

薄いピンクのワンピースの裾が、夜風に揺れる。
その後姿からは、悲しんでいるのか、憤っているのか、それとも恐れているのか、まるで分からない。
後ろを歩く恋次のことを忘れたかのように見えるが、だからと言って放っておけなかった。
すでに恋次の家は通り過ぎてしまっていたが、それでも恋次は、ゆっくりとした大股で、ルキアとの距離を一定に保ったまま、歩き続けていた。

――「あたし。藍染隊長と一緒に働けるよう、絶対がんばるんだから！」
ふと頭に飛び込んできたのは、はるか昔の雛森の言葉。
――「雛森くんは、藍染隊長のこと・・・尊敬、しているんだよね？」
雛森のちょっと後ろを歩いていた吉良が、チラリと雛森の顔色をうかがう。
――「と、と、当然よ！尊敬よ、尊敬してるの」
言葉とは裏腹に、あからさまに動揺する雛森を見て・・・吉良がガックリとうなだれる。

――「オイ、お前は中に入らないのかよ」
仏頂面で先を歩く恋次に話しかけたのは、檜佐木だった。
ニヤリ、とからかうように口角をあげた、その表情を見た恋次が顔をしかめる。
――「もう飽きたっスよ、この会話聞かされるのも」

「飽きた、かよ」
恋次は、皮肉につぶやいた。
全く実感が無いが、死神が滅亡したというのがもし事実なら。
吉良も、檜佐木も、この世にはもういないことになる。
雛森に至っては・・・
「・・・ちくしょう」
恋次は、気づけば拳を強く握り締めていた。

一体どうして、大事なものはいつもいつも、当たり前の顔をしてそこにあるのだろう。
なぜ気づかなかったと、失ったその瞬間に罰を当てるためだろうか。
その恋次の声を聞きつけたのろう。
ハッと気づけば、振り返ったルキアが、全てを見通すような、その大きな目で恋次を見つめていた。

――　血縁、か。
冬獅郎と乱菊の噂を学校で聞いたとき、胸を横切った寂しさをルキアは思い出す。
本当に血がつながっているのか。
それとも、つながっていると嘘をついているのか。
盛り上がっているクラスメートをよそに、ルキアはさびしい思いをかみ締めていた。

どちらだとしても、家族を持たないルキアには、うらやましかった。
いや・・・どちらかというと、後者のほうがうらやましかったかもしれない。
血がつながっていないのに、「血縁がある」といえるほどに確かな

関係が、ほしかった。

思えば、それは。
この記憶のせいだったのかも知れぬと、ルキアは思う。
さっそうと歩く、迷いない足取り。
ふわり、と肩にかけた肩掛(ショール)が、風にゆらめく。
――　白哉様。
屋敷の者たちに次々と声をかけられ、平坦な声でそれに返す低い声音が聞こえる。
――　兄様。
声をかけたいのに、どうやって声をかけたらいいのか、分からない。
兄でありながら、心根が全く分からない男を、ルキアはずっと、遠くから見つめることしかできなかった。
何のためらいも無く兄と呼べれば。
それだけでいい、と思えるほどに。

「・・・ルキア」
恋次は、その場に突っ立ったまま、ルキアを凝視した。
「どうした」
そういい終わらぬうちに、瞳の中に膨らんだ涙が、頬を零れ落ちた。
「兄様は、死んではおらぬだろう？恋次・・・。
死ぬはずがないのだ、兄様は強い方だから・・・」
まるで、何かを説得するように、懇願するように、ルキアは繰り返した。
「ルキア！」

返事の代わりに、嗚咽するルキアの肩を、恋次はぐっと引き寄せた。
そして、その胸の中に抱きしめる。
ルキアはビクリ、と一瞬肩を震わせたが、何も言わず恋次の胸に収まった。

返してやれる言葉など、あるはずがなかった。
あの朽木白哉が、そう簡単に命を落とすとは思えない。
しかしまた、最前線で戦っただろうことも確かなのだ。
「落ち着け、ルキア」

恋次の中をその時通り過ぎたのは、この少女を愛した、この五年間のことだった。
無くなるわけじゃない、と恋次は自分に言い聞かせる。
この少女が心に占める割合は、死神だったころも、この5年も。
そしてこれからも、変わりはしない。

「俺達は、死神だろ」
嗚咽が、ぴたりと止まった。
「死神は死に涙してはならない。仲間の死にも、人間の死にも、虚の死にも」
それは、彼らが学んだ真央霊術院で、一年目の初めに学ぶ、死神の心得だった。
「・・・死を司る者として、死の超越者であれ。か」
続けたのは、意外なほどに冷静なルキアの声だった。
恋次の胸に拳を置き、身を起こしながら、彼女は続けた。
「だが・・・それほどヒトは、強くはなれぬ」
「お前」
恋次が何かを続けようとする前に、ルキアは思いを振り払うように、恋次から離れた。

「精霊廷に戻るぞ、恋次」
恋次を見上げるその目には、強い光が宿っていた。
「日番谷隊長がおっしゃっていただろう？
万が一にでも死神が生きている可能性があるなら、私はそれに賭けたい」
「・・・だな」
恋次は、強さを取り戻したルキアのまなざしに、一抹の寂しさを覚えながらも、頷く。
「何事もなかったかのように、普通に現世で生きてくなんて・・・できるわけねーよ」
例え、それが総隊長初め、死神たちの総意にそむくことになったとしても。

「恋次」
先に立って、数歩歩いたルキアが、不意に振り返った。
「ありがとう」
そう言ったのは、この5年のルキアなのか、死神のルキアなのか。
その笑顔からは、もううかがい知ることは出来ない。
「・・・馬鹿ヤロウ」
恋次は微笑み、再び背を向けたルキアの後を追った。

VOL．46　SAYONARA_3　［冬獅郎、乱菊］

そのころ乱菊は、家路を急いでいた。
目を覚ました乱菊が、浦原から
「日番谷サンは先に家に戻られましたよ。貴方には、一晩ここで体を休めるようにと」
そう言伝を聞かされたのは、今から３０分前。
「なんで起こさなかったのよ！」
八つ当たりと知りながらそう怒鳴り、布団を蹴飛ばす勢いで、外に飛び出していた。

なんとなく、分かっていた。
冬獅郎は、家を出る気でいる。
恋人同士、という関係を続けてゆけないことは、間違いないと思えた。
でも最後に・・・「日番谷隊長」とではなく、「冬獅郎」と言葉を、交わしたかった。
それは、彼が家を出てしまう前、今でなければならないのだ。

――　一体、なんでかしらね・・・
早足で歩きながら、乱菊はひとり、想いに駆られた。
冬獅郎と自分は、水と油みたいに相性がよくなかった。
いつだって淡白で、無口で、口を開けばどこまでも、まっすぐなことしか言わない冬獅郎と。
いつだって感情的で、考えなしで、ルールから外れようが一向気にしない乱菊と。
どうしてこれだけ、大切に思ってしまっていたのだろう。

自分から引き離すことなんてどうやったらできるのか、見当もつかないくらいに。

――　隊長と副隊長の関係だったから？

マンションの入り口に飛び込み、エレベーターのボタンを押す。

中々こないエレベーターに苛立ち、傍の階段に飛び込んだ。

「ちがう、な」

乱菊はつぶやく。

死神だった頃の自分が「日番谷隊長」に感じていた気持ちと、今の自分が「冬獅郎」に思う気持ちは違う。

出会って、惹かれて、一緒に暮らしたこの「あたし」だ。

――　あなたは今、何を思うの・・・？

バン、とマンションのドアを開ける。そして・・・その場に、固まった。

乱菊はドアの内側に立ち、真っ暗な部屋を、しばらく黙って見つめていた。

その顔に浮かんでいたのは、冬獅郎に見せたことは一度も無い、孤独な無表情だった。

――　分かってたわ。こうなることは。

パチッと電気をつけ、靴を脱ぎ捨てる。

隊長と副隊長が恋仲なんて、精霊廷が滅びたとしても、越えてはならない一線だった。

おそらくいったん家に帰り、荷物をまとめた後、どこかへ出て行ったのだろう。

一角か弓親のところか、浦原商店に戻ったのかもしれない。

ただ確実なのは、冬獅郎が二度とここには戻ってこない、というこ

とだった。
――　霊圧も感じないか・・・
追ってさえこさせない。
断固とした冬獅郎の決意を、突きつけられた気分だった。

「やっぱり、聞けばよかったわ」
ふらり、とリビングに入り、乱菊は力なくつぶやいた。
愛してる、という言葉を。
乱菊、と名前を呼ばれるところを。
ワガママでも子供っぽくてもいい。
あの時にもっとねだればよかったんだ。
でも・・・あれが最後のチャンスだったなんて。夢にも思ってはいなかったのだ。

「・・・日番谷隊長」
目を閉じて、そうつぶやく。
自分に言い聞かせるように。
これからは、不意に間違っても、決して「冬獅郎」と呼んではならないのだ。
不思議なくらい・・・その呼び方は、しっくりと馴染んでこなかった。
5年以前は、毎日何十回と口にした呼び名だったはずなのに。

「・・・なに？」
部屋の中を一瞥した乱菊は、ひとつだけ朝と違うものを見つけ、眉間にシワを寄せた。
「これ・・・」
テーブルの上に無造作に置かれた、小さな紙袋。
それを見ただけで、トクン、と心臓が一度、はねた。
そのサイズを見れば、中に何が入っているかは、想像がついたから

だ。
テーブルの前に座り、その紙袋の中身に、そっと手を伸ばす。
そこから出てきたのは・・・リボンのひとつもかけられていないが、5センチ四方くらいの、小さな箱だった。

「ジュエリーショップなんて、絶対イヤがるタイプなのに・・・」
乱菊はほろ苦く微笑んだ。
包装はいりません、とかたくなに拒絶した姿が目に見えるようだった。
きっとこれは、自分と仲直りするために、冬獅郎が買ったものだろう。
おそらく、何事も無ければ・・・
冬獅郎と自分は、どこかでディナーを愉しみ、そしておもむろに、これが渡されたのだろう。
どこかで道を間違えてしまった未来に想いを馳せるように、乱菊はしばらく箱を見下ろしたままでいた。

少し迷ったが、その箱をスッと開ける。
「・・・ラピスラズリ」
それは、小さなラピスラズリの石をアクセントにした、華奢なつくりのネックレスだった。
その蒼い輝きは、どこか乱菊の瞳の色にも似て。
蛍光灯の燈のなかでも、深く澄んだ輝きを放っていた。
箱の中にあった説明書に、乱菊は視線を落とす。
そこには、ラピスラズリの意味として、こう書かれていた。

「永遠の誓い」

――　ダメだ。
一瞬の空白のあと、乱菊は自分に言い聞かせた。

明日からは、自分は副隊長に戻るのだ。
そして彼の背中を護る。
そうでなくては、ならないのだ。
ゆっくりとネックレスを箱の中に戻し、そっと蓋を閉める。
「・・・っ」
涙が一しずく、箱に落ちそうになったのを見て、乱菊は箱を遠ざけた。

「冬獅郎・・・」
ダメだ。
もう一度そう思った。
どこまで。どこまで、強くなければならないのだろう。
あたしは・・・この気持ちに、嘘を突き通せる自信さえ無いのに。
そんなに、強くない。
乱菊はテーブルに突っ伏し・・・子供のようにしゃくりあげた。

嗚咽がひそやかに、部屋の中からベランダにも流れてくる。
日番谷冬獅郎は、ベランダのガラス戸にもたれ、夜空を見上げていた。
カーテンの向こうで、全身で自分を求めるひとの、気配を感じていた。

――　俺にとって他人は、モニターに映っては通り過ぎる、風景と同じだったんだ。
目に見えるし、近づけるけど、決して触れることは無い。
ましてや、モニターの向こうの相手に何かを求めるなんて・・・夢

にも考えたりは、しない。
それは、ほんの数時間前、自分で自分に言い聞かせていたことだ。
これまで、そうやって生きてきた。

「それでも」

冬獅郎はその時、頼りなげな視線を夜空へと向けた。
「それでも、俺は・・・」

お前のためなら、モニターの中の風景に手を指し伸ばす勇気を持っても良かった。
そしてお前なら、モニターの中からただ一人俺に気づき、手を取ってくれると信じていたんだ。

選べなかった未来の片割れが、ガラス戸の向こうで泣いている。
月光を受け、いよいよ白い頬を、一筋の涙が零れ落ちた。

――　第二部につづく

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9692d/

ＲＯＯＴＳ

2010年10月9日18時22分発行